江戸の恋とんび

早乙女貢

春陽文庫

A－22－31

宝暦（一七五一～六二）の江戸文化華やかなころ――江戸名題役者、市村座の座頭・初代尾上菊五郎の人気には高いものがあった。その菊五郎に瓜二つのいい男、それは本所弁天小路に住む御家人高木左京こうでの左京であった！　左京の左腕には無数の刀傷があった！

東軍流殺人剣の使い手左京は、脇差を己の腕に突きたて、富裕な商家をゆすって歩く無頼旗本であったが……。葺屋町で油商音羽屋を営む菊五郎の家が火を出したことに怒った暴徒の一団が襲ってきたとき、その急場を救ってやったのがうでの左京であった！

初春狂言でにぎわう市村座見物に出かけた左京と弟分の元次郎は捕り手に囲まれたが、菊五郎の女房お浜の機転でその難局を脱した！　――二人菊五郎がまきおこす事件の展開は!?

装画＊東啓三郎

早乙女貢
江戸の恋とんび

春陽文庫

江戸の恋とんび

早乙女貢

春陽文庫 A 22 31 320

定価320円
0193-012231-3066

春陽文庫

2340

江戸の恋とんび

早乙女貢

春陽堂

江戸の恋とんび

早乙女貢

春陽文庫

春陽文庫

江戸の恋とんび

早乙女貢

春陽堂

目次

恋い扇……二
あばれ旗本……二五
黄菊白菊……三〇
初春狂言……三五
血ふぶく花道……一〇四
くちびるを吸う色行燈……三七
化粧くずれ……四五
雨夜駕籠……一六一
濡れる肌……一七六
見果てぬ夢……一九
揚げひばり……二三

江戸の恋とんび

恋い扇

1

土砂降りをさけて、とびこんだ髪結い床だった。粋なつもりで、剃刀をあてさせない月代を、五分ばかりにそろえて、ぼんのくぼの辺にスキばさみをいれさせ、慣れた手つきの櫛が入ると、すっと、ふつか酔いの頭が澄んでくる。

「ああ、さっぱりしたぜ」

「へえ、あがりかけましたようで」

と、床七が、往来をながめる。

「雨かえ？　頭のことさ。どこの油を使っているんだえ」

「へえ、へえ、これでございますか、音羽屋の伽羅油で」

「そうか、まんざら、評判も根なし草じゃねえようだ。あ、元結は白鷺のいいやつをしめてくンな、少しきつめにの」

髪結いのもうけは、髪油と元結だ。床七、ぺこりとして、

「へえへえ、だんなにはやっぱり極上がお似合いで」

「世辞アよしな、せっかくすっきりしたのが胸くそ悪くならアな」

といいながら、悪い気持ちはしない。

さっきのはげしい勢いもなくなって、往来は静かな時雨にけむっている。秋のやわらかい日が、灰色の雲のうしろに感じられる八つ下がりの柳橋だった。

「音羽屋といえば、菊五郎も、今度ア大変なことでございましたね」

「油屋火事かえ」

「へえ、とんだこって」

「あんまり女のコにモテ過ぎたせいだろう、この界隈でも、菊五郎に入れあげたのが沢山いるだろう」

「へえ、まア……」

「役者のくせに、商売にまで手を出すからにゃ天罰ってエやつさ」

と、左京は鼻でわらった。

初代尾上菊五郎は当時、大江戸三芝居の一つ、市村座の座頭だった。

生来美貌の上に、生まれが浪花で、初舞台が京——という、役者には最適のコースを踏んできているので、その所作のやわらかみが（のちには武道実事専門となったが）当初、和事の役者として、不惑すぎにもかかわらず、まだ江戸の婦女子の人気を呼んでいた。

彼と兄弟分のまじわりをしている者に、二代目阪東彦三郎がある。俳名を薪水というのだが、東都の人気を等分にしているほどで、女子供は、彦三郎の定紋、鶴の丸や薪水の二字を、手ぬぐいに染め出したり、たばこ入れ、鼻紙袋などに縫いとりするほどだ。熱に浮かされた者は、く

し、かんざしに打たせるのはまだしも、小袖にまで縫い紋して見せびらかす。

菊五郎びいきも同じことで、定紋（重ね扇）と、俳名の梅幸の二字を、身のまわりに染めわけ、縫い紋すること、薪水ファンに劣らない。

この二人が組んで、葺屋町の、市村座近くに、油店を出したのがこの秋ぐちのことだ。

そのときつけた屋号が音羽屋。菊五郎の父を音羽屋半平といったからである。また、師匠すじが尾上で、以来音羽屋は切っても切れない縁が出来たわけだが、それはともかく、当代最高の人気者二人の店、というので、すばらしく繁盛した。

間口五間に奥行七間の塗り家作り、店の置き看板は縦一間に横三尺、縁が朱塗りで中は黒のため塗り、その上に、左右に重ね扇と鶴の丸をメッキですえつけただけでなく、店の若い衆三十人ほどに着せた半纏のちらし紋様が、重ね扇を鳶色で、鶴の丸が花色。

店びらきの日には、町抱えの威勢のいい者を八人ほど同じ股引き半纏で来客の道しるべと、整理にあたらせたほど混雑した。

伽羅油、丁字油、つばき油を吟味して、売らせたから、人気の上に、品質の良さが加味されて、評判は、江戸御府内にのみとどまらず、遠国からまで、もとめにくる。

「江戸の土産は、浅草のりに、役者の錦絵と、音羽屋の髪油――」

と、もてはやされるようになった。

それが、この十月に入って間もない一昨日。

油練り場から火が出た。

「――悪いことに北風がひどうござンしたからねえ、だんな、見にいらっしゃいましたかね」

「何を？」

「葺屋町の焼けあとを」

「ふん、谷中の菊人形は毎年欠かしたことはねえのだが、今年ばっかりはよしにしたぜ」

「へ？」

「菊五郎の戸名瀬人形が飾りつけ一番だと聞いて、うでの左京が、のこのこ谷中に行けるかよ」

2

「へえ、へえ、こりゃアお見それしまして」

うでの左京、といわれて、

――とんでもねえやつが……

と、床七は、そり終えたばかりの、左京の顔を見なおした。

なるほど、本所の菊五郎、とうわさだけの、いい男まえだ。大ぶりの鼻のかたち、くちもとのしまり具合い、描いたようなまゆなど、菊五郎そっくりだ。

「お見それするこたアねえよ」

「へえ、いいえ、なんとも、へえ……」

床七、もうあきらめている。

――こいつとはじめっからわかりゃ、白鷺の元結や伽羅油なンか、つかやしなかったのによ――

「――すんだかえ、親方」

と、ほおをなでながら、左京は、手鏡に顔をうつす。
「剃刀をもっと研いでおくがいいぜ——じゃました」
さらりと、雨あがりの外へ出ようとするのを、葛飾から来たばかりの若い下ぞりが、
「あの、だんなさま」
ん？　と不審そうにふりむく左京。
「お代を……」
という下ぞりのそでを床七がひくのと、左京が左そでをぐいとたくしあげるのが同時だった。
あっ……と、下ぞりの顔が変わった。
左京は鼻さきにあざけるような笑いを浮かべて、
「床七、こいつアお江戸の水が飲みなれねえようだなア」
「へえ、へえ、ご勘弁を」
「勘弁するもしねえもねえさ」
左京は、むきだしになったたくましい左腕をぱんぱんと、手のひらでうって、
「ひろいお江戸で、この腕を知らねえやつア一人もいねえと思っていたぜ」
「へえ、へえ、よオく申し聞かしておきますから、へえ」
「そうしてくンな。手間がかかっていけねえやな」
黒紋服に落とし差しが似合う姿だ。
じろりと下ぞりをにらんで、そでをおろすと、ぷいっと外へ出る。
外は、うすい秋の日がさして、あたたかい霧の雨。左すそをちょいとつまんで、水たまりをよ

けながら、馬喰町のほうへ歩いていく本所の菊五郎、絵にしたいようなうしろ姿だが、下ぞりは胴ぶるいがとまらない。
「あの腕を見たかえ」
「へい」
「あのうでを忘れちゃ、首がすっとぶからね、用心をしたがいい」
順番を待つような顔で、片すみで黄表紙をめくっていた若い男が、
「床七、うでの左京は、いつかおいらがおなわにしてやるぜ」
と、立ちあがった。
「前からねらっているンだが、ごろん棒でもとにかくお旗本だ。髪結い代の踏み倒しぐれエじゃ、おなわにゃ出来ねえし」
「へえ、そりゃそうで、と、親方、ひげが少しのびたようで、あたりやしょうか」
「そうか、いつもすまねえな」
薬研堀の与七、とりだした十手をちょっとそでで、みがいて、懐中にした。
——この野郎だって、同じようなもンだアな……
床七、ためいきをついて、
「留公、湯がぬるくなっているぜ」
と、下ぞりにどなった。

3

「――二百両はさておいて、そのほか一間出入りの屋敷、かたりつくしてこのありさま……とくらァ」

左京、歌うようなつぶやくような、明烏の伊太八で、ぶらぶら歩いていく。

「そなたもともに、といいたいが、いとしそなたを手にかけて、どうなるものぞ、長らえて、我がなき跡でいっぺんの回向を頼むさらばやと……か、勝っ手にしやがれ、こちとらァ回向をとむらってくれるやつなンざ一人もいやしねえ」

まったく、一門類葉かたりつくして、げじげじのようにきらわれている左京だ。

下ぞりが青くなったり、薬研堀の岡っ引き与七が十手を空ぶりさせるのも道理、だれでも左京の左腕を見たら一驚する。

たくましい腕が傷だらけ。

新しいのもあれば古いのもある。古傷と交差して、なまなましい刀傷が、いまにも血を吹きだしそうに――縦横無尽に腕を切りさいなんでいる。

これが、左京の、うでのといわれるゆえんだし、おもて看板のなりわいだ。

「高木左京もゆすりにおちたか」

本所弁天小路に近く、御家人としては分にすぎる、かなり広い屋敷があるが、左京には、生まれつき無頼の血が流れているのか、東軍流の剣術免許の腕前をいいことにして放埒な毎日だった。

宝暦といえば、加賀で、大槻伝蔵の有名な前田騒動があり、歴史的にも竹内式部ほか公卿十七

名が処分されたいわゆる宝暦事件。田沼意次が諸侯に列し、地盤を固めているころで、風紀紊乱、旗本八万騎でもろくに剣の出来るやつはいなくなっている時代である。

ちょっと見には左京は無役小普請組で捨てておくのは惜しい風采、器量だ。

腕ばかりではない、先にも述べたように、上背があって、男前は菊五郎そっくり、黒でも白でも、紋服が似合う、押しだしのよい男だから、支配勘定衆に登用されたが、身についた無頼性はなおらない。

古参の同役と、吉原大文字の花魁を争ったのがもとで、御役御免。

爾来、無頼漢との交遊ははげしくなるし、酒色に日夜を過ごすとなると、御家人風情の糊扶持では、足りようはずがない。

そのうえ、しゃれ者だから、当然、好きなけんか口論の果てが、ゆすりかたりにおちつくのは腕自慢の当然。

なまじ、出来る腕が、こうなると、命とりで、

「――どうせなるようにしかならねえ浮き世なら面白おかしく」

うんぬんが、太く短い、地獄の道にさまよいこんでいることに気がつく風もない。

昨日のことだ。

左京は、この馬喰町三丁目、角の三河屋の娘を知った。通りすがりに、

「あれ、ご免なさいまし」

わかい女に、突然わびられた。

「つい、うっかりしていたものですから……」

美しい娘だった。十五、六、やっとつぼみがふくらみ始めた感じで、おやっ、と、左京は目をみはった。

持っていた小さな包みを、水たまりにおとしたのだ。そのどろはねが、紋服のすそを、少しだが汚していた。

しきりにわびながら、娘がちらちら見あげるひとみのいろで、

——あ、この女も……

と、左京は、合点した。にやにや笑いたくなるような気持ちだ。

左京を菊五郎のしのび姿と、間違える者が少なくない。もとより、彼を知らぬ者だが、知人でもおやっと、瞠目(どうもく)するくらい、酷似している故だ。

この娘も、店から出てきてうっかり見ほれていて、包みをとり落としたのだろう。

「こりゃア、お嬢さまが、とんだ粗相を」

と、番頭がとんでできた。

「これ、長松、手ぬぐいを」

と、娘も、丁稚(でっち)を呼んだり、わびたり、大騒ぎになった。

——酒屋か、悪くないの……

左京は、にやりとした。笑うと、菊五郎ばりの柔和さが消えて、東軍流殺人剣の使い手らしいすごみが、片ほおをゆがませる。

「安次、わたしが、ついうっかりして、お着物を汚してしまったのだから、よくおわびしておくれな」

「へい、へい、まことにどうも、これでは、なんとも……往来ではナンでございますから、ちょいと、お寄りくださいまして」

「うむ」

ただの酒屋ではない。かなりのかまえだ。間口が十間以上あまり、奉公人も十三、四人いる様子。

みんなで、よってたかって、すそのどろはねを始末する間、左京は、框(かまち)に腰をおろしてじろじろ見まわしながら、

「いい娘御だ、名は何というね？」

「は？……はい、お嬢さまでございますか」

「さようさ、ほかにいい娘御はいねえようだぜ」

「これはどうも」

「名を聞いているンだぜ」

「はい、おひろ、さまと」

左京、じろりと、娘を見て、

「おひろ、さんか」

「はい……」

ぶしつけな目つきに、おひろは、うつむいた。

三河屋ではよく知らなかったが、通りすがりに、町内の者がこのさまを見て丁稚にささやいたらしい。

急に、店中に、警戒と不安のかげがひろがるのが左京に感じられた。
それが、左京には心外だったし、
——くそっ！　こいつらア……
相手がそれならそれで、と、居直る気持ちがわいてきたのである。
「おい、番頭さん」
「はい……」
「三河屋の亭主は？」
「はい、あの、折あしく不在でございまして」
「いやさ、いるかいないかを聞いちゃいねえよ、なんてエ名だったかと聞いてるのさ」
「はい、三河屋」
「三河屋はわかってらアな」
「久左衛門、と申しまして」
「ああ、三河久か、ここらの分限だそうだな、馬喰町の町名主だったっけ」
「いえ、町名主ではございませんが」
「が、分限にゃ違いないねえ」
にやにや笑いながらである。
「は、いいえ、たいした身上ではございません」
そろそろ番頭も、言葉に気をつけだした。
これは、早く追い払ったほうがいい、と気がついたのだろう。

「——あの、こりゃアあの、ほんの些少でございますが」
おそるおそる差しだした紙包み。
金だ。
——まず二分か？
と、早くも見てとったが、左京、妙な顔をした。
「なンだね、番頭さん、こりゃア」
「あの、些少でございますが……」
「些少だって、おめえ、なんだね、え？」
「はい、あの、お着物を汚しました、その、おわびのしるしまでに」
「金かえ」
わかりきったことをはじめていった。
「はい、その些少で、おそれいりますが」
「番頭！」
ぎくり店中がふるえあがった。
「なめたまねをしやがるな。天下の旗本をナンだと思ってやがる。きさまじゃわからねえ、久左衛門をだせ」
「あ、あの、る、留守でございますので」
「よし、じゃア、久左衛門がいるときに話アつけてやらアな」
出された小銭を見むきもせず、とびだしたのが昨日のことだ。

4

——これでまず、五両は、間違いのないところ——

二分といえば、現在の円に換算して、だいたい二万円くらいだ。一両（四分）四万円とにらみあわしていいだろうから、二万円でも、少しばかりの水がかかったわび料としては少なくないが。

——もっけのさいわい、ふんだくってやろう——

一日の間に、三河屋の家中の不安がどんなに深い暗いものになるか、だいたいわかる。そこにつけこもうという、うでの左京だった。

——あの娘アちょいといけるが……まあ、小便くせえ小娘よりも、五両つかんで、遊郭へいったほうがおもしれえやな……

五両、と決めてかかっている左京、ぶらりと三河屋に入ってきた。

「いらっしゃ……」

とんきょうな声をあげたあの長松という丁稚が、まっさおになって立ちすくんだ。

「なンだなンだ、ちゃぼがかえるをのみこんだような顔をして、久左衛門はいるかえ」

「へ、へえ」

「いるかえ？」

「へ、へえ……」

「いるのかいねえのかッ」

「へえ……あの」

そこへ番頭が出てきた。これも青くなってしまった。

もみ手をしたり、小鬢をかいたりしながら、

「昨日は、まことにどうも、失礼なことを」

「まったくだ」

「へ、へえ、こりゃどうも恐れ入りまして、てまえが、まったく、世間知らずでございまして、はい、あれから、主久左衛門がたちもどりましたので、これこれ申しますと、主の申しますことには、それはよくない、天下のお旗本に対してたった二分ばかり包んだのでは、御無礼を……」

暗唱しているように、すらすらいう。

ゆすりの常習者のカンで、左京は、

——こいつア、五両にはならねえな、三両、悪くて二両か……

「番頭」

ガラリと、声が変わっている。

「それじゃ、なにかえ、おいらが、金の多寡でぐずぐずいったというのか」

さっと、腕をまくった。

左腕の無数の刀傷。

——武士の一存がたたぬ、旗本の体面がうんぬん——といいながら、脇差をぶっつり腕に突きたてる。これがうでの左京のゆすりの方法だった。

血が吹きだすし、おとなしい町人たちは、店の中でこれをやられてはたまったものではない。町役人や鳶の者などが来ても、乱暴するわけではないから、口出しが出来ない。

腕に脇差を突きたてて、天下の旗本がゆすりと間違われては、この上は切腹するしかない、とわめかれては、五両ですむところも十両包まねば、おさまりがつかなくなる。

が、今日は、そこまでする必要もないらしかった。

番頭はじめ、丁稚たち、奉公人が、一様に腕の傷跡を見ただけで、震えあがったからだ。

「おい、どうした?」

と、左京は、じろりと、見まわした。

家族は、あの娘も、奥で息を殺しているのか姿を見せない。

左京が入ってきたのを見て、丁稚が一人、奥へ駆けこんでいったが、注進したのだろう。

「やいやい、変なつらをしやがるな」

と、いよいよ本性をあらわにして、

「そこの小僧!」

「……へ、ご勘弁を」

「勘弁じゃねえやい、ならぬ堪忍するも堪忍たア、唐土の古い話だ。ご当節、花のお江戸じゃ、堪忍坊主よりゃ願人坊主がまるもうけだとよ、やい、小僧」

「へい!」

「てめえ、おいらの腕を見て、そっぽを向きやがったな。おっと、その一文はげ、うぬはだんご鼻をこすりやがった。おう、番頭、おめえは何のマジナイかしらねえが、目のまわりにつばでマルを書いたな」

「へ、へえ、その……悪いものを見たときは、その、こうしろと、おふくろから、へえ、おふくろの遺言なんで」

「悪いもの?」

語尾がしりあがりに陰にこもった。

ゆすりも、言葉じりをすかさずとらえるところは、堂に入ったものだ。

「悪いものたアなんだ。武士の刀傷は、戦場にあっては名誉の傷だ。ひと傷五十石としても四、五百石の価があるぞ、それを、悪いものといわれては武士の一分がたたぬ」

いよいよ、収拾がつかなくなってきた。

調子が出てきて、左京の声はせりあがってくるし、番頭の胸算用も、

——これじゃ三両出しても引き下がらんかもしれんわい、弱った……

青くなったり、赤くなったりしている。

5

「番頭!」

「へえ」

「きさま、昨日は、おれをもらいこじきと見たてて、けがらわしい小銭を投げたな」

「な、投げたなンて、そんな……へえ、お着物の、その洗い張りのお代金にもと、へえ」

「それが気に食わん。武士は食わねど高楊枝というのを知っているか、食わねば死ぬるぞ。うそだと思ったら、きさまひと月ぐれえ絶食してみろ」

「それには及びません」

「きさまなンざ、一日も保つめえ。台所で、下女のしりをなでては三杯のおしきせをテンコ盛りにしてもらっている口だろう」
「よくご存じで」
「ナニ、本当か。あてずっぽうが当たったか。ふといやつだ。いよいよもって……やい、番頭！」
「へえ……どうぞもうご勘弁ねがいます」
番頭は青菜に塩だ。
「いいか、武士は食わねど高楊枝」
とどなって、じろりとにらんだ眼に、意味がある。
「だが……」と、言葉が少しやわらいで、
「あれは武士の心意気を言ったものだ。少し誇張がある。いわば渇しても盗泉の水は飲まず、というやつだ。わかるか、番頭」
「へえへえ」
——わかりまさ、五両に値上げしろのなぞじゃないか……
「いいか、盗泉、ぬすっとの泉だぞ、武士たるもの盗泉の水は飲まん、が、だ。清水ならばナンゾこれを辞せざらんや、だ、番頭！」
「へい、へい、よく分かりました、では、ちょいと……」
「逃げるな！」
「へ！」
「どこへゆく」

「その、はばかりで」
「ははは、はばかりか、出すものを出してくるか。早くいってこい」
脅したりすかしたり、番頭、ほうほうのていで、奥の間へ入ってきた。
奥の仏間で、三河屋の家族が、暗い額を集めて、相談している。
おひろなぞ、左京の声が、びりびりっとひびいてくるたびに、うすい胸をあえがせて、生きた心地もしないらしい。
「出入りの棟梁を呼んだら」
と、母のおすががいうのを、
「棟梁でも、ろ組の頭でもだめだ。とにかくお旗本なンだし、腕まえだって、大したものだというからの」
久左衛門は、白髪頭をふった。おひろは、なんといっていいかわからなかった。事件のもとは自分にあるし、
——あんな菊五郎に似たひとが……
ゆすり屋だとは、思いもしなかったことだ。
「あたし……あたしが、謝ってきます」
くちびるまで青ざめて、まるで断頭台にのぼるように、おひろは覚悟をきめて立ちあがるのだ。
「あ、おまえ」
「おひろ、なにもお前がゆかなくてもいい」
「でも、ああやって……」

「いいえ、お嬢さま」
と、番頭が、したり顔で、
「結局、おたからが目あてなンでございますから」
「そうかしら。だって、昨日、包んであげたから、お怒りになったのでしょう？」
「小粒だったからでございましょうな、やはり、あの分では」
ちょっと考える目つきをした。
「そうかね、やはり金が少なかったのかね、どのくらいで」
「さようでございます、まず、二枚」
「二両で？」
「いえ、二十両は出しませねば」
「二十両……ま、仕方はない、出しましょう。おすが、あれを」
手文庫から、小判二十枚、紙にくるんで、久左衛門は、番頭に渡した。
二十両といえば、そろそろ物価が高くなりはじめていた時代だが、莫大だ。が、一人娘の安穏のためならば、やむをえない。
「では、これで、多分、追っ払えると思いますが……」
抜けめのない番頭は、廊下で、そっと半分を懐中へおとして、残り小判十枚、包みなおして持ってきた。
「――お待たせしました」
「待たせたぜ。奥で、おひろさんや久左衛門と談合か」

「へ！　いえ、滅相もない。あいにくと留守なものでして、これを、その……」
「なンだ」
出された紙づつみ、小判の形と厚みが、はっきりわかる。
「へっへっへっ、盗泉の水ではございませぬから、おおさめを願います」
「金か」
「着物を御新調くださいまし」
「……十両」
手のひらの上で、軽くおどらせて、ずばりと当てた。
「あいにくだがな、番頭、清い泉だったら、おいらアたっぷり飲みてえほうだがなア」
「へえ……」
「三河以来の高木家ではな、紋服新調するのに二十両から下じゃ頼まねえンだぜ」
――見やがったのか……
口もとは笑っているが、すごい目つきだから、背すじがひやっとして、
「こ、これはお見それを。では、もう十枚で」
しぶしぶ懐中からとりだす。
「気がきいてるぜ、番頭。同じことなら、もっと手間をかけさせなさンな」
「へえ、気がつきませんで」
「ところで、番頭」
と、また左京がひざを乗りだしたとき、おもてに遠巻きになった野次馬をかきわけて、とびこ

んできた者がある。
「兄貴、兄貴！」

6

「大変だ、兄貴すぐきてくンねえ」
伝法な口調は、当人が、いっぱしの遊び人を気どっているからで、これでも実の兄は御家人の端っくれ。
森野元次郎というのが本名で、本所弁天小路のお長屋にごろごろしている。当主の実兄が死んだおやじそっくり固い一方の性質で、二の丸表火の御番を神妙につとめて七十俵ちょうだいしているくらいだから、弟の世話までやききれない。
それをいいことに、まだ十六になるやならずの青二才のくせに、本所の無頼なかまに顔を売ろうとして、うでの左京の弟分、と、ひとにもいい、自分でもそのつもりになっている調子者だ。
「元か」
と、左京は框に腰をおろしたまま、顔をあげて、
「あわを食ってどうしたンだえ」
「あ、兄貴でなくちゃおさまらねえ大事件がおっぱじまったンだ」
「ふん、よしな」
苦っぽく、笑って、
「つまらねえことでわめきなさンな、三河屋の酒がまずくならアね」

「へっへっへっ、そ、そんなこともございません」
丁度幸い、さっさと帰ってもらいたいから、番頭、もみ手しながら、ぺこぺこ頭をさげている。
「さ、兄貴、出馬しておくンねえ」
「うるせい野郎だ」
うるさいが、兄貴兄貴と慕われては、悪い気がしない。
左京は、じろりと奥を見やって、その視線を番頭に移し、
「せっかく来たのだから、三河屋小町に会ってゆきてえが、留守とあれば無理だろう。番頭！」
「へえ」
「おひろさんによろしく伝えてくンな」
「へえ、そりゃもう」
「また遊びにくるとな」
「へ？」
ぎくりと、顔をあげたときは、うでの左京、紋服のそでで風をあおって、すっと外へ出ていた。
「――ちくしょう、地ゴロめ、おといきやがれ」
十両くすねそこねた鬱憤こめて、番頭は、
「浪の花をまきな」
と、丁稚をどなりつけている。
そのころ、左京は、懐手で、宵風のでてきた道を広小路の方に歩いていた。
「行先アどっちだえ、元の字」

「へえ、葺屋町で」
「芝居かえ」
と、いいながら、懐で紙包みを破り、襟のあいだから、ぬっとつまみだした小判一枚。
「文なしだろう、あとで一杯やりねえ」
「うへっ、久しぶりの山吹いろ」
元次郎、仰天して、
「こんなにたいまい」
「なアに、三河屋で思いのほか、出したでの」
ふふっと、語尾は、笑いにゆれて、
「だが、丁度いいときにきたぜ、てめえ、よく知っていたな」
「えっへっへっ、地獄耳でね」
「目明かしになったが出世が早かろうぜ」
「な、なアに、兄貴のことだけなンで。うぬの兄貴が、いまごろ、どこでゴロ巻いてるか花魁と口を吸いあっているか知らねえようじゃア」
「よしな、地声がたけえ。見ろ、船宿の女が笑ってやがる」
「なアに、ありゃ、兄貴の菊五郎ばりにぞっと身にしむ恋の風」
「また変な声をだしやがる。だが、てめえの析が、時を得ていたンで、このニセ菊五郎も舞台のそでに入れたってもんだ」
はははははと、左京、歩きながら大きく笑った。廂の下に、つつーと、つばめが走っていく。

つるべ落としと、文字通り赤く燃えた日が、お城の肩におちて、ご天守の白壁だけが、くわっと桃色に染まっていた。路地はうす墨を流したようだ。
「元、そこらで腹をこしらえるか、それから吉原といこう」
「お、おっと、ありがてエですがね、兄貴、じゃア、その菊五郎の一件で」
と、いいながら、元次郎、きょろきょろあたりを見まわしている。
「おっ、駕籠ッ」
もどり駕籠らしいのを呼びとめて、
「まずまず、お駕籠へ」
「どうした」
「急ぎなンでさ、ことの次第は、走りながら」
「ばかにせっかちだなア、弁天小路の虎猫がお産でもしたかえ」

あばれ旗本

1

行き先は葺屋町、と聞いたせいか、駕丁の脚が速い。
横山町裏通りを、まっしぐらに汐見橋。
それから川岸を元浜町から高砂町、それから人形町通りを突っきって、芝居町になる。

その駕丁と歩はばをあわせて、駕籠わき多門で走りながら元次郎、
「菊五郎の油店から火をだしたのアご存じでござンすね」
「ああ」
それがどうした、おいらにかかわりはねえぜ、と、不審な左京の顔へ、
「あのおかげで、菊五郎が打ち殺されるかもしれねえ、なンとか、兄貴のお力添えを願いてえと、堂前の弥三次親方が頼ンでいやすンで」
「なに、菊五郎が」
ふっと、ほおをゆがめて、
「おう、駕丁、とめな」
とどなったのは、汐見橋をひとまたぎでわたりきって、とんと、先棒が息杖拍子うちに、左へ折れたときだ。
「ど、どうしたンで、兄貴」
元次郎、たたらを踏んで、
「こ、小用でござンすかい」
「べらぼうめ、なア元の字、おいらの菊五郎ぎれえは、てめえ知らねえじゃあるめいに、なんてえ話を持ちこんできやがるンだ」
「あ、兄貴、まア、そう怒らずに聞いてもくンねえ、なア兄貴、よくいうじゃねえか、それ、九官鳥ふところへえりゃ……」
「窮鳥懐へ入りゃ猟師も殺さずってやつか」

「それでンね、ねえ兄貴、兄貴の菊五郎ぎれえを知らねえじゃねえがよ、あのニヤケ野郎でもブチ殺されそうだと聞いちゃ、黙って見ているわけにゃいきませんやね」
「おいらの知ったことじゃなさそうだ」
「さ、そこを、まげて、何はともあれ、お駕籠へお駕籠へ」
と、おしこめるようにして、
「さ、駕丁、何をぼやぼやしてやンでえ、早くやらねえかよ」
うすあばたの、うらなりびょうたんのような頭に吹きだした汗をぬぐいながら、また走りだす。
「ねえ、兄貴」
「……」
「腹もたとうが、聞いてみりゃ、かわいそうでもあるンだ。大油店の油練場から火が出た、こりゃ兄貴もご存じだ。その火が葺屋町をぺろりとなめて、ついで堺町に飛び火して、こいつもともとより、火勢えんえんとおよそ十四、五町四方を燃しつくした」
「そいつも知ってら、一昨日のことだ」
「話アこれからなンで……」
「うるせえの、火元がとっちめられるのは天下のご定法だ。町奉行所のほうは鼻薬がきいて、おとがめも少ねえとしても世間が承知しねえ。千両役者だ、二千や三千、小判の箱を積みやがれと」
「図星」
「相場アそんなもンだ。そいつア菊五郎が悪い。おい、元の字、うでの左京はそんな役者を助けるなアごめんだぜ。やい、駕丁、とめろ！」

「おっと、とめずに走ンな」
「やい、元の字、てめえ、おいらにさからう気か」
「ふえっ、すごい目だ」
走りながら、小器用にぱっと横へすっとんで、
「ご、ごめんだアな、兄貴、その萠葱柄に手をかけるのだけア堪忍しておくンねえ、弁天小路から名物が一つ減らア」
「口の減らねえ小童だな、駕丁をとめさせろ、斬るのアおあずけにしてやら」
「因業なことアいいっこなし、まア、聞いておくンねえ」
「もう、耳にタコが出来た」
「まアそういわねえでよ。やい、駕丁、もっと突っ走るンだ」
と、元次郎、先棒のしりっぺたを、手ぬぐいで、しゅっと、ひっぱたいたから、
「兄さんえ、これ以上は走れねえや」
「なにオ、これで走っているつもりか。まるで、棺桶に入りそこねた亀が、あンよにけがしてのたくっているみてえだぞ」
「そいつアひでえや、これでも柳橋の駕籠辰の身内じゃ速えほうで」
「てめえが速えほうなら、おいらなンざ、役の行者の孫みてえなもンだ」
と、また手ぬぐいでひっぱたく。
「勘弁してくンねえ」
「何をぬかしゃがる。気付け薬をやるから、突っ走れ」

「なんぼ気付け薬をもろうても」
と、あわを吹く口に、
「食らえ」
と、押しこんだのは、ひやりと冷たい山吹色。
「あわあわわわわ」
「そうれ、くれてやる。馬喰町から葺屋町まで一両じゃア有り難涙で、目ン先にかすみがかかるだろうが」
「走ります、走ります」
後棒が、汗をなめなめ、わめいた。

2

「うぬら、十日走っても一両金は転がりこむめえ、途中で休みゃア、ただの二百文だぞ」
と、こんどは元次郎、手ぬぐいのかわりに、しりに火をつけんばかりに毒舌を浴びせて、
「それがいやなら、命がけで、突っ走れ」
「へえ、合点でござンすとも」
と、駕丁は現金なものだ。
河岸をすっとんでゆく。
そのかけあいを、にやにや笑いながら見ていたうでの左京。
「突っ走るのもいいが、ふり落とさねえようにしな」

「兄貴、いましばらく、ご辛抱」
「辛抱も心張り棒もねえが、話の筋アしりきれとんぼだぜ」
「へえ、へえ、聞いておくンねえ」
さすがに元次郎、息をきりながら話しだす。
あまりいいからだとは義理にもいえない。二本差した細めの刀も、本人は粋なつもりでのことだが、幅びろのやつはへたばるからだろうと、悪口も出るほど重げに見える、ひ弱な腰つきをしているが、十六という若さは有り難い。長く、なま白い脛をむきだして、駕籠について走りながら、「どこまで話したっけ。ああ、そうだ、兄貴の図星ア、町奉行所の方だけでさ。なにしろ、当代人気男の梅幸と薪水だアね、それも火をつけたンじゃねえ、失火だ。それに、火が出たときゃア梅幸はいなかった。番頭の仁兵衛がすべてエ取りしきっていたので、責めは仁兵衛が負って、手錠百日」
「そいつア軽い」
「そこンところが人気役者の冥加な点でさ、あっしも来世は役者に生まれてえ」
「おもくれえ、うすあばたの馬の足なンざア趣向だろうぜ」
「まぜっかえしちゃいけません」
と、汗にまみれた元次郎は、はっはっとあえいでいる。
「もらい火で、家を焼かれたやつらの半分は、もとはといえば、芝居町のおかげで、三度の飯が四度もうまく食っていた連中だ。梅幸を憎むほどじゃござンせん……」
芝居町が、浅草聖天町の小出信濃守の屋敷あとに払いさげられたのは天保十二年以後のこと

で、それまでは、例の明暦三年の振りそで火事より上下堺町、木挽町五、六丁目がずっと江戸の芝居町として、栄えていたのである。
江戸三座というのは、市村座、中村座、森田座をいったが、享保時代に後者が休座するや河原崎（権之助が立ち）座がこれに代わっていた。桐大蔵座、都伝内座等が、控櫓として、黙許されたのは後のことである。
「――憎まれなくって、どうして、ぶち殺されそうなンだ」
「そこでンね。悪いことに、十四、五町も焼けながら、音羽屋だけア塗りごめ造りだったもんで、焼け残ったンでさ」
「ふうむ、それで、焼けだされが、焼けっ腹をたてたか」
「いいえね、それだけじゃ、まだ千両役者を恨みゃしねえ、人徳だアね。音羽屋でつかっていた若い衆が三十人たらず、こいつらが、火事ってえと、水ぶっかけや、納屋をひき倒し、土蔵の目塗りと一生懸命に働いた。で、菊五郎が……」
――一杯飲んでくれ、と差しだしたのが、十両金。
菊五郎としては、ただ慰労のつもりだったのだが、そこは若い衆だ。ただちに焼け残った音羽屋で、酒肴を買ってきて、飲みはじめる。
菊五郎と彦三郎の店だから、歌舞伎子という色子や、水茶屋の女が加わって、最初は静かに飲んでいたが、酒と理性とは水に油だ。
「御近所に悪い、歌はいけねえ」
と、番頭の仁兵衛がとめたが、若い者だから、飲むほどに酔うほどに声が高くなり、歌が出、

踊りだすやつわめくやつ、とんだ浮かれ騒ぎになってしまった。

「金を渡して、松島町稲荷横へ、へえ、お浜ってちょいとしたのを囲っているところで。ここへ一度は帰った菊五郎もこの騒ぎを聞いて、大変とばかり、もどってきたのが、鎮めようにも、手がつけられねえやな。さア、怒ったのは、焼け出されだ。菊五郎の野郎は、近所を焼け野が原にしたあげくに、てめえの店ではドンチャン騒ぎ、もう勘弁ならねえと、わーっと、囲ンだンで」

「ぶち殺せってえのか」

「さいで」

元次郎、小悪党のくせに自分が暴徒に襲われたように、青い顔に、目をおどおどさせて、

「なにしろ、火事あとだ。鳶口や、丸太ン棒、手斧から出刃包丁、手ンでに持ってみんな血相変えていやす。こうなると、ろ組の親方、兄イ衆も、手を出さねえ、いい気味だぐれえに思っているンだろう。こいつアどうあっても、うでの兄貴に出馬してもらわなくちゃ、おさまりがつかねえと……」

やっと話し終えたとき、駕籠は、焼けあとに、さっきの雨でぬれびしょの道を、葺屋町へ入ってきた。

3

「おもてロアだめだ、裏へ回ってくンねえ」

二十人や三十人ではない。群集は、黒山のように音羽屋を囲み、わいわい騒いでいる。

半分は、野次馬も混じっているとしても、なにしろ、鳶口や、出刃包丁をふりまわしているから、町名主や番太郎たちの手におえない。

「焼けっ腹立ちまかせだ、尋常じゃ、おさまるめえぜ」

ここまで来ては、いやとはいえないが、うでの左京、まだ菊五郎を助けてやるとは、口にしない。

じろりと群集をながめる目つきは、皮肉な笑みを浮かべている。

「あ、兄貴……」

「元、すっこんでろ」

ゆっくりと駕籠からおりたった左京。白緒の雪駄をつっかけて、うるみ朱鞘の太刀をすとっと腰におとす。

駕丁は、もう一両もらっているから、長居は無用とばかり、いち早く逃げだしている。

「兄貴……ど、どうするえ」

裏へまわっても、群集が囲んでいる。

「たたっこわせ」

「引きずりだせ」

「菊五郎に地べたへ両手つかせろ」

「千両役者なら、千両よこせ」

「千両か、菊五郎か」

「いっそ裸にひんむいてさらし物にしろい」

喧々囂々たる叫喚で、群集心理、次第に興奮してきて、鳶口を戸にうちこんだり、石を投げこ

んだりしているが、まだ、本心から、打ちこわしをやるほどにはなっていない。
が、このたかぶりでは、
——半刻（一時間）たア保つめえ……
と、うでの左京は見た。
刻一刻、野次馬は増えるばかり。左京の目には、これ幸いと、油店同業者や、芝居者で日ごろ反感を抱いているやつなどが、扇動している気配が見える。
「あ、兄貴」
と、元次郎、しっ腰もなく、おろおろ声で左京のそでをにぎり、
「こ、こんなに大勢たア思わなかった、や、やめにしようぜ」
「何をいいやがる」
「だ、だって、おめえ、いくらうでの左京兄貴でも、こいつらア……」
「ふん、何百よったってえ、うじ虫アうじ虫だわな」
鼻でわらった左京、懐手のまま、ずんずん群集のうしろへ近よってゆく。
「あ、兄貴、まっておくンねえ」
元次郎、ずるずるっと、ひきずられる。
「放さねえか、ばか」
「放さねえ、兄貴にもしものことがあると、大文字屋の浦里おいらんや、湊屋のおろくねえさんが……」
「ばか野郎、とんだ出入りに、茶屋女の名前なンか出しゃアがるな。いいから放せ」

と、ふりとばして、
「黙って見ていな」
群集をかきわけてゆこうとするから、元次郎、青くなって、
「見、見ちゃいられねえや」
横っとびに、走りだした。
この群集では、簡単に道もあけてくれそうにもない。が、平気な顔で左京は、わりこんでいった。
「おい、どきねえ」
と、一人をかきのけ、突きとばして、
「道をあけろ」
と、一喝した。
「な、なんでえ、お侍え」
「なにをしなさるンだえ」
いつもは温厚な町人たちも、今日は暴徒と化しているから、腰が強い。
「どこのお侍かしれねえが……」
と、見かえって、
「あ、菊五郎……」
「ははは、面つきア似ていても、性根は、月とすっぽんだろうぜ」
なるほど、と、まわりの町人たちは、毒気を抜かれたように、ぽかんとするのにかぶせて、ず

いと、左そでをたくしあげる。

「あ……」

「見たかえ」

焼けあとには、夕霧がわいているが、まだお互いの顔ははっきり見える。

左腕の無数の刀傷に、ぎょっとする連中に、にやりと、すごい笑みで、

「うでの左京が、菊五郎にかけあってくれようってンだ、まかせるがいい」

「へえ……」

と、顔見合わせて、もぞもぞする。

そのすきに、すっと中へ入ると、固く閉められた裏の戸をたたいて、

「音羽屋！　うでの左京がきたンだ、開門しねえ！」

と、ドスのきいた声をかけると、待つ間もなく、心張り棒をはずして、青い顔の若い者が、

「……先生！」

「おうさ」

ひらりと、入る。あとはまた、がたっとしめて、棒をかける。

焼け残ったといっても、ところどころ壁は落ちているし、水浸し。畳があげてあるやら、油壺が転がっているやら、足の踏み場もないありさまだ。

若い衆たちは、もう酔いのさめた顔に、目をぎらぎらさせて、向こうはち巻き、道中差しやあり合わせの棒や鳶口など、ひねくりまわしている。

念をいれるようだが、当時、火事は江戸の華、といわれたくらいで、火の出ない日は珍しいほ

どだったから、ちょっとした大店には、大槌や鳶口、刺子半纏、紋ぢょうちんなど備えてあったものだ。鳶口くらい、町家で持たない者はないといっていい。当時の建築のことで、消火は、いわゆるぶっこわし消火で、臥煙人足と称する手合いが、風下の家をぶちこわしてまわる。

竜吐水の水勢なんて、子供の水鉄砲みたいなものだから、そうするよりほかに術がなかったのだ。もっとも、B・ショー翁に揶揄されたペーパーハウスとしてみれば、最善の方法だろう。

だから、塗りごめ（土蔵）造りの家が焼けのこったわけだ。

「助かった、先生のおいでだ」

とんきょうにいって五十年配の太った男が、杯もったまま、腰をあげた。

4

「おう、親分かえ」

「うでの先生、わざわざご足労をわずらわしやして」

かっぷくのいいからだを、みぞれ小紋の、顔役にしては渋い着物に包んで、無腰の弥三次。近ごろ、街の無頼者の帯刀ご詮議がきびしくなっているばかりではなく、話のわかった顔役だから、事態がこう悪くなると、手に負えないのであろう。

「なンだなンだ、おまはんがいて、街にほこりがたつなンて、前代未聞じゃござンせんかえ」

「皮肉アまア後で聞きましょうよ、先生。ご存じだろうが、こちらが」

と、ふりかえると、尾上菊五郎が、今日ばかりは白粉なしの素顔をこわばらして、座っていたが、

「お初にお目にかかります」

と、両手をつかえる所作が、不惑すぎとは見えぬほど、優雅で、どことなく色っぽい。

一見、三十そこそこ。当時役者は小柄だったから、中肉中背の菊五郎は、舞台では大きく見える。和事では、右に出る者がないとまでいわれたが、近ごろ、若い瀬川菊之丞が擡頭しはじめて、菊五郎は、武道実事に新生面をひらこうとしていた。

彼は、前にも述べたように、江戸生まれではない。京都宮川町の音羽屋半平の子で、若女形尾上左門の高弟である。屋号の音羽屋と、姓の尾上の由来はここに発する。京都亀屋座へ若衆方として出たのが享保十五年、十四歳のときで、江戸へ下ったのが寛保二年、以来、うなぎのぼりの人気で、四年ほど前に、市村座の座頭となっていた。

「ふん、舞台で見るのたア大した違いだ」

ぶしつけな目つきは、生まれつきの左京、じろじろ見まわして、

「名題の千両役者で、いい気になっているときゃ、横っ面なぐり倒して、踏んづけた上に小便ひっかけて……」

「おう、おう、先生、そんな」

「ははは、心配ねえってことよ、親分。ここへくるまでアそう思っていたってことさ」

「あの、あたくし、なにか失礼なことでも……」

菊五郎、くちびるの色までうせている。

「なアにね、おいらの面が、おめえに似ているといわれてね、べらぼうめ、天下の旗本が、河原者風情に似ておたまりこぶしがあるもンけえ、と、こりゃア、真実腹の立ったことさ。市村座の

かぶりつきから見たおめえが女子供がキャーキャア騒ぐのにいい気になっていやがると、やっぱり腹ン中が煮えくりかえった。こいつも、ほんとうだ。だが、そうやって、しおらしく頭をさげられちゃ、おいらのほうで、腹の虫をおさめなきゃなるめえ。今度っから、おいらを菊五郎に似ているというやつがいたら、うでの左京に菊五郎が似たと、ははは、そういうことにしようぜ」

「へえ、そりゃ、どっちでも……」

目を白黒しているうちに、うでの左京は、菊五郎ぎらいとはだれのこと、という顔になって、

「おう、うでの左京が引き受けた、菊五郎のこたア心配するな」

「先生」

と、弥三次親分が、

「ど、どうなさるおつもりで」

「ふふふふ、万事ア、この胸にあらアな」

という間も、店のまわりの騒ぎはひどくなる一方だ。

これだけ騒動がひどくなれば、町奉行所から鎮めにくるはずなのに、その様子もないのは、中村座や河原崎座で、何やら手をまわしているのかもしれない。

門下の松助や、春五郎などの顔も見えたし、若い衆が三十人ばかりに、顔役弥三次についてきた子分が十数人。いずれも、ものものしく、けんか支度をしながら、

「先生、いってえ、どうしますンで」

「まかせておけ」

左京、早駕籠にゆられて、のどがからからになっているらしい。

「駆けつけ三杯とやらいうぜ」
どっかりあぐらをかいて、ありあわせの椀をぬっとつきだした。

5

「――おろく坊」
さっきから、酔いどれが、だみ声をあげていた。
「はい」
「おろく」
「……はい」
返事をしながらも、手を休めない。
町中の水茶屋は、近ごろ塗り家づくりの家が増えたし、奥に寝泊まり出来るようになっている家が多かったが、神社寺内の境内の水茶屋は、葦簀ばりの腰かけ茶屋だから昼のうちだけ。
「お新ちゃん、お花ちゃん、もう片づけていいよ」
「あい」
「もうお客はこないだろうからさ」
「ええ、そうですね」
赤前垂れのひざを折って、釜の火をおとしはじめる。
「やいやい、ここに一人いるぞ」
大の字なりに寝たまま、客がどなった。

おろくは、ちらっと目のすみで見て、笑った。
「かまやしないよ、酔っぱらいなんか」
「ええ」
すると、客が、
「――かまうぞ、やい」
といった。
「うるさいねえ、ほんとに、客だったら、客らしく、お茶を飲んで……」
おろくは、美しいまゆを八の字によせて、立ちあがった。
残照が消えたばかりの空が、水色に澄んでいる。くうくう……はとが鳴きながら、本堂の破風屋根の下へ入っていった。
浅草寺境内のごふく茶屋。
江戸の水茶屋でもいちばん古くからあるせいで、水茶屋といえば、浅草が全盛。文化年間になるとそろそろ上野山下のほうに客をとられるようになったが、このころは全盛時で、そのごふく茶屋のうちでも、湊屋が、近ごろ、客のうけがいい。一日中、客の姿を見ない時はないほどの栄えようも、ここにおろくがいるからだった。
うりざね型、というより、やや細おもてで、切れのながい目に、目バリをいれたように張りがあって、いつもうるんだひとみで、じっと正視されると、男心が、あやしく騒ぐ。
江戸一の浅草一のという美人ではないが、この双眸がものをいったし、吉原の小店『大和田』に生まれたという素姓が、おろくの色っぽさを裏書きして評判をあおった。

むろん、善男善女、浅草寺参詣の者ばかりではない。

水茶屋というのは、桜湯にのどをうるおし、足久保か何かを飲みながら、女をからかえる。

自信のある男なら、美人がものになる。

自信がなくても、金か熱意でモノにならんものではない、というので、若い男が張りにゆく。

女も、客が多いほど分方がもうかるし、評判があがるから、腕によりをかけてサービスする。

この水茶屋形式が、綱紀のゆるみに乗じて私娼窟化している。かつての洲崎パラダイスの前身である深川八幡門前の私娼窟も、門前町発達形態の考察から帰納できるように水茶屋が変化してきたものだった。

水茶屋の淫風が目立ちはじめたころから、たびたび取り締まりはされていたが、必要悪というのか、なかなか払拭できるものではないので、ずっと後の、文化期のご法度書を見ても、料理茶屋、水茶屋は、十三以上、四十以下の女を店に置くべからず、というような、ぬるま湯的な取り締まりでかろうじておさえているほどだ。しかし、営業の方からいえば、十四から三十九までの女を置かないで客がくるものじゃない。

説明が長くなったが、おろくは、丁度二八か二九からず、十七というつぼみの割れぞめの年である。われこそは、の自信満々の男が、武士町人を問わず日参してくるが、いっかな、おろくが、おちた、という話をきかない。

それも道理、おろくには、とっくにおもう男がいる。

——酔いどれが、

「やい、ここのうちア水茶屋のくせに、茶もださねえのか」

と、わめきちらしているのを、

「さアさア、くだまくのは雷門のそとへでてからにしてくださいな」

と、優しい手で抱えおこそうとすると、ふいに、その手を握って、

「茶をくンねえよ、おろく坊」

「あれ、あげたじゃないの」

「飲まねえやい」

「じゃ、この茶わんは？」

「うん……そいつア、お花のアマが……よう、おろくさんの、この白い手でくんでもらわなきゃ飲んだ気がしねえよオ」

「あんなことを」

と、優しくにらめて、

「ムズからないで、お帰りな」

「てやンでい、やい、おろく」

と、とうとう生酔い本性たがわずと見えてでんとあぐらをかいてしまった。

「ナニサ、酔っぱらい」

「な、なンだと」

「なンだい、酔っぱらいを酔っぱらいといったのが、お気に障りましたかね」

「なに！」

「いい加減におしよ、酔ってくだ巻きたきゃア山下のケコロのところにでもいっといで。ここは

金竜山浅草寺、もったいないやら、有り難いやら、信心深いひとたちがお参りのついでに一服していく水茶屋さ、酔っぱらいは、おつもりにしてもらいたいやね」

おとなしいようでも、吉原育ち、色気に加えて、お俠なところが、うでの左京の気に入っているのだろう。

「こ、このアマ……」

といったきり、冷水を浴びせられたように、酔いどれは、ぽかんと、おろくを見まもっている。

「酔っぱらって、クダ巻きゃア女が恐れ入るか、ほれこむか、ばかをいっちゃいけないよ。このごふく茶屋というのはね、もともと御仏供の茶屋、仏さまにおそなえするお茶、ここじゃ、観音さまへあげるお茶のことなンだよ。その茶くみ女だ、おまえみたいな兵六玉に毛氈を汚されちゃ観音さまに顔むけが出来やしない、とっとと帰っておくれな」

ぼうぜんと、唖呵を拝聴していた酔いどれは、だんだん酔いがさめたのか、

「こうこう、黙って聞いていれば、ごふくもごぶつくもあるもんけえ、ちょいとまぶいお面をしているかと思って、聞いたふうなくちを」

美人にぽんぽんやられただけでなく、もう宵闇が漂いはじめているから始末が悪い。赤黒い顔に白目をむいて、

「このあまっ子」

と、つかみかかった。

「あれ、いけすかない」

ひょい、としなやかに、身をはずしたから酔いどれ、縁台から、ごとっと土間へ転げおちる。

「ははは、よしねえよオ」

男の声がした。

「う、うぬは」

「ははは、湊屋おろくさんに肘鉄食って、茶釜のかどでこぶをこしらえたってだれもほめやしねえによ」

6

気のきいた口をたたくにしては、若い声だ。

おろくがふりむくと、息せききって、走ってきたうすあばたの元次郎が、勝手に湯をついで飲みながら、

「さア、帰んな帰んな」

まだとって十六の若衆だが、本人はいっぱしの無頼御家人ぶっているし、落とし差しの刀も、あながち伊達ではない。

「おろくさんは、急用があるンだ、張りにくるならおとといこい」

悪い相手、とは、酔眼にもうつる。酔っぱらっただけで悪気はない職人だから、こうにらまれると、こそこそ逃げだす。

「おう！」

と、その背へ、

「待ちな」

「へ？」
「茶代は置いたか」
笑いながら、おろくが、
「いいのサ、元の字」
「そうはいかねえ、茶代は茶代だアね」
——うでの左京が兄貴、とすりゃ、おろくさんはさしずめあねご、おいらにとって無縁じゃねえわな……
と、胸算用は、遊びの金に困って、ちょいと借りにくるときのことまで考えている。
「さアよこせ、なに、百？　ただの百文か、しみったれな茶屋遊びだ」
「いいったら、元の字、こんなやつから百ばっかりもらいたかアないよ」
と、まだ、おろくは怒っている。
「そういいなさンな、おろくねえさん自慢の結び髪だって、油なしじゃ、いい器量にそぐわねえ、油々とばかにしても、音羽屋の伽羅油を買うにゃア……おっと、忘れるところだった、おいらはどうしてこう忘れンぼうなンだろう、おろくねえさんえ」
びょんと腰をあげるや、ぐいと無遠慮にそでをにぎったから、
「なんだえ、急に血相変えて」
「こんな店アおっぽりだして、すぐ来ておくンねえ」
「こんな店とはごあいさつだねえ」
「怒っちゃいけねえ、うでの兄貴が、死にかかっていなさるンだ！」

「え？」
死にかかっている——とは、おおぎょうな元次郎。本気でそう思ったのだろうが、葺屋町の音羽屋では、少しその前に、うでの左京が、裏口から出ていった。
もう暮れて三間離れると、顔も識別でき難いから、
「火を燃せ、たき火をしろ」
焼け棒杭を集めてきて、あらこちで焚きはじめていた。
武家でいうかがり火のつもりだろう。家にも火をつけちまえと、わいわいいっているころ、裏口があいて、うでの左京が一人出てきた。
見つけたのは十数人いたが、
「うでのだんなかえ」
「うむ」
と、沈鬱そうに答える姿は、入ったときの黒紋服に博多の白。すっきりした姿で、いきな落とし差しの太刀が、たしか、うるみ朱鞘だったまでは、興奮している連中のことで気がついた者はいない。
「どうですかえ」
と、寄ってくるのを、
「なかまを連れてくる」
と、言い捨てて、すたすた、親父橋のほうへ歩き去った。
「なんでえ、あの野郎」

「えれえけんまくだったが、しっ腰のねえ」
「ええくそ、やっぱりぶち壊せ」
たき火はたいただけで、音羽屋に放火する者がいなかったのは、暴徒の性質が性質だし、放火は磔刑に処せられる——徳川幕府の刑法は実際とは大分違っていたが、親殺し主殺しと放火だけは常に極刑をもって臨まれた——せいであろう。
「ぶち壊せ」
「菊五郎に謝らせろ」
「裸にひンむいて、さらしものにしろ」
怒りが波紋をひろげ、津波のように漸増的に盛りあがって、わアーっと喊声あげて、表と裏口に、鳶口が、ぶすっぶすっと、うちこまれる。
大槌をもった力自慢が、倶梨迦羅紋々の肌をこれ見よがしに、
「よいしょ！」
と、たたきつける。
めりめりっと、すさまじい音で、戸が破られる。半分焼けているのだから、これはもろい。
表口から、どどっと転がりこむようにとびこんだ連中が、はっとしたのは、てっきり反撃があると思ったのに、寂と、しずまりかえった店のうち。
「あンれ……？」
鳶口を取り直し、六尺棒を抱え直して目をみはると、店の中は、がらくたや油壺置き台など、すっかり整頓され、ひろびろとした土間に、あかりがともっている。

「だれもいねえ……？」
奇妙な静けさで、ぎょっとしたとき、
「ここにいるぞ」
ぐわっと反響して、底太い男の声がした。
いた。ふすま障子は全部とっぱらい、店つづき長十二畳のたたみをすべて積みあげた上に、下帯腹巻だけの素っ裸。
うるめ朱鞘の太刀を抱くようにして、冷や酒をがぶ飲みしている武士。
「あ……菊……」
「じゃねえ、うでの左京と申す。本所弁天小路へんじゃ、厄払い明神ということになっているおあにいさんだ、ははは」

7

「い、いつの間に……」
菊五郎といれかわったのか、表口から闖入してきた連中にはわからない。
さらによく見ると、うでの左京だけではない。その両側、壁をうしろ盾に、三、四十人の若い者が、道中差しや鳶口、手斧などをひきそばめて、じっと闖入者をにらんでいる。
「ま……ま、待て待て」
先頭のやつらは仰天して、すくみあがったが、人数を増した群集、後ろのほうには、この様子は皆目わからないから、

「どうしたどうした」
「ぶち壊せ」
「菊五郎をひきずり出せ」
口々にわめきながら、後から押してくる。たちまち、土間にいっぱいになってしまった。
「菊五郎アどこだ」
「いねえよ、いつの間にか逃げちまった」
「なンだと、あン野郎……あ、あそこにいるのは菊五郎と違うかえ」
「似ているが、大違い」
「うでの左京とやらいう暴れ者だ、あの左腕を見ねえ、五十も百もの刀傷」
「ほんとかえ、菊五郎め、弟子の松助ほど変わり身は達者じゃねえが、実事じゃ当代一だ、さむれえに化けて……」
「それにしては、堂に入ってらア」
「そこが千両役者だ」
がやがや言いたい放題のことを言っている。
「うるせえやい！」
左京は、たたみの上から大喝した。
「うぬら、ここをどこだと思って来やがった？　昨日までア尾上菊五郎の音羽屋だが、今日からは、うでの左京さまが控え屋敷だ。当主のおいらに、一言半句の断りなしに踏みこんできやがって、どいつもこいつも、そっ首ひっこぬいてやるから、そのつもりでいろ！」

ばっしと徳利が、壁にあたって、砕けとんだ。
気をのまれて、暴徒たち、首をすくめたとき、十二畳積み重ねたうえから、下帯一つのたくましい裸形が、ばっと、とびおりたのだ。
その足が土間につくかつかぬうちに、白光が走り、悲鳴がおこった。
それは、一瞬の虹に見えた。
とびおりると同時の、抜き討ちだった。
先頭の男が持っていた鳶口の、上五寸ばかり、かっ！　という斬撃の、かすかな音とともに、宙にとんだ。
どぎもをぬかれて、
「うわっ」
どどっと、後へさがる。将棋倒しに十人ばかり、転がり重なった。
「ははは、あわてるな」
すっくと立ちはだかって、左京は哄笑した。
「東軍流、流星剣、望みとあれば、うぬらのそっ首つづけ討ちにしてみしょうか」
普段ならば、充分、これで震えあがるはず。
が、なにしろ群集心理で、気が強くなっていたし、わけのわからぬ後方の連中が飽きもせず、
「菊五郎を、菊五郎を」
と、怒鳴っているのに励まされて、
「と、東軍流がなンでい」

と、力むやつがいた。
倶梨迦羅紋々の大肌ぬぎになった威勢のよい若者だ。
大槌を振りかぶって、
「われの刀がくるよりも、こいつで、そン頭ぶっ砕かれるほうが早かろうで」
奉公に来て江戸は日が浅いのか、村では草相撲の大関格か、顔を真っ赤にして、
「やんれ、こいつ」
ぶーんと、打ち下ろした。
うでの左京どころではない。百貫の岩をも砕きそうな勢い。まともにくれば、砕けるだろう。
力いっぱい、なぐられて——
ぐわっ、框がへこんだとき、左京のからだは二間、横へとんで、手練の峰打ちが、滝夜叉姫か何かの背に走っていた。
「ううっ」
四肢を突っ張り、がくっとえびなりにからだを折って——土間をかきむしるように悶絶してしまった。
「し、死んだ……」
恐怖の戦慄が、一同に伝わる。
「ははは、次はだれだ」
豪快な左京の哄笑が、その戦慄を倍加した。
「命の要らぬやつからこい。どうした、斬りはせぬぞ」

「え?」
「いくらおれでも、血はださずには斬れぬわい、ははは」
完全に度肝をぬかれてしまって、暴徒たちは、最前の勢いはどこへやら、先頭にいた何人かは、べったりひざをついて、
「き、斬ったンじゃねえので……」
と、不審そうな声もまだ震えている。
「水をぶっかけてやるがいい」
そういって、左京は白刃をおさめた。
「さてさて、まだ騒がしいやつがいるな、鎮めてこい」
四、五人、頭だったやつが、戸外へとび出してゆくのを見送って、
「鎮まったところで、おれから頼みがある」
「へえ」
「今度の一件は、音羽屋にも、たしかに手落ちがあった。が、悪気じゃねえ」
「……」
「妙な面をするな。役者子供といって、四十面アさげても、するこたアからきし子供。世間さまの常識がねえ。それが役者だ。が、火を出したあげくの酒盛りじゃア、おめえたちでなくとも、腹がたつ。が、だ、火事とけんかは江戸の華、と俗にもいうとおり、格別珍しいことでもねえ。火にあったなア、災難だとあきらめるンだ。人間、あきらめが肝心だ。運の悪いやつア、花見に行って、土左衛門にもなる。軒下を歩いていて、かわらが落ちて、地獄へ突っ走るやつだってい

る。焼け出されても、そうやってゴロ巻くくれえ力が残っていりゃア、不幸中の幸いと思わなくちゃなるめえぜ。なア、唐土でも何やらいうじゃねえか、ほれ、人間万事塞翁が馬、とかってな。禍福常なきが浮き世だ、とすりゃ、禍を転じて福となさなきゃなるめえ、え？」

訳のわかったようなわからないような、説教で丸めこまれて、ぽかんとしたところに、

「今夜のところア、しかし威勢がよすぎて、腹が減ったことだろう、これで一杯飲むがいい」

ちゃりんと投げだした小判。

灯をかえして、きらきらッとまばゆく光った。二十枚ほどの小判——三河屋からゆすってきたやつだ。

「これで一杯ひっかけて、菊五郎のこたア忘れてくンねえ。あとあと、町つくり費用についちゃ相談にも乗ってやらアな。今夜は、おとなしくひきとるがいい」

脅したり、すかしたりだ。

掛け合いごとには慣れっこのうでの左京にきれいに丸められた暴徒たち——といっても、もとより自分自身の姿が恥ずかしくなる。

した自分の姿が恥ずかしくなる。

気を失った力持ちの兄いをひきずるようにして、ぞろぞろ引き揚げると、

「おかげさまで」

「ほっとしましたわい、一時はどうなることかとなア」

「まったく、生きた心地もねえことでした」

と、尾上松助や春五郎が、冷や汗をふく。

松助は、妖怪亡霊などの早替わりの名人と称されたが、身の丈は低いし、春五郎も、後の和事の名人新七で、腕っ節には自信がない。さっきから、ぶるぶる震えていたのだ。

「じゃア、おいらはこれで引きとるから、あとは、ここを壊してしまいな」

「へ？」

「壊すンだ」

「こ、この音羽屋を」

「そうだ。十四、五町も焼けて、火元のこの店だけ残っていちゃア、今日様にすまねえじゃねえか」

「へえ……」

「これだけの人数だったら一刻（二時間）とかかるめえ」

紋服は、菊五郎の変装に貸してしまっているから、下帯に太刀をすぽっと落とし差しに出てゆきかけて、

「いいか」

ふりかえって尾上松助をにらんだ。

「すぐにたたっ壊すンだぜ」

外へ出ると、

「あ、おまえさん……」

おろくが、着いたばかりの早駕籠から、飛び出してきた。

「おう、どうしてここへ」

「どうしてじゃない。あんた、けがは……」
「ははは、なんともあるもンけえ、左京は左腕だけにいつも刀をなめさせているからなア」
笑っているところに、息せききって駆けもどってきた元次郎。
「兄貴、ご無事で？」
「このとおりだわな」
——いらねえ、おせっかいをしやがって……
と、苦笑した左京。
——今夜は大文字屋にゃ行けやしねえ——
ぐいと、おろくを抱いた。早駕籠にはげしく揺られたおろくの胸は、まだあえいでいて、白い胸乳が、こぼれんばかりにやみにおっている。
——こいつだって悪かアねえが——
左京は、やわらかいまりのような乳房をやんわりとあじわいながら、
「元！」
「へ？」
「いつまでまごまごしているンだえ」
「へえ……？」
きょとんとした顔に、おろくが顔をあからめて、いった。
「さっさと、消えちまったら、どう？」
「えへっ、かなわねえ！」

黄菊白菊

1

「おかげをもちまして、尾上菊五郎、命助かり致しました。つきましては……」
——このせりふだ。
きちんとあいさつする菊五郎の前で、うでの左京は、つと腰をあげたかと思うと、毛脛をむきだしにあぐらをかいた。
「おう、菊五郎」
「……はい」
「その堅っ苦しい口上はよしにしてもらおうぜ」
「え？」
「ここは舞台じゃねえし、桟敷でもねえってことよ。おいらアもともと、おめえが大きらいだった。面が似てると騒がれるせいもあったが、よく考えてみると、おめえの、そんなきちょうめんさ、しちっ堅苦しさが、気に食わなかったンだ」
「でも」
と、菊五郎は、急にどうしてよいか、まごまごしながら、じっと見上げて、
「わたくしとしましては、ほんとうに命びろい。このお礼を申し上げねば」

「いらねえよ」
「いいえ、そうはまいりません」
「うるせえな。本人のおいらが、いらねえといっているンだ。江戸っ子は五月のこいの吹き流し、面倒くせえこたア、さらりと忘れるように出来ているンだ」
「それはそうでございましょうが」
「じゃやめな」
「でも、わたくしは浪花生まれの京育ち——お江戸育ちの方と、ならわしも違いますれば、わたくしの流儀で、お礼申し上げるほかはございませぬ」
「——なるほど」
勝手にしやがれ、と、この勝負は、うでの左京の負けと見えた。
菊五郎が、ぞろっとひざ前に差し出した帛紗包み。一目で金としれる。
「お恥ずかしいほどでございますが、お納めくださいまし」
「なンだえ、こりゃア」
「お礼のしるしでございます」
「金か」
「はい……お恥ずかしいほどで、命びろいのお礼と申しましては、なンでございますが」
妾のお浜が、わきからそっと白い手でおしやるようにする。
まだ二十になるかならずの、初々しさの残っている女だった。
「礼金……」

「と、申すほどではございませぬ」
「一両でも一分でも、礼金は礼金だ」
左京は、ふいに手を伸ばして、
「いくらあるンだえ」
と、無作法に開いた。お浜のまゆがちょっと動いた。
「ほう、こいつア気張ったな、五百両か」
「……」
「こいつをおいらにくれるかね」
「ええ……」
ことわるかと思うと、
「もらっておこう」
「お納めくださいますか」
「うむ、もらった」
わしづかみにして、いったん懐中へいれたが座り直して、またつかみ出した。
「いったんもらえば、おいらのものだ。こいつアあらためて、おまはんにやる」
「え？」
「やるといっても、おまはんの手で使ってもらいてえ。あの焼け出されの人々に分けてやるがいい。たったの五百両、十四、五町の人に分けりゃ、一人頭にして水桶一荷、下着の一枚くれえにしかなるめえが、それでも出さねえよりはいい」

役者が人気商売であることは、説教されるまでもなく、熟知している。現在でも多分に、演劇界ではその要素が強く、特に歌舞伎の世界は因襲的である。

戯曲が、役者に従属的存在でしかないように、その発達過程から、徹底した役者中心主義であり、その容色なり、芸なりが先行している。そこに、人気を切り離せない存在理由がある。

もとより金をばらまいて、人気回復をはかるつもりだったから、

「そのお金は別に用意してございまして、白猿師匠にも相談する手はずになっておりまして」

「五百両かえ、千両かえ。金高ア多いほうがいい。おいらア、礼金なンていらねえ、そっちへまわすがいい」

「でも……」

「あなた」

と、お浜が口をはさんで、

「こちらさまのおっしゃるとおりになすったら。それこそ、お江戸育ちのお方には、もっとさっぱりしたおつきあいをなさらなくては、かえって、ご無礼になりますよ」

と、お浜の歯ぎれのよい言葉は、日本橋界隈で育ったことを物語っている。

柳橋から、浜千代の名で（酌取り女といい、芸者という名称はまだなかった）出ていたのを菊五郎がひかしたのだった。

ぜいたくな衣類をまとい、かんざしなども目立つ派手やかさだが、物腰のすっきりした色気は、左京ごのみで、

「そうともそうとも、おかみさんのほうが話せるじゃねえかえ」

「あら、あたくし……」

「江戸っ子だわな」

と、じっと見つめられて、お浜は思わずうつむいた。そのえり足のなめらかさに、すっとひきよせられそうになって、

——左京、おめえの女好きにもあきれるわな……

と、影の声が、にたりとした。

左京は、あわてて目をそらした。

昨夜は、おろくと、ねた。小網町の船宿だった。大文字屋にいり浸りをねたんで手を焼いた。が、ねてみれば、若い盛りで、

「——錦絵に版行したいと、金鱗堂からやかましくいってくるのさ」

「描かせてえのだろう、描かせりゃいいやな」

「だって……」

「おめえの面だわな、だれにことわるまでもあるめえ」

「あら、そんな憎い口をおききかえ」

「憎いも好きもねえ、錦絵が出ても一枚も売れねえのがこわいのか」

「あら、またあンなことを。あたしゃ、錦絵が出ると、ただでさえうるさい連中が、朝から晩までおしかけちゃ、おちおちあいびきもできないからと」

「おありがとうさンで」

「憎らしい！」

つねったりつねられたりの痴話げんかのくちびるとくちびるが、どちらからとなく寄りあうと、充分知りあった相手のからだだ。そのままくずれて、秋の夜長も短い夢を見た。

船宿のおかみが、粋な声を障子の外からかけて、目をさましたのが昼少し前。もう、外に櫓の音が高く、しんと秋日がさして、大川の水が、障子に明るく揺れているところだった。

おろくは髪結い床に寄って浅草へ行く。うでの左京が、松島町の稲荷裏、菊五郎の妾宅へ寄ったのは、彼に金をばらまかせるためだった。

それだけやってくれないと、啖呵をきったてまえ、顔がすたる。

「――そうかえ、おまはんが、それだけ気張るたア、やっぱり千両役者だ」

またくるぜ。どうぞ、お近いうちに。おかみさんの色香にひかれそうだから……。あら、ご冗談を。

冗談にしておいておくンねえ――と、返してもらった紋服の肩を振って路地を出ながら左京は、

「冗談にしたくねえなア……」

と、つぶやいた。おろくの肌で満ちたりていながら、昨夜は昨夜――今夜は今夜と、浮気の虫がささやいているのだ。

2

「油店が悪かったンじゃない、火を出したのが悪かっただけさ」

尾上菊五郎が、性懲りもなく、また油店を出したのは、霜月に入ってまもなく、焼けあとに芝居街だけに復興が早く、引き手茶屋などが九分どおり建てられたころであった。

だが、さすがに、菊五郎の音羽屋ではまずい。

「あたしたちは、顔を出さないほうがいい」

と、彦三郎にいって、

『新音羽屋』

と、屋号をつけた。これは高弟尾上松助の屋号でもあり、店開きには、松助と坂東愛蔵の二人が顔を並べた。

彼らの店というわけで、のれん看板、全部黒の重ね扇と角切り角のうちに鶴の丸。だれが見ても、菊五郎が、後ろにいることは分かるが、こう出直されては、反感を持っている者でも正面きってあげつらうわけにはいかない。

店も以前の茸屋町の角地が最適な場所だったが、これはわざと売り渡して、新しく瀬戸物町に家つき土地を買い入れた。

瀬戸物町は、日本橋にほど近く、室町二丁目と背中合わせで、伊勢町に面し、白粉店・油店にはかっこうな、まず二等地だった。

そのおかげか、新音羽屋の屋号がファンの心を揺すぶったのか、店は、前に変わらぬ繁盛を呈した。

が、なんといっても、人気の落ちたことはいなめない。

ひいきのだんな衆も遠のいたし、錦絵の売れ行きもガタ落ちだと、絵草紙屋で聞いてきた弟子がしょげていた。

ひとつには、芝居年中行事の蓋あけたる霜月の顔見世興行に謹慎のため、出なかったことにも

よる。

九月十二日の『世界定め』という、新規抱え入れの立て作者、座頭、立て女形などが座元の宅に集まって狂言の相談をしたのが最後で、十月半ばの『はなしはじめ』すなわち顔寄せと狂言の披露にも出ず、霜月朔日の顔見世初日の殷賑さも、松島町で、お浜を相手に寂しく番付を見ていた。

人気というものは上昇するときの速度と下降のそれとは、倍の開きがあるといわれる。

ことに、舞台でのトチリや、今度のような、ともかく失態は、人気役者にとって致命的だった。

「――お浜、いよいよ音羽屋も、これでおしまいかねえ」

「太夫が自分から、そんなじゃア……」

と、おとなしいようでも下町育ちのお浜だから、

「いっそ木場にでも相談にいらしったら」

「白猿かえ」

「ええ、海老蔵さんなら、お年だし、いつも目をかけてくださるし、ナンカいい考えがありゃしないかしら」

それもそうだ。久しぶりに会ってみよう、と、菊五郎が駕籠を呼んだのは、その霜月の朔日に蓋をあけた顔見世興行が、市川団蔵、瀬川菊之丞などの人気をいやが上にもあおり、そそり狂言の熱狂裏に幕をおろそうとしているころであった。大川端には雪を催した冷たい風が吹き、葭をさわがせていた。

――考えてみりゃア、少し調子にのりすぎていたかもしれない――

駕籠に乗るのに頭巾をしたのも、なろうことなら、顔を見られたくなかったからだ。

幸いとこの寒さである。かぶりものはご法度になっていたが、菊五郎としてみれば、どうにも人に見られたくなかったのだ。

時折、朔風が、駕籠の垂れを巻きあげる。

菊五郎は、えりをかきあわせながら、ふっと自戒している自分が、五十の坂でも越したかのように、老いこんだものを感じた。

――まだまだ五十には間があるンだ、役者が老いこんじゃいけねえ。

――白猿先生なンざ、おれより十近くも年上なのに、十五の女を囲っているということだからな……

木場に着くころは、とうとう空が泣きだして、氷雨が、駕籠の屋根にパラパラとおちてきた。

「――おう、もう見えるころだと思ってましたよ」

中風の気味で休んでいた白猿は、喜んで迎えた。

白猿――二代目市川海老蔵である。

彼は生粋の江戸っ子で、菊五郎とは、その江戸初下りの興行〈仮名手本忠臣蔵〉で組んでから、親しく面倒を見てくれている。若年で名をあげるや、ころりと夭折した俠気の役者二世団十郎を父に持つだけに、その血をひいて、歌舞伎界には珍しい俠骨をもって鳴らしていた。

幼名七蔵といい、初代幸四郎の養子となり、のち二世幸四郎を継ぎ、ついで四世団十郎を襲ったが、後に実子三世幸四郎に団十郎を譲り、また幸四郎に復した。二代目海老蔵を襲名したのは、数年前、いまでは番付も極上々吉、無類、すなわち大関になれぬのは奇嬌なことが多いせいだと

いうが、菊五郎は、師に仕えるようにして接していた。

俳名を白猿――彼の没後、五世団十郎また白猿と名乗った――というのからして、ただの役者の趣味的なものとは違っていたことがわかる。

彼の身のまわりの世話をしているのはお柳という十五の娘。三年ほど前にも十四、五の女を向島で囲っていたこともある。初物食い、と、陰口をきかれるが、

「役者はいつまでも若くなくちゃいけねえ、役者から娑婆っ気がうせたらおしめえだわな」

と、日ごろから口にして、若い肌を抱いていた。

お柳は、笑うと右のほおに、錐で突いたほどのえくぼができる、本所生まれの、はきはきした女だった。

菊五郎の目にも、美人というのではお浜の方が一枚上だが、お柳の伸び伸びとした肢体は見るからに若さにあふれていて、

――白猿先生の若返りの妙薬か……

と、ほほえましくなるのだった。

白猿は、行火に手を入れて、黙って菊五郎の話を聞いていた。

聞いているとも見えないような、感情の動かない面である。

氷雨が、ばさばさ庭の笹を鳴らしているのへ、耳を傾けて、発句しているような、そんな表情だった。

「――そうかい、上方へ帰りてえというンだね」

ややあって、白猿は、お柳の点前の薄茶にのどをうるおして、いった。菊五郎が、とても酒どころではないと断ったので、茶をたてさせたのである。

「師匠の尾上左門が以前申しておったのですが、評判というものは、良くなりゃ、我知らぬうちにあがるが、悪くなりゃ、だれも止めてくれはしない。世間というのは、悪くいうだけいえば、また思い返して、新しい目で見てくれもする。その間、じたばた悪あがきをしようとすると、よってたかって足をつかみ、ひきずり落とす、それが世間だ、と」

「なるほどな……」

白猿、こっくりこっくりした。

「それで、とにかく江戸を離れようと」

「さようにに決心いたしましたが」

「それも悪かアないがね、音羽屋、もういっぺんじっくり考えちゃアどうだろう」

「はい……」

「京は、おまえさんの育った土地だ、芝居見巧者のひいきも多かろう。だが、こんどのことはもう上方へ知れているンじゃないだろうかねえ」

「それは……」

「怒っちゃいけないよ、もののたとえだ、悪事千里を走るともいう。悪事といって、おまえさんの場合、てまえから悪をおかしたンじゃアない、いわば災難だ。せんじつめて悪いといえば、油店を出しなすったことが悪い。が、いまさらそんなことをいっても始まらない。あたしがいいたいのは、もう一度、花を咲かしてから、スッと京へ上っちゃアどうだろう。それだと、逃げた、しりに帆かけてアレ音羽屋が、と、悪口いわれなくて済むンじゃないだろうか」

「ええ……」
「京へのぼっても、おまえさんのことだ、二度と江戸の土地は踏まないというンじゃあるまい。まだまだ、一花も二花も咲かせるンだし、もう一度、おまえさんの舞台姿を江戸の客に見せて」
「でも、そりゃア白猿さん……」
「かまわねえじゃねえか、役者ア舞台で死ぬのが本望だろう、え?」
「それはそうですが」
「なら、やってみなさるがいい。客がそっぽをむくかもしれねえ、やじりとばされ、半畳をたたきつけられ、芝居が出来ねえかもしれねえ。だが、盲千人いても目明きも千人いるンだ、思いっきり、やってみたらどうだろうねえ……」

3

「——あら、雪になったンじゃないかえ?」
氷雨がやみかけたと思ったら、いつかさらさらと、縁に降り込む音が、笹の葉で掃くようなやさしさ。
「もう帰らなくちゃア……」
と、おひろは、腰を上げた。
大川端、いまの浜町河岸の一ツ橋家下屋敷のお長屋である。叔母と誘い合わせて堺町の中村座(だけがいち早く復興して、顔見世興行をした)を見た帰り、道すじだからと、観劇の興奮を持ち込んで、おしゃべりしていたのである。

「今夜は泊まっておいでなさいな」
と、お貞は名残惜しそうにひきとめた。
「この雪じゃア……」
「あら、おとっつぁんやおっかさんが心配するから」
「いいじゃないの、少しくらい心配させたほうが。ほほほほ、一文さんを帰して、泊まってらっしゃいな」
「へえ、てまえだけ先へ帰すとは、ても薄情なお方じゃわいなア」
一文はげの留松が、語尾をくしゃみで震わした。
「変な声を出すからよ。ねえ、おひろちゃん」
「あら、でもそれじゃア、叔母さんに悪い」
「悪いことがあるものかね」
「悪いわ」
と、まだ二十になったばかりの叔母を、いたずらっぽい目で見て、
「新婚ほやほやなンですもの」
「ああれ、いやな子」
「ほほほほ、帰るわ、留松、駕籠を拾っといで」
「へへい、合点承知のすけ」
大川端から馬喰町。大回りをしたところで半道とない距離だが、分限三河屋の一人娘だし、雪とあれば、駕籠に乗る。

現代のように、子供でも自動車を乗りまわした時代ではないから、隣に行くのに駕籠を呼ぶに等しい。

「大川端の雪景色も、オツなものじゃないの」

「千鳥の声が聞こえれば、おあつらえむきね」

「あらいやだ、恋の道行きじゃあるまいし」

あいにくと、風流を楽しむ余裕はないやみ夜の雪だ。

そんな問答をしているうちに、雪ははげしくなり、駕籠に乗ったころは、もう、白毛氈でも敷いたような雪道になって、風がほおを刺した。

「駕丁さん、急いでくンねえ」

留松が、ませた口をきいて、

「こンな雪の夜に、美女を乗せた駕籠はねらわれやすいからねえ」

一ツ橋家は田安、清水と並んで御三卿だから、下屋敷といっても遠慮がない。長屋の裏通り川端を、前後に木戸を設けてある。その木戸の閉まる音も、さっと雪風にさらわれた。まっすぐに元柳橋まで、諏訪因幡邸のなまこ壁が長々とつづいている。丁度、現在の千代田公園から矢ノ倉町の川っぷちで、右手は暗い大川。

遠くに番屋のあかりがちらちらしているだけの寂しい場所だ。

おひろを乗せた駕籠の、棒はなにぶらぶらゆれる小田原ぢょうちんの灯をながめながら、

「――来ましたぜ」

と、壁ぎわから立ち上がった影がある。

「まてば海路の日和とやら、ねぎを背負ったかもがお駕籠で」

「やるか」

「やっておくンねえ、兄貴、今朝っから、すきっ腹がクウクウ鳴いてやがンだ」

「けんかは慣れているが」

と、もう一つの影は、頭巾のうちから、苦々しそうに、

「夜盗は、へその緒きって、やったことがねえ」

「だからさア、あンまり男前を見せねえで、音羽屋から、せめて二十両だけ払いもどしてもらやアよかったンでさ」

「旗本が、口に出せるけえ」

「それが、兄貴の悪いとこなンだ」

「てめえにやった一両、早駕籠に食わせるからこんな始末だよ」

「あ、あれだって、音羽屋から、たンまりもらえるからと……あ、来やした」

ぬっと二人は、道の真ン中へ出た。

4

走ってきた駕籠が、

「あ……」

と、たたらを踏む、目の前に、

「……」

無言で、ぎらりと抜刀する。気がすすまないからすごみが出ないが、
「うわア！」
駕丁は仰天して、腰を抜かした。
「お嬢さんッ」
留松が垂れをあげるのと、中から、おひろが顔を出すのが同時だった。
抜刀が、ちょうちんにキラリと映じた。おひろは、あっ、といった。
「菊五郎……？」
「なに？」
ぎょっとしたのはうでの左京。
「なンだ、おめえ、三河屋の……」
「兄貴！」
「こいつアお笑いぐさだぜ、元の字」
ぱちんと鍔が鳴って、刀を納めたから駕丁は、雪のなかに腰を抜かしたまま、唖然としてしまった。
「高木、左京さまとおっしゃいましたかしら……」
「いけねえ、いけねえ」
「びっくりしてしまって、あたし……」
「おいらのほうこそびっくりしたぜ、とんだ茶番になっちまった。やい、駕丁、なにをびくびくしているンだ、さっさと担がねえか」

「へ、へえ」
「元の字、行こうぜ、めっぽう雪が深くなってきたようだ」
「あの……」
「会わなかったことにしようぜ、おひろさん」
雪駄にかぶった雪を払って、もう左京は歩き出していた。
やっと駕丁が、棒に肩を入れる。お嬢さま大切と、イザとなれば番屋に駆けこむつもりだった留松、まだ胴震いのとまらぬ様子で、
「は、早く……」
駕籠を走らせろ、というふうに、小さな手を振っている。青い顔に、揺れているちょうちんのあかりが、影を動かしていた。
「はははは」
と、歩きながら、うでの左京は、自嘲するようにわらっている。
「こんなトチメンボウな話ってあるけえ、え？　元の字」
「ま、まったくでンね、三河屋の娘たア知らざンしたよ」
「やっぱり、おいらにゃゆすりかたりがお似合いかもしれねえの」
「あ、あの小娘から、小遣い銭をふンだくりゃよかったわえ」
と、元次郎のほうが、前髪とれたばかりの不良少年のくせに、いうことがしつっこい。
気が向けば、人助けもするが、することがこせこせして、小悪党の素質がある。この年ごろの反抗と悪への誘惑が、矯正されなかったことが、元次郎の一生をあやまらしてしまうことになっ

た。

振り返ると、ようやく、駕籠が上がったところだ。

「兄貴、もう一度おどかそうかえ」

「よしな、あンな小娘をいためちゃア、あと腹が痛ンでかなわねえやな」

ふふふふと、肩を揺すって笑ったとき、とととッと、雪をけちらして走ってきた男がある。

「――見やしたぜ」

「？」

「天下のお旗本が、雪の大川端で、斬り盗り稼ぎ」

「き、きさま」

「ほえても遅うござンす、どうせこンなことだろうと前々から目をつけていたンだ」

「や、やい」

元次郎、すっぱ抜かんばかりに詰め寄って、

「うぬア、何をいいがかりつけやがンだ。どこに盗みをしたい！　懐中ア貧のケツだ。いつ斬りはぎをした」

「しようとなさった、こいつにうそ偽りはねえ、この薬研堀の与七の、二つの目がちゃんとみたンだ。へへへへへ、二、三日うちに、お係のほうからお呼び出しが来るのを待っていなさるがいいやな」

十手で、ぴたぴたほおをなでるようにたたきながら、

「これで、泣かされる町人がずンと減るこったろう」

「うぬ！」

待て、と、左京がとめる前に元次郎、とびあがるようにしてすっぱ抜いていた。

「や、な、なにをしやがるンだ」

十手をかざして逃げ腰になる真っ向から、

「食らえ、こんちくしょうッ」

年の割にはませてはいても、巻きわら一つ斬ったことのない元次郎だ。度胸だけはあるつもりで、

「うぬっ、生かしちゃおけねえ」

斬った。

「うっ……く、くそっ」

花のように、雪の上に血がとび散った。

刃は、与七の片耳をそぎ、ほおからあごを割って、のけぞる胸をざくりとやった。

「う、う、うぬ……」

ぐるぐる十手を振りまわしながら、すとっと雪のなかに倒れた。

「野郎！」

元次郎の二の太刀が、拝み討ちにたたきつける。

「うわっ」

必死に逃れて、一回転した。そのからだが石垣からはずれて、与七は雪をつかんで、大川へ――どぶりと、にぶい音がしただけである。

「元の字……」
「あ、兄貴、や、やっちまったぜ」
ぜいぜい、肩で息をしながら元次郎、
「お、お、岡っ引きを、やっちまった……」
どういう気か、血刀を投げだして雪をすくい、まるで砂で手を洗うようにごしごしやっている。
「だ、だれも見ちゃいなかったろうな、あ、兄貴」
「うむ」
左京は、振り返ってみた。
小田原ぢょうちんはもう見えない。番屋の灯だけがまたたいているだけである。
「三河屋の娘が……」
ふっとつぶやいた。
とび散った血を、清めるかのように新しい雪がさらさらと、降りつもってゆく。

5

金にあかせて買った錦絵だった。
「――音羽屋の芝居が見れないのだもの」
「瀬川菊之丞はいかがでございました」
「あンな甘っちょろいの、きらい」
「やっぱり菊五郎でございますかねえ」

と、女中のお時が、あきれたような感心したような顔で、床をのべていってからも、おひろは、錦絵を並べたり、まとめたり、絵づらから舞台の思い出に浸ったりして、ひとりで楽しんでいた。
雪は、いくらか小降りになったようだが、まだ、さらさらと、ひさしを掃いている。
夜風だけなのだろうか。こたつから出していると、しんと手が凍りつくようだ。
どこかで、鐘の音がした。すでに五つ刻（八時）をすぎているはず、
「おやすみな、三毛ちゃん」
こたつの上で、うとうとしているねこの耳を、ひょいとはじいて、おひろは布団に入った。
そのときである。
すっと、冷たい風が吹き込んだ。
「あ？」
「静かに」
頭巾をかぶった武士が、するりと、ふすまをあけて入ってきたのだ。すべり込むように、軽い身ごなしだった。
「あ、あなたさまは……」
「声をたてちゃいけねえ」
刀こそ抜かないが、ぴかりと双眸が光る。
おひろは、本能的に寝巻きのえりをかきあわせて、すくんだ。
「怖がることはねえやな、さっき会ったばかりだ」
ぬれた頭巾をはらりととったのは、うでの左京。

「冷てえ、冷てえ、骨の髄まで冷えこみやがったぜ」
行燈は有り明けに代えてある。三日月形のすかしから漏れるあかりに、左京の顔が浮きあがった。
酒が入っているとみえて、ほんのりと、面が染まっている。不惑をすぎた菊五郎が、べた塗りの化粧顔にいきいきした若さを吹き込んだら、こうも魅惑的なのではなかろうか。
おひろは、向きあっていると、恐怖よりも羞わしさを感じてきた。菊五郎へのおもいが、相似の左京に仮託されて、燃えあがってきたことを意識するには、おひろは、まだ若かった。
「おひろさんえ」
左京は、優しくいった。
「おいらア、おめえのことが忘れられなくての」
「……」
「河岸で、おどかしたのは、ワザとしたことさ、忘れてくンな」
「ええ……なンとも」
「そうかえ」
ぬれたすそをくるりとまくって、左京は腰をおろした。
「あの……」
羞わしく思いながら、しかし、大店の一人娘。夜陰に、こうしたところを見られては、と、やはり世間知が働くだけの、ゆとりはあった。
甘い男女のむつび合いには、うでの左京の姿に漂うものが、情緒というものからは遠い。

「おひろさんえ」
「……あ、あの」
「左京が、おめえにゃ、ぞっこんまいった」
と、彼は手をとった。はっと身をふるわして、手をひこうとしたが、もう遅い。
「放して」
「放さねえよ、おひろさん、こうして雪ン中をしのんできた男の気持ち、娘だからといって、わからねえことアあるめえ」
「あ、あたし……」
「なア、わかってくンな」
「あっ」
声が高くなった。
左京の左手が、胸にふれた。身をよじるあいだにずるずるっと引き寄せられていた。
「い、いけません……」
「いけねえことはねえ、好きな男が、わざわざ入ってきたンだ。え、男の気持ちがわからねえのかえ」
「いいえ、でも、でも……」
「芝居をなンのために見ているンだえ、黄表紙を読んだことがねえはずはあるめえ」
芝居や読本類は、女の性教育でもあると、その言葉は知らず、いいたい左京の胸のなかに、男の血がふつふつと、たぎりはじめていた。

「放して、人が……」
「大丈夫だよオ」
「人が来ます」
ほとんど、おひろはあえいでいた。
動悸は早鐘をうつように鳴り、かっかっと、顔が、全身がほてっていた。頭はがんがん鳴っているし、目の前も七色の虹が交錯し、火花が散るようで、ぽっとはなやかな、紗の目隠しをされたかのように薄れていた。
あえぎながら、あらがいながら、何をいっているのか、自分でも意識していなかった。うわごとのように、
「人が、人が……いけません、放して」
と、夢中で、うめいていた。
「いいからよ、男の味も悪いものじゃねえよ」
その、若い菊五郎の顔が、かぶさってきた。

6

紋服はぬれていた。その胸に、たくましい腕で抱きよせられたおひろは、しかし、冷たさも感じなかった。
何をされているのかも、これから、どのようなことをされようとしているのかもわからないほど、逆上していたにもかかわらず、感覚だけは、かみそりのように鋭くなっていた。男の体臭に、

太い指のうごめきに、くちびるの感触に、おののいた。
——いけない、菊五郎……
ふっと、舞台の上にあるような錯覚を起こす。
歌舞伎も宝暦期には、狂言があくどくなりはじめている。官能的な写実が、『無理口説き』というような、あぶな絵式の見せ場で、客の好き趣味をあおっていた。
おひろは、被虐症的な陶酔を、拒みながら犯される小町娘の姿を、脳裏に描いていた。
芝居絵の影響もある。女をこなすに慣れた左京の、くちびるの魔力もある。
——ああ、菊五郎、あたしを……
しびれるような陶酔のうちに、いけないいけない、と責める声が、やはり心の一隅にあった。
おひろは、口を吸われながら、もがいた。左京のからだを突きのけようと、焦った。
——ふふふ、もうこっちのものだ……
ほれたわけではない。
処女の肌は、はじめての左京だから、もとよりきらいではなかった。が、本意は、おひろの処女を奪うことによって、薬研堀の与七殺害の一件を、やみに葬ることにあった。
——あばれろ、あばれろ、だれも来はせぬわさ……
抵抗はこころよかった。
弾力のある処女のからだであった。ほそい首すじ、髪のにおい、肌のにおい……小さなくちびるのなかで狼狽する舌のうめき。
——どうだ、どうだ、ふふふ。

女の肌を犯すのは、はじめてではない。

常人に勝った膂力と、指さきの技巧と、くちびると舌と……たいていの場合、女のとびらは、容易に開いた。

女は敗北する。が、その敗北は、常にこころよいはず、と、うでの左京はわらう。いままで、彼に犯されて、爾来、彼を憎んだ者は一人もいないではないか。

——この女も……

と、自信が、叫ぶ。

——もうすぐだ、もう少し、もう少し……

左京の右手が、うすい夜着に包まれた背から、腰にすべり下りた。

娘ざかりの、豊かな腰であった。

「ああ……」

かたくなに、命を賭けて、拒んでいたおひろの四肢から、力が抜けた。

左京は、ほくそえんで、くちびるをはなした。有り明け行燈のあかりに、おひろは、意志を失った人形のように目を閉じていた。

かたちのよい鼻がうっすらと汗ばんで、まつげが、かすかに震え、赤いくちびるのなかで象牙のような歯が、かちかち鳴っていた。

——処女の肌だ、男を知らぬ、この肌を……

漁色には慣れたはずであった。

道徳など、いつも踏みにじってきたはずであった。

それがどうしたことだ。左京は、まじまじと、おひろの面をみつめたまま、なすすべもないかのように、動かなかった。

初春狂言

1

「春狂言には、三座そろわなくては……」

いち早く復興した中村座の、顔見世興行に満都の人気をさらわれた河原崎座と市村座では、躍起となって、再建を急いだ。

江戸芝居三座は、吉原の遊郭などと同じく独占企業で、三座の足並みはそろえねばならなかったが、音羽屋火事で、中村座だけが半焼で済んだからである。

そのとしの暮れは雪が多く、壁のかわきも遅かったが、どうやら暮れのうちに、二座とも、前に倍増して、絢爛の芝居小屋が出来上がった。いうまでもなく、塗りごめ土蔵造りの、豪華なものである。

「さア音羽屋、不名誉をすすぎなさいよ」

二代目市川海老蔵白猿に励まされて、

——これが最後の江戸わかれ……

と、思うから、菊五郎は、ふるいたった。

「おさんちゃん、こんどの春狂言には、一緒にゆこうか」
「あたい河原崎座がいい」
「だめよ、やっぱり市村座。菊五郎が出るンですもの」
「音羽屋に、団十郎、海老蔵、彦三郎、やっぱり市村座がいいわねえ」
「菊五郎を悪くいうひとがいるけど、やっぱりねえ、え」
もちつきに手伝いに来た長屋の女たちが、そんなはしゃぎかたをしているのを、おひろは、沈んだ顔で聞いていた。
あの夜以来——
病気になったように沈みがちのおひろであった。
「どうしたンじゃ、どこぞ悪いのではないか」
と、あるじの久左衛門も、ひとり娘だけに心配して、
「おすが、医者にみせぬといかんわえ」
「ええ、米沢町の玄庵先生に診ていただきましょうね」
「……いや」
おひろは、拒んだ。
「なぜ、いやじゃ。病気は、早いうち治さんことには、こじれてしまうと……」
「どこも悪くないもの」
かたくなに拒むのを、

「顔色も悪いし……」
と、久左衛門は煩悩ぶりをあらわにするし、
「嫁入りまえだからねえ、変なうわさでもたつとねえ……」
母親のほうは、それが心配なのだ。
変なうわさ——といわれると、おひろはどきりとする。
「おっかさん」
ちらちらと、母をぬすみ見る目が憂わしげだ。
あのことを知られたのではないかしら、と、おひろの小さな胸は波だった。
「だって、おまえ、横山町のおせんちゃんだって、下柳原のりえさんだって、労咳だったから、せっかくのお嫁のくちを……」
ああ、そのことか、おひろはほっとした。
——だれにも知られていないわ……
三河屋の娘として、それだけが気がかりだったのだ。
あの雪の夜うでの左京に抱かれ、口を吸われた。
どうしたことか、左京は、それ以上は要求せず、雪のなかへ去ったのである。
はじめて知る男の力と、華麗な舞台の幻想で、左京の手のひらが腰にすべってきたときには、暗示にかかったように、理性がまひし、抵抗を失ったのだ。にもかかわらず、左京は、最後のものを奪わなかった。
「——かんにんしな」

そういっただけで、手をはなしたのである。

なぜか？

その理由は、知るよしもない。

興奮の渦中にあったときは、ふっと冷水を浴びせられたようなむなしさを感じ、左京が去ったあと、ひとり布団を抱いて、何がなしに泣けたおひろだった。

その激情も、眠りもやらず迎えたあしたの、白々としたあかりのなかでは、

——よかった、処女を失わずに……

と、自分を取りもどしていた。

女中にもばあやにも知られてはいないはず。

だが、医者にからだを診られると（処女らしい羞恥心もあったが）左京に抱かれたこと、口を吸われたこと——等の秘めごとを、悟られはすまいか、という心配が先にたった。

「いや、やぶ医者なンか」

下町っ子らしい気の強さで、すねたようにいいながら、語尾が、ふっと湿るおひろだった。

2

役者にとって、ファンが財産なのは、いまさらいうまでもない。

「役柄は、何がいいでしょう」

人気を取り返す大切な舞台だから、菊五郎は、また深川木場に白猿を訪ねて相談した。

「そうですね、縁起ものだから、見た目にも派手なものがいい」

「と、申しますると、朝比奈などでは」

「いいね、朝比奈だったら、はずれがない、それに決めましょう」

当時、初春のだしものは、曾我狂言が吉例だった。

曾我狂言は延宝ごろからもてはやされるようになっていたが、なかんずく、〈曾我の対面〉の場が、中心であった。初期の繁雑なものから年次、洗練されてきて、宝暦期に入ると、ほとんど完成を見ていた。

よく間違われるのだが、曾我狂言と、曾我祭りとは違う。後者は、この七、八年前、中村座で〈奉納大踊り豊蔵曾我祭り〉を出したところ大当たりに受けて、以来、芝居道の五月吉例となっていた。

それは、兄弟の夜討ちが、五月二十八日に行われたからである。

もっとも、このときは、市川海老蔵、二代大谷広次、二代中村七三郎、二代中村伝九郎、中村富十郎、佐野川市松等、立て役者など一座総出演なのが、豪華で、縁起をかつぐ商売に、受けた。

芝居者の大きなうしろ盾は、当時、日本橋、神田、蔵前辺の大商人だったせいもある。相撲が大名旗本をひいきとしたように。

以来、芝居の春狂言には、曾我兄弟を祭ることになっていた。

これは、もともと、楽屋でする内々の祝いごとだったが、六年前に、市村座で〈梅若菜二葉曾我〉をだしたところが、連日満員札止めの盛況だったために、

「荒人神の神慮にかないしことじゃわ」

「舞台で、お客さまともども、祝うていただこう」

楽屋内の祝事が、舞台に持ちだして、神しずめの大踊りと、結芸ずくしを演じた。

これが、にわか仕出し踊り総出演の濫觴である。

江戸三座とも、等しく仕切り場に曾我両社のみこしを鎮座し、四方にしめなわを張りめぐらし、供物を沢山供えて、入り口には祭礼の大のぼり、行燈、燈籠などを飾る。

この日ばかりは、役者だけではなく、おはやしかたから裏方までが、蝶と千鳥の伊達衣装で花道からはやし鳴り物入りで、みこしを舞台にかつぎだすのだ。すずめ踊りや花笠踊りなどではしゃぎまわり、それからおもいおもいに、にわか、茶番、かくし芸などを演じて見物人とともに楽しんだ。

のちには、本祭り同様に、おおげさに趣向を凝らして、近々五、六町を練り歩くほど浮かれたので、幕府のおとがめをこうむったほどである。

曾我狂言は、要するに、人口に膾炙された曾我兄弟の仇討ち譚を粉飾したもので、幸若舞曲から、古浄瑠璃に取り入れられたほか、義太夫にも近松の曾我物十一種がある。と同時に、歌舞伎にも幾多の曾我狂言が、期を同じくして生まれている。

その嚆矢は、明暦元年山村座の〈曾我十番切り〉である。

——舞台へ、甲冑鎧のいでたちにて十四、五人居並び立ちまわりなどせしかば、見物大いに驚き、芝居の面白きことを知りて、見物日々大入りをなし、三十日余の興行せしというんぬん——

と、いうほどであった。

当時は客すじは江戸のみに限られていたから、三十日余の興行といえば、現今、ブロードウエー

で年余の興行に等しい。

以来、今日の映画界でいう〈忠臣蔵〉と同じで、だせば当たる。

それが慣例となったのは、宝永六年の初春興行に、各座が異種の曾我ものをだし、いずれも大受けで、その縁起にあやかったものである。

これは、以来、明治初年までつづいている。

歌舞伎史から、省くことの出来ない一ページだ。

もっとも、題は〈曾我狂言〉でも、後世、助六や八百屋お七に縁を付けた異種の、というより曾我物語とは、全然無縁のものも行われたが。

さて、夜来の朔風が、宝暦十三年の初日の出とともにぴたりとやんで、うそのように霽れた。

あとは、ほろほろと淡雪が宙に舞う。めでたい元旦。仕初めの式三番翁渡し、菊五郎は、おもてだって市村座に顔を見せた。

「初春狂言で、ひいきのだんな衆にたばこ入れや羽織をなげられますように」

と、お浜自身、観音様へ朝参りし、だんな衆に名入れ手ぬぐいを配ってまわった。

千両役者、といわれても、ひいきがはなれ、小屋主からの給銀だけではやってゆけない。

お浜は、へそくりをすっかり出したが、年があけると、もう一貫（文）と手もとに残っていなかった。

「おまえさん、どうしよう」

「何が」

「衣装ですよ、朝比奈をやる衣装を」

「駿河屋から持ってこないかえ」
「悔しいじゃないの、駿河屋では、あんなに請け合っていながら、作っていないンだって」
「なンだって？」
「怒っちゃいけないよ、初春から怒っちゃいけない」
と、お浜はいきりたつ菊五郎をなだめて、
「だれが悪いンじゃない。こちらの手元を見通した駿河屋が商売人だってことさ。悪いのはうちなンだから」
「悪いといっても、なにも踏み倒そうというのじゃなし」
と、そこが役者子供の菊五郎は納得せず、
「狂言が終われば、祝儀が入る。それで衣装代ぐらいは」
「いっても始まらないじゃないの」
「駿河屋のやつ、どあほうあつかいにしよって」
「だって、品物はむこう持ち、お代はこちら持ち、怒ったってはじまらない」
役者の人気がいつまでつづくものではない。
河原こじきの浮かれ大名、とそしられる人気商売の菊五郎に、金だけではなくほれているだけに、お浜は芯のしっかりした女だった。
——いつかは、落ちめになるときがくる。
日ごろから、その覚悟があるから、じたばた騒がない。
「しようがないじゃないか、このうえは、損料屋からでも借りなくちゃ」

「名題役者が、損料屋にゆけるもンかいな」
「そんなことをいっていたら、いつまでたっても、舞台には上がれないよ」
あたしがゆくから、と、けなげに、お浜が貸し衣装屋丸惣ののれんをくぐって、朝比奈の衣装を借りてきた。
「——すまねえ、お浜」
「なにをいってるのさ」
京には、菊五郎の妻がいる。もとの師匠の娘、尾上家の家つきであってみれば、まず、愛情のいかんにかかわらず、正妻になおる望みはない。
「あたしゃ、江戸の妻——それでよござンす」
と、涙をかくして、ほほえんでみせるお浜が、正妻以上に尽くすのも、権高い家付き娘には菊五郎の心が通わず、ほんとうの夫婦の愛情生活を知らぬ彼であったからなのだ。
「あたし初春興行にはゆけないけれど、しっかりやっておくンなさいな」
身の皮はいでまでも、因習的な、金のかかる役者の交際の費用を捻出したお浜は、晴れの市村座に行く着物がなかった。
「すまねえ……」
人気商売の苦しさ、はかなさを、いまごろ味わおうとは、夢にも思わなかった菊五郎のほおに、きらりと光るものが流れた。
それほどまでにして迎えた初春狂言が、とんだ結果を招こうとは。

3

「だ、大丈夫かえ？」
「まかしておきな」
「だ、だってよ、兄貴……」
「うるせえの」
「どこからか、見張られているようで」
「しっ腰のねえやつだ。胴震いをやめな、かえって目に立たア」
「だ、だって……や、やまねえンだ、風邪をひいたらしいンだよ、兄貴」
かぶりつきや、花道側はいうまでもなく、両そで桟敷から、つんぼ桟敷まで、ぎっしりと客で埋まっている。
この二人の会話は、立ち見席に近い桝から聞こえてくる。
新築の小屋だから、緞帳の豪華さに驚嘆したり、木口の値ぶみ、役者のあれこれ、着飾った女客の品定め、女たちは、ひとの衣装をねたんだり、けなしたり、はては米価があがった話。幕が開くまで、期待と興奮でわいわい騒いでいる。もう弁当のお重をひらいたり、赤前だれの、お茶子をからかったりしているやつもいる。男たちの大半は、屠蘇の入った顔だった。
そうした混雑の中だから、二人の話に耳をかす者もいないが、
「し、しようがないンだ、背すじが、ひやひやするンだ」
「まだいってやがる、静かにしろ」

とん、と、ひじでわき腹をつかれて、
「いてて！」
「しっ」
うでの左京は、元次郎の頭をおさえつけた。
去年の初雪の夜以来、人目を恐れている二人だった。
幸いと冬だし、雪つづき、うでの左京は往来には頭巾をかぶったし、編み笠という手もあった。かぶりものは禁止されていたが、階級制度のきびしかった時代で、武士というと、すべての点で寛大だった。
殺した、と思っていた薬研堀の与七が、あの翌朝、中洲の葦につかまって、虫の息でいるところを漁師に救われた、ということが、悪党なかまから伝わると、
「ちょっ、こいつアうかうかしておれねえ」
現今の言葉でいうと、元次郎は地下にもぐった。
目撃者？　であるおひろを左京が、手ごめにする。丁稚の留松は、おひろのいうことなら聞くから、この二人のロどめをする、という考えで、夜半、三河屋の離れを襲った左京が、
「おいらにゃ出来なかった」
と、帰ってくると、
「じょ、冗談じゃねえや、兄貴」
あいつらの口から漏れたら、どうするンだえ、と、恐怖心をまぎらすための焼酎で、血走った目をぎらつかせた。

飲めば飲むほど、青くなる元次郎の、うすあばたをじろりと見て、
「しかたがねえ、あきらめろ」
と、それが、弁解の言葉だった。
それ以上いえば、うるみ朱鞘から白刃がとびだしそうで黙りこんだ元次郎だった。
焼酎を一晩中あおって、ぐでんぐでんになって酔いつぶれたまま仮睡し、さめたのは、元次郎より二つ年長の狭山万五郎というばくちなかまが、
「与七が息を吹きけえしたとよ」
と、知らせに来たからである。
「ど、どうして、おれのことを」
「駕丁だ」
と、万五郎はいい、転がった徳利をさかさにして、滴を手のひらでうけ、
「しけてやがる」
ぺろりとなめた。
「が、駕丁が……」
「心配するな、やつらア、岡っ引きに漏らしゃしねえ。が、与七が生き返ったとなりゃ、おめえ、ずらからにゃなるめえぜ」
「そ、そうだ、だが……」
火の気のない、荒れ屋敷。三味線堀の吉田なにがしという、やはり、あばれ旗本の屋敷であった。ここには、ならず者たちが、集まってばくちをしたり、だましすかしてきた女をなぐさむ、

というふうに、勝手気ままに出入りしていた。
「元の字、今日あたり、おいらの屋敷にも、なンとかいってきているだろう。おめえは隠れていな」
「兄貴、うまくやっておくンねえ」
雪のあさで寒いせいもあるが、真っ青になっている元次郎を、あわれむように左京は見て、
「ことわっておくが」
「……」
「おいらアうそが下手だ」
「兄貴、おめえ……」
「ばか！」
かたっと鍔鳴りがした。元次郎は、座ったまま一間も飛びさがった。
「ははは、その逃げ腰がありゃ大丈夫だろう」
左京は、朝の冷気のなかで、かわいた声で笑い、
「おれが、おめえを売るもンか。見損なうなよ」
「そんなら、兄貴」
「びくびくするな。売りゃしねえが、うそをつくのは生得下手だ、となると、万一のときアいさぎよくしろ、てンだ」
「す、するよ、おいらも、男だ」
「てえした男だな」

万五郎は、びっと無精ひげをつまんでにたりとした。
「面つきがなってねえぜ、一夜で、あばたが増えたようだ」
「わやくは、置いてくンな、万さん」
「悪かったけえ」
左京は、そんな万五郎のひざまえに、印籠をはずしてぽんと投げた。
「こいつで酒を買ってきな」
「え?」
万五郎、目を丸くして、
「みんなけえ?」

4

「ばか野郎、一升で沢山だ」
左京は、しいて印籠から目をそらしながら、
「残りゃ、小銭にして、持ってこい」
「まげるのけえ?」
「どっちでもいい。なるべく多くな」
「質屋か、故買屋か」
「早くしな」
うるさげに、左京はあごをしゃくった。万五郎が出てゆくと、

「のう、元の字。おいらア調べられたら、知らぬとはいえねえ。ほかのことならイザ知らず、与七の野郎に跡をつけられていたもンだから、間が悪かった。が、だ、おめえのからだになわをかけるようにゃしねえぜ」
「ありがてえ、兄貴」
「糊扶持米にゃ未練はねえ。三河以来の家にも未練はねえ、イザのときア、切りまくってやる。おめえと一緒なら、地獄に遊びにいっても退屈するこたアねえだろう」
「兄貴……」
元次郎、目が赤い。
「泣くな、ばか。うぬのような唐変木を弟分に持ったのが因果と、あきらめてやらア」
以来、暮れのうちいっぱい、元次郎は日の目を見ずに暮らした。
情報によると、幸い、与七の傷は一月も二十日すぎにならないと、快復しないという。
たかが岡っ引きを切ったぐらいで、町奉行所が、いきりたつはずはない。もともと、岡っ引きなどというものは、正規の役人ではない。
多くは小悪党が、同心にとりいって、手先を働いて小遣いにありつく。むろん、十手捕りなわをあずかると、権力の末梢機関ではあるから、町なかではハバがきく、というヨロクはあるが。
だから、係同心も、一応は森野元次郎を捜査するよう他の岡っ引きに指令した。ただの町人が切られた、という事件に毛が生えた程度の手配のしかたで、それ以上には出ない。
ましてや、霜月極月というと犯罪月だから、ほかにも目を働かせねばならぬことが少なくない。
「与七が歩けるようになりゃア、隠れるのも難しかろう」

「あの野郎はダニだからな、しちねっこいたらねえ。まンず、江戸にいるのはあぶねえぜ」
と、万五郎もいった。
「江戸から外へア出たくねえンだが……」
江戸っ子の常で、箱根のかなたには化け物が出ると思っている。
「上方へでも息ぬきにいってこい」
「関所がぬけられねえ」
「間道ってものがあらア。それに、金せえなンとかすりゃ、道中手形なンかは手に入る」
江戸の名残に、歌舞伎を見てゆくか。そうしよう……
冬眠からさめたあおがえるのような顔で、初春の声を聞くとのこのこ市村座に出てきた元次郎だった。
「元の字」
「へえ……」
「きょろきょろしねえで、舞台を見な」
こんなに背すじが寒いンなら、芝居なンかに来るンじゃなかった。早いとこ、箱根のむこうにいっちまえばよかったと、後悔のほぞをかむ思いだった。
白木屋からおくられた緞帳が、座主の前口上のあと、期待のざわめきと拍子木のうちに、開けられてゆくころ、松島町の家では、お浜がおろおろしていた。
「――そんなことをいっても、もう、幕が開くというのに……」
「幕が開こうが、閉まろうが、丸惣にかかわりはありませんわい」

「そりゃアむちゃというものだわ」
お浜は、ひざづめでくる五十男に、哀願するように涙をたたえた目をむけた。
損料屋（貸し衣装屋）の惣兵衛、といえば、界隈で知らぬ者はない因業おやじだから、近ごろでは芝居者ものれんをくぐらない。
その上、音羽屋火事で、かなりの痛手をこうむっているから、けちンぼに疝がかかっている。
「貸さないなら貸さないと、はなっからいってくれりゃ、よそで借ります。それを、年があけたそうそう、大事な初春狂言の幕あきという時間になって急に、そんなことをいわれたって」
「へっへっ。わっちは損料屋じゃ、品物はわっちのもの、もし借りたきゃ、損料をここへ並べてくだされや」
「さ、それが、千秋楽まで待ってもらえさえすれば……」
丸惣が、音羽屋に恨みを持っている連中におどかされるか、あおられるかしたに違いない。
と、お浜は、最初思ったが、次第におやじの目の色が、変わってきた。
「なア、お浜さんとやら」
「え？」
「困るときはお互いと、おまえさまがいうのなら、相談に乗らんこともない」
「これで前の人気をとりかえしたら、いくらにもお礼を……」
「うんにゃ、わっちは、先の千両より、いまの一両じゃ。なア、お浜さん、わっちもこの年まで女房持たずにかせぐ一方じゃったが」
「……」

何をいいだすことかと、あやしむように、お浜は、丸惣を見つめた。

5

「古いせりふだがね」
と、丸惣はいった。
「魚心あれば水心というやつじゃ、え？」
お浜の心を打診するように、手を握った。光る目が、女のひとみをのぞきこんだ。
「何をするのさ」
「何もするものかな、男と女ですわい。へっへっへ」
「けがらわしい」
ふりはなして、お浜は立ち上がる。
「これさ、そんなにしていいのかいの？」
「……」
「音羽屋が、これっきりになっても、いいというのかえ」
「……」
「な、固いこといわんでもええじゃろ。おまえさんも、もとは柳橋で酌取りした女……歌ったり踊ったりの芸は、いわば、おもてわざ、うらわざの方でも、まんざらじゃあるめいに。男心をじらさずとも……」
「けがらわしい」

涙をのむ思いで、お浜は隣の部屋に駆け込んだ。
「帰ってちょうだい」
「……ようし」
丸惣は、本気で怒ったようだ。年がいもないおもいだけに、かえってはげしい。
心底ほれた胸を、ズタズタにされた気持ちで、
「くそったれ、音羽屋にはどうでも舞台にゃ、のぼらせねえでや」
煙管をたたきつけるようにしまうと、丸惣は、悪態ついて出ていった。
悪態が、口先だけではないことは、疑う余地はない。
——どうしよう、うちのひとが……
せっかくの返り咲きの舞台。その晴れの姿を、赤裸にむかれて、どうして花が咲かせよう。
——肌を汚されても、丸惣をひきとめておくのが、貞女だったかしら……
思いは乱れた。
——うでのだんなら……
男らしい左京が思いだされる。彼なら簡単に話をつけてくれるだろう。
だが、淡泊な彼は、あれ以来、ちっとも現れないのだ。
それに——
——もう遅い。
たとえ、本所の屋敷にいて、頼めば駆けつけてくれるにしても、もう菊五郎が、衣装をはがれる、という不名誉な成り行きはとりかえしがつかない。

——ああ、どうしよう！

じっとしておれなかった。

立ったり座ったりしていたが、とうとう表に出た。戸締まりもせず葺屋町に向かって、小走りに駆けだした。

——許して、あんた……

淡雪はやみ、残りの根雪がうす汚れているだけで、明るい正月の町だった。

路地からは、羽根つきの音や、大神楽の音、はしゃぐ声が聞こえていたし、空には、紙凧が泳いでいる。

どんな貧しい家の子でも、盆と正月には下駄一足、晴れ着一着は身につける。娘たちの頭は、かんざしがきらきら光っているし、長いたもとをゆすって、鈴のついたぼっくりの音を、凍てた往来に響かせている。

まだ商いになるのか、獅子舞が、子供たちを追っ払いながら歩いていた。

勤勉な商人は、初荷の小旗をたてた大八車を引いてゆく。何を考えているかわからぬ馬や牛までが、明るくうれしげに見えるのが江戸の初春である。

——許して、あたし、あたしとても、あんなやつに肌を……

その明るい街を、お浜は急いだ。

「お浜ねえさんえ」

駕丁だ。

「ああ」

「おめでとうございす。市村座ですかい」

渡りに船だった。

「ああ、おねがいね」

「へえ、合点でさ、初春から、お浜ねえさんを乗せて芝居町とは縁起がいいや。後棒、いそぎだ」

「おうさ、合点」

——市村座では、〈八幡曙舞鶴曾我〉が、始まったところであった。作者は津打九平次。

「——おい、どこへゆくンだ」

「音羽屋へ用事じゃわい」

うらの楽屋から入りこんだ丸惣が、裏方や下回りを突き飛ばして、

「じゃまするぞ、公事で手錠にしてくれる」

血相が変わっている。

訴訟事、というと、役者は弱い。

それに、

「さっきから、町役人が、うろちょろしていますぜ」

と、いまも、楽屋でだれかささやいていた。

「縁起でもねえ、塩ぶっかけてやるがいい」

「なめくじじゃねえからな」

「げじげじに塩は、役にたちませぬえ」

色子がそういったので、みんなは笑い出し、忘れてしまったことだが。

朝比奈の衣装をつけると、一段と男前が上がった菊五郎が出を待っているところへ、
「音羽屋は、ここかい」
ぬっと、丸惣の、へんくつ面がのぞいた。
「や、いたいた」

血ふぶく花道

1

「あ、これは丸惣さん」
愛想の笑顔になるのを、
「太夫、ちょいと事情が変わってきたでの」
臆面もなく、丸惣は、のれんをわけて入ってくると、素袍に手をかけて、
「悪いが、ちょっと脱いでもらおうか」
「え」
寝耳に水だ。
「な、なにをいわっしゃることやら」
「笑いごとではない。丸惣は正気じゃ。さ、その衣装そっくり脱いでくだされや」
「……いったい、これは、なんとして」

「何もくそもないわい、さっさと脱ぎゃいいンじゃ」
出を待っていた役者や、髪結いや、男衆、裏方など、
「なにがおこったンじゃ」
「丸惣ちゅうと損料屋ではないか」
「へんくつかぼちゃが、正月から何かたわごとぬかしに来たえ?」
がやがやと集まって、
「やい、太夫のからだに手をかけると、わしが許さんぞ」
弟子の尾上春五郎が、うしろから小突いた。
「何をさっしゃる」
「うぬこそ何をしさらす」
「わしの、衣装を持って帰るだけじゃ。わしのものを、わしがとりにきたのが、何が悪い。おかみのお許しを得て、商いしている丸惣じゃ」
「……」
「それとも、こなたたちは、丸惣の衣装を渡さぬ気か。それならそれで、訴えてやる。狂言どころかえ、みんな手が後ろに回るじゃろて」
そこまでいわれると、役者には手がだせない。
丸惣は、にやりとくちびるをゆがめて、
「さアさ、脱がっしゃい」
ぼうぜんとしている菊五郎から、どんどん、烏帽子素袍を脱がしてしまい、

「これだけもらえば、用はないわい」
憎々しく笑って、
「音羽屋、おまえさまのレコは、見上げた貞女だと、このおやじがあきれていたと、お伝えくだされや」
「うぬ、こいつが、さっさと去んでしまえ」
春五郎が、舞台刀をぬくと、丸惣は肩をそびやかして、
「へっへっだ、竹光でどうなさるおつもりじゃい」
「……」
「おまえさまの垢でもかくがよいわい。はい、こなたさまがた、帰り道をあけてもらいましょうかい」
そのうしろ姿に、牡丹刷毛をたたきつけようとする弟子を、
「およしなさい、わたしが悪いのだから」
とめる菊五郎の声は、曇っていた。
「どうなさいます、太夫」
「どうにもしようがない、これがせめて一日前なら、なンとかなるものを……」
「いっそ、交替で、だれかの」
「いや、有り難いが、これも運命でしょう、菊五郎に人徳がないゆえ、やむをえぬ仕儀……」
そうこうしているうちに、出が迫ってくる。
「ええい、こうなったらしかたがない、いまさら舞台へ出ぬわけにもゆかぬし、せめてお客さまがたに、あいさつだけでも、いたしましょう」
「それにしても、衣装が」
「それも」
何を思ったか、にこりと寂しい笑みを浮かべて立ち上がった。
「――音羽屋」
「音羽屋ア」
姿を現さない前から、
「千両！」
と、かけ声が聞こえる。少々はすっぱな、客商売の女らしい、きんきんする声で、どっと客が笑った。その笑いのなかに、
「火つけ屋ア」
と、タチの悪い半畳が入ったが、これは笑いの波を、その声の周囲に、新しい波紋でひろげただけであった。
――女の客は、まだまだ自分を見放してはいない……
通しものもあった。人気が落ちたとはいえ、女性ファンが、まだまだ少なからずある、ということは、菊五郎の心を強くしていた。
ほんとうの芸というものを考えるようになってから十年近くにはなるが、そのころの若手役者のほとんどがそうであったように、菊五郎も、享保十五年の顔見世狂言に、京都亀屋座に若衆方として初舞台を踏んで以来、天成の美しい容姿を武器として、売り出してきた。

客のまくらのちりを払う——それが、男であれ女であれ、客のえり好みをせずに、媚びてきた。女形の〝芸〟には、「表と裏があるさかい」とは、師匠尾上左門に教えられるまでもなく、役者の子だから、いつとはなしに知っている菊五郎である。

ひいきの客次第で、地位が上下するのは、封建的といわれる現在の比ではない。

客あしらいが悪いからと、相撲でいえば大関格の『無類』から、『上々半白吉』という十両格に引き下げられたためしも少なくはない。

「女客だ、女客さえつかんでいれば……」

それは、この年になって、本格的な芸で生きる菊五郎にしてなお、忘れ得ぬことであり、また真理であった。

男の客には、

「にやけ野郎め」

「おひらの長芋め」

と、さげすまれ、ののしられても、女性に人気がある役者は存続するが、女性が一顧だにしなくなれば、また男の客も遠ざかるものである。

「大丈夫だ、まだ……」

弟子や男衆の案じ顔に見守られて、菊五郎ひと笑み千両の顔を、にこりとほころばせて、

「やったろ」

といった。

「え?」

「やってこまするで」

身内にせりあがる情熱を意識した菊五郎は、知らずと、上方弁になっていた。

2

「あっ……」

新築の市村座をぎっしりと埋めた観客の、驚愕が、

——どんなもンや……

受ける！　ぴんと胸にきた。

丸惣に烏帽子をはぎとられた尾上菊五郎が、窮策だった。

衣装つづらのなかから、墨染めの衣に、錫杖をとりだして、

「アオ鬘や」

と、床山をせかせて、すっぽりかぶった坊主頭。

思いがけない趣向であった。驚きからさめると、わっと、場内が、津波のように揺れた。

「待ってました、菊五郎」

「千両！」

「音羽屋ア」

ヤボなまぜっかえしが、

「正月から坊主かア」

「坊主まるもうけ」

「焼けあとに幽霊だア」
「念仏となえろ、となえろ」
びくともしない菊五郎である。
錫杖をうちふり、うちふり、念仏ならぬ、ちょんがれを、節づけてうたいはじめた。
「奇妙頂らいどらが如来、
やれやれ聴きねえ
わたしが店なる油に火がいり、
火事よと結綿重ね扇で
あおぎつけたが、
うずまく煙は四つ目に立花……」
紋づくしだ、と、ささやく声がおこった。重ね扇は音羽屋の紋である。
自ら、火元たるわびを舞台でいおうとしているのだと、芸居見巧者には、ぴんときた。
「……火の粉の花びし、
散りし菊水、
水も車で井げたは有りたけ、
かけても雪笹
なけも鷹の羽使わずに吹きあげ、
風の矢車木瓜亀甲
しかたは梨の切り口三ツ鴨脚子、

丸い轡に鶴の丸焼け……」
水をうったように、客席はしんとしている。即興的な、ちょんがれ節だが、菊五郎の真意が、あらわであった。
半畳をいれるつもりできていた連中までも気魄にうたれて、舞台を見つめていた。
「……みじめを三ツ星、
うろこの洲浜を三ツ蔦、
藤にさがりし御縁もこれ桐、
運の月星蛇の目唐傘
一本持たずに
とうとう桔梗は和尚が梅鉢
どうしてこうも、
当たった紋だえ、ホオオホイ」
破れ寺の和尚が火を出して、唐傘一本持たせられて、寺を追い出される——そのしおれた姿を音羽屋菊五郎に模して、自ら諷した即興ちょんがれであった。
——江戸の舞台も、これが舞いおさめ、こうしておわびをして、旅に出ます。
そうした意味を含んだ歌詞は客にもわかる。
おもしろおかしい、巧みな所作で、菊五郎が花道へかかった。
「兄貴……」
そっと元次郎にそでをひかれて、うるさい、と、手にものをいわせて、振り払う。

楽天的なうでの左京は、元次郎の身の危険も忘れて、音羽屋に見とれている。
「兄貴……」
と、また元次郎。
耳に、口をふれんばかりにして、
「あにきったら」
声がふるえていた。
「ん？」
「きゃがった」
「なに？」
「町方の……犬だ」
その言葉がおわらぬうちに、
「そのまま、そのまま」
だみ声がした。
振り返ると、二人。人相と目つきの悪さは、だれが見ても岡っ引きと知れる男たち。
「あ……」
「静かにしておくンなせえまし」
「きさまら……」
「お静かに」
もとより二人とも、左京は知っている。うるさく左京を尾行していた岡っ引きだ。年かさのほ

うが土手の八五郎という。柳原土手の夜鷹狩りには、もっとも調法な男だ。
「芝居のさいちゅうですぜ」
「……」
「き、来な」
おくびょうを、やけに肩をそびやかして隠している鮫鰐の吉。こいつは斬られた与七の下回りをしていた小ぬすっとあがりだ。
脳のめぐりの悪いところも、ばかでかい口のあたり面つき、鮫鰐にそっくりである。
「くるンだ」
吉は、元次郎の腕をつかんだ。
「ふむ、正月初手柄か」
ぐっと左京ににらまれて、思わず手をはなしたすきに、
「元の字」
と、後ろにかばって、
「ここア芝居を楽しむ場所だ。うぬら不浄の犬ア出てうせろ」
「な、なんだって」
「やい、鮫鰐。どきな」
八五郎が、帯から十手を抜き出した。
「うでのだんな、いつまでお旗本で威張ってもいられますめい。弁天の元とは、一つ穴のむじなだアな。よくて甲州勤番、悪くすりゃ八丈ですぜ」

そのあたりばかりではない。客の大部分が気がついていた。二階からも、乗り出している。
花道に立ちすくんだようになっている菊五郎を振り仰いで左京は、
「よう、千両」
ずばりと、声をかけた。
鮫鰊や土手八なぞ、眼中にいれていない。
「音羽屋、わびアいまのちょんがれ一つで沢山だ。朝比奈をやってくンねえ」
「――高木どのだな」
「ん？」
同心が割り込んできた。
「すなおに、その者をお渡し願えぬか」
「きさま……」
はじめて、左京の目に、真剣な光が点じられた。
「きさま、なわをかけるというか」
「あばれるならば、だ」
「よし」
ふかくうなずいたので、土手八と鮫鰊がほっとすると、
「あばれてやる」
「なに！」
耳を疑った同心を、

「おとい来やアがれ」
ぱっとけたおすと同時に、
「元、逃げろ」

3

どうと、桝に足をとられて、同心が倒れた。
「捕らえろ」
したたかに腰骨をうちながら、同心は叫んだ。
浮き腰だっていた客が、わーっと総立ちになる。
女子供の悲鳴がおこり、どどっとなだれる。われ先にと、走り出す。
重箱を踏み砕く音、銚子の転がる音、どなる声、泣き声、金きり声。はちの巣を突っついたような騒ぎになった。
「幕だ、幕だ、幕……」
少し前から、役人が市村座を取り巻いていた。座元は、話を聞いて、そでの陰からのぞいていたのだが、あわてて飛び出してきた。
が、こうなると、もう、座元も、もぐり客もない。長崎ちゃんぽんをひっくり返したようなありさまだ。
その客のなかに、手先が入り込んでいたのである。
「野郎！」

群集の中から、元次郎に飛びついてきた。
「く、くそ！」
元次郎、夢中で七首を一閃した。
さっと、血潮が飛び散る。
「きゃーっ」
失神せんばかりの女の声のなかにも、左京はにやりとして、
「音羽屋、かんにんしてくンな」
花道で立ち往生の菊五郎に、二間ほど先からわびた。
どろの流れのような群集だ。
振り向いた菊五郎の顔は、真っ青になっている。
「兄貴」
はねっかえりの血に半面を染めた元次郎が、七首をさか手に振りかぶったまま、
「も、もうだめだよう」
「弱音を吐くな、しっかりしろ」
刀の柄に、抜こうとする鍔もとに、きりっとなわが絡んだ。倒れたままの同心が、竹内流捕縄術の仰ぎ投げだった。
「おう、味をやるぜ」
すぱっと小刀が切り放す。
「元、逃げろ！」

「あ、兄貴イ」
「逃げるンだア」
また、背中から飛びついてきたやつを、したたか桝のへりにたたきつけて、元次郎のそばに駆けよると、
「早くしろい、血をかぶってからじゃア、遅い」
「あ、兄貴、おいらア……」
「しっかりするンだ」
太刀を抜き放った。
どっと捕り方が、後ろにさがったすきに、
「舞台へ走るンだ、元の字」
「え？」
「気のきかねえガキだな」
と、耳たぶをかむようにして、
「女の衣装でもひっかついで、客の間に混じって姿をくらますンだ」
と、すばやくささやき、
「あとは引き受けたぜ」
「す、済まねえ」
「ばか野郎、ゆけ！」
突き飛ばすようにして、走らせた。

そして、左京自身は、両手に白刃をひらめかし、じりじりと舞台へさがってゆく。
「し、神妙にされい」
あの同心が、真っ青な顔でわめいた。
「家名を思わぬか、先祖の武功をほごにする所存か」
「あたりきよ」
左京は、声のない笑いを見せた。
「糊扶持を後生大事の、へつらいどもたア、ちっとばかりブラ下がっているものの出来が違うようだぜ」
「先祖を思えば、不埒な」
「うるせえの、二十四孝の説教か」
横合いからなわがとんできた。太刀が、鮮やかに切りはなした。
「糊扶持もらって、ウジウジしているよりゃ、町人のほうが気軽でいいわい」
「切腹だぞ、おぬし」
「よそう、腹を切りゃ痛かろう。痛いか痛くないか、まず、きさまが」
といいながら、左京は斬りかかる。と見せて、太刀で円を描くや、さっと舞台に走り、そでに駆け込んだ。
「逃がすな」
「追えッ」
同心が、花道にはい上がってきたが、ふりまかれた血で、つるっと滑った。

「おっと、あぶねえ」
「何を笑いやがる、さっさとゆけ」
「へえ、もう逃げましたんで」
「ばかッ、だから、きさまは鮫鰊だ。町すじ五、六町の間を木戸を立てさせろ」
「へえ」
土手八が、同心を抱えおこした。
「なアに、ぐるりは二重に網を張ってありまさ……おや、どこかけがを」
「おれのことにかまうな、ゆけ」
同心は大喝した。

4

客はまだ立ち騒いでいた。お尋ね者が逃げたのなら、
「幕が開くだろうぜ」
「開かにゃアの、せっかく葛西からでてきたかいがねえわの」
「開かなきゃ、明日だ」
「銭がたまンねえ」
「なアに、タダ札もらって帰りゃいいわえ」
そうかと思うと、
「あの、このあたりに、あたしの財布が」

「見かけねえの」
「あれがないと、あたくし」
「いくらへえっていたね」
「へびの皮に、成田山のお守り、へその緒に……」
「銭は？」
「はい、百文と少し」
「おきゃがれ」
未練たらしい居残り組と、タダ札をもらって帰る者と、どちらにしようか相談している者……かと思えば、明日のタダ札だけもらって、またずぶりこむ者。かぶりつきや花道わきの上席の落とし物に目を光らせるやつ——
幕を開けようにも血刀振りまわした元次郎と左京が飛び込んできたのだから、楽屋もめちゃめちゃだ。
「どこにいった？」
「うせたか、やつめ」
「木戸は大丈夫だ」
「というと」
「まだひそんでいよう、がらくたを、ひっくり返してみろ」
囃子町の三味線ひきなどがうろうろしているのを十手で突きのけて、床山から稲荷町、道具部屋などに、どかどかと入り込んだ。

「なンでえ、なンでえ、何しやがンだ」
道具方が、はりぼての岩を破られてむくれるのを、
「うるせいやい、すっこんでろ」
「……」
「おかみの御用にじゃまだてすりゃ、同罪だぜ」
土手八は、一言ごとに十手をひねくりまわす。
「こいつを伊達にみがいちゃいねえンだ。仏頂面しねえで、手伝うがいい」
ずうずうしい岡っ引きたちは、頭取座まで、
「ごめんと、部屋ア改めさせてもらうぜ」
ぬっと、やぼな顔を突っ込む。
「いたか？」
「いません」
「野郎、どこへ消えたか」
弁天の元次郎とうでの左京なら、岡っ引きや手先は、知らぬ者はない。
なのに、どこへ潜り込んだか、二人とも影もない。
「木戸は固めてあるな」
「へえ、ちゃんと」
「掛け小屋じゃねえンだ、壁蔀を破って、逃げ出すのたア訳が違う、いってえどこから……」
「雪隠のくみとりからじゃア」

「調べてみろ」
「調べさせやしょう」
言い出しっぺが、別の男を走らした。
「ぬかりはないか、調べ残しはないか」
額に青筋たてた同心が、重なる失態に、いらいらしながら、
「もう一度、全部調べ直せ」
「あ、衣装蔵がまだでござンすぜ」
「ばかッ、そこだ」
どどどっと、新しい床を踏み鳴らして、入ってくる足音に、
——ちっ、来やがった……
長持の中で、元次郎は、首をすくめた。
——兄貴……
日ごろ神仏など信じないやつだが、こうなると手を合わしたい。
——兄貴、神や仏はあンまりアテにならねえ、おいら、兄貴だけだ、兄貴だけアテにしているンだからな、た、頼まア……
うろうろしている元次郎を、長持のなかに押し込み、
「犬どもは、おれがおびき出す。それまで辛抱してろ」
そういって、駆け去ったうでの左京である。
足音が近づいた。

「きっとここにちげえねエ」
「用心しろ、手向かいしやがったら、半殺しにしてもかまわねえンだ」
「与七兄いのかたきだからな」
「町奉行所へ連れてゆく前に、耳をそいでやれ」
「そうだそうだ、それがいい」
——ち、畜生、何をぬかしやがる……
元次郎は、匕首を握ったまま、長持のなかで歯がみした。
——開けやがったら、下から一突きに……
近づく足音に耳を傾けながら、
——こんな羽目になるンだったら、江戸芝居に未練を持たねえで……
旅に出ちまえば、よかったとは、やはり愚痴だ。
「——やい、そこのつづら長持の蓋をみんなあけるンだ」
土手八らしい男のだみ声がした。
長持の蓋に、だれかの手がかかった。
——うぬ！
ぴんと、元次郎の神経が、その一点に集中した。
そのとたん、
「お待ちなさいまし」
——あ、音羽屋！

菊五郎の声であった。

5

「なんだ、太夫」
「おかみの御用に、こんなことを申し上げるのは、差し出がましゅうございますが……」
「そうだとも、十手の前にゃ河原こじきはすっこんでいるがいい」
「ごもっともでございます。が、河原こじきも人間でございます」
「なンだと」
「たしかに御支配すじから申せば人外人。それに相違はございませんが、口もきけば、考えもする」
「てめえ」
と、土手八は、かみつくような形相になって、
「おいらに盾つく気か、十手が目に入らねえのか」
菊五郎は、微笑した。閻魔顔をとろかすような笑いである。
「盾つくなどとは、とんでもない。おかみのご道具が見えないでどうしましょう」
「なら、手をひけ」
「ただし、十手のような大きなものを、目に入れるのは、ちと難儀でございます」
「うぬは」
「尾上菊五郎は、腐っても歌舞伎役者、品玉つかいや、唐人の幻術つかいではございませぬゆえ」

「や、やい、口は器用に滑るが、伝馬町のご牢にほうりこまれたら、舞台の上のようには滑るめえぜ。そこンところを胸にたたンで、口をきくがいい」
そこで、土手八は、にやりとした。
「うぬが火を出したくせに、初春狂言に出れるのも、お目こぼしがあったからこそだ、あンまり調子づくと、火つけの科で、さかさはりつけ、火あぶりであったためてやることだって出来るンだぜ」
「火つけとは滅相もない。ただ、わたくしめは……」
急に、菊五郎の声はしめって、
「これだけ捜して、各人がいないとわかれば、お引きとりいただかねば、てまえはどうであれ、お客様方が迷惑いたしましょう」
「ふん、うぬは……木戸を閉めてもらいてえのか。おいらの胸三寸、お係へ申しあげて、それから与力のだんなが、うんといいせえすりゃ、せっかく建てた市村座のやぐらをおろすことも、さして難しくはあるめえぜ」
「……」
菊五郎は、返す言葉を失って、うなだれた。
「ははは、おかみに盾つくこたアやめたがいい。御用聞きのおいらに盾つくのは、ま、いってみれば、お上をないがしろにするのと同じだ」
土手八は、ばか笑いをした。
「さ、太夫、あんまり、口を酸っぱくさせるンじゃねえ、おまはんみていに、そこらじゅうの女

のくちびるを吸ってりゃ、酸っぱくもなるめいがの。さ、どいたどいた」

菊五郎を突き飛ばそうとした。

何やら、騒ぎたてる声が聞こえ、みんなが耳をかたむけたとき、

「出たア」

と、手先が、血相変えて駆けこんできた。

「出たア」

「な、なにが出たンだ」

「ゆ、ゆうれい、じゃアねえ、う、うでの」

「なに、左京が」

どこだ、と、土手八は、菊五郎のことを忘れて、手先の肩をわしづかみにする。

「やった、二人やられたってよ」

「うでの左京けえ」

「やられたのは町方か」

「いい気味だ」

そんな陰口にも、土手八は目をむける余裕をなくしていた。手先をせきたてて、市村座から飛び出した。

くちびるを吸う

1

その少し前である。

「あ、お前さん！」

と、お浜が、駕籠からおりて、楽屋に駆け込んできた。

「いま、丸惣が、衣装をとりに……」

「お浜かえ、とっくに丸惣にはぎとられたよ」

衣装の話どころではなかった。

髷をみだした左京が、両刀をぎらつかせながら、逃げこんできたのだ。

「太夫、迷惑をかけちまったな」

この場になっても、そういう左京は、豪放に笑みをたたえていた。

「なにをおっしゃいます、あなたさまこそ、とんでもないことに……そうだ」

と、菊五郎は、手をうって、

「お浜、おまえ、丁度いいところにきた。こなたさまを、お連れして、逃げておくれ」

「え？　あたしが」

「そうだとも、おまえやないと、できへん」

「……」
「早くするんや。さ、その着物を羽織りなさいませ」
重ね扇の紋を散らした、楽屋丹前。
それを、ふわりと背にかけられると、
「そうか、こんどはおいらが音羽屋に扮装して逃げるってエ寸法か、こいつァおもしれえ」
元次郎が、長持のなかで、息をひそめている。
捕り方たちを、外へおびきだすために、オトリとなって飛び出すつもりだったが、
——あのまま、かくれおおせるかもしれねえ——
そう思って、
「太夫、じゃア、ご新造の世話になるぜ」
「せめてものご恩報じでございます」
「うれしがらせるねえ、ついでにもう一つ」
「え？」
「衣装蔵の長持にゃ、元の字がかくれている。頼むぜ」
はい、と深くうなずくのに目礼しただけで、左京は、楽屋から出た。
もう、舞台裏の大道具や、小道具をけとばしたりぶンなげたりする音が近づいてきていた。
重ね扇の丹前を着て、頭は手ぬぐいで髪したに包み、大小を隠し抱きにして、
「頼むぜ、ご新造さん」
「あい」

お浜は、くちびるまで色を失っていたが、こっくりとうなずいた。
この騒ぎに、まだ駕籠はおきっぱなしで、駕丁が楽屋をのぞいていた。
「駕丁さん、うちのひとが帰るから」
「へい」
「太夫、とんでもねいこってすね」
「まったくだ」
すっと腰から先に、駕籠の人となった左京。
——なンだか、千両役者になったような気がするぜ……
ゆうぜんたるものだから、駕丁まで菊五郎と信じている。
「えっほい、えっほい、音羽屋のお通りだ」
先棒が、威勢よく息杖をふって、先払いする。
楽屋口のまわりにも、捕り方たちはいた。
が、お浜が、いま入ったのは見ているし、江戸っ子の成り損ないでないかぎり、だれもが知っている重ね扇の紋どころの楽屋丹前に、酷似の顔。
菊五郎が、難をさけて帰宅の姿と見え、表をのぞき込む者もいなかった。
お浜は、まだ青い顔だったが、
「駕丁さん、急ぎでやっておくれ」
「へいへい」
「先棒、韋駄天だ」

「承知ノ助」
小路を出はずれたところにも、たすきはち巻き、足ごしらえの厳重な連中が、網を張っていた。
「待て！」
と、六尺棒を突ンだして、
「どこへゆく！」
「家へ帰ります」
歯の根が、わななくのを、ひきしめながらお浜は、
「こんな騒ぎじゃ、お芝居もできませんからね」
ちょいと、怒ってみせるところは、やはり役者のおもいもの。
「なンだ、音羽屋か」
垂れを、ひょいと上げた手先は、早合点して、
「お通ンなさい」
と、物腰まで変わっていた。
ほっと胸をなでおろして、
「急いでおくれな」
「へい！」
芝屋町は、すさまじいまでの混雑を呈していた。市村座から流れ出した人々ばかりでなく、
「スリだ」
「けんかだ」

「いンや、人殺しだとよ」
「そうじゃねえ、桟敷でお産したそうだぜ」
「だれが」
「人間だアな、きまってら、象が芝居見物にくるけえ」
「象のお産じゃ、ヤブ医者もゾウにもなるめえ……」
「だじゃれてるときけえ、コンちくしょう！」
騒ぎは、中村座、河原崎座まで波及した。
江戸っ子は、火事やけんかに敏感なのだ。
騒ぎたつと、手がつけられない。木戸番を小突いて半札をひきちぎるようにふんだくっては、芝居小屋を飛び出す。
野次馬が加わり、町火消したちが鳶口かついで、飛んでくる。

2

「早く、駕丁さん！」
「へいへい、これでも急いでいるつもりでござンすが、こう人波じゃア」
息杖を振りまわすそばから、押された群衆が流れてくるのだ。
「危ねえ危ねえ」
「この人混みで、杖を振りまわすやつがあるけえ」
棒を振りまわすのは、駕丁ばかりではない。

岡っ引きや、手先たちが、
「どいたどいた」
「市村座へ近よるやつア、ドデッ腹をブチ抜くぞ」
「押すな、ばか野郎！」
町奉行所の権威をカサにきた連中の横暴は、現今の民主警察の比ではない。
このどろの流れから、やっと脱け出て、
「さア、もう大丈夫でさ、後棒、突っ走ろうぜ」
「合点だ」
と、いったばかりに、
「その駕籠待ちな」
町かどの芝居茶屋のかげから、ずいと十手が出た。
ここにも、目は光っていたのだ。
不意だったし、一安心したときだったので、
「あっ！」
と、顔色を変え、棒立ちになった。
その動転を、へびのような目が見逃すはずがない。
「どうなさンした？」
と、意地悪くいったのは、鮫鰐の吉。
「音羽屋の……駕籠ン中は、音羽屋さんですかい」

「ええ……そう、そのはずなンだけど」
まずい。
そのはずはないだろう。と、左京は、思わずくすくすっと笑った。
垂れが上がった。
のぞきこんだ目を、左京は不敵にもにやりとしたまま見上げている。
そしらぬ顔でいたほうが、鮫鰐の吉も看過したかもしれない。
その大胆なつらだましいが、千両役者にもないものだった。
炯々たる眼光は、鮫鰐の吉をぎくりとさせたのである。
「あっ、おめえは？」
それでも、まだ半信半疑だったが、
「鮫鰐！」
と、左京が、自分から名乗ったようなものだった。
「そのつらに二つついているなア、フシ穴けえ？」
「な、なんだと！」
「女房のおっぱいを見違えるようじゃア、亭主のねうちがねえってことよ」
「う、うぬは？」
「見たか、まだ分からねえか、そンなフシ穴同然の目玉なら鮫鰐鍋にブッ込んで食っちまうぜ」
「う、うでの……」
「左京だ」

名乗るや、左京の頭が、ぬっと外へ出た。
あまりに無鉄砲な左京に、むしろ、怒りを覚えて立ちすくんでいたお浜の目に、鮫鰐の吉の十手が岩をも砕くばかり、殴りつけるのが見え、ぱっと目を覆ってしまった。
が、おそるおそる開いたときは、
「鮫鰐！」
かっと、その面上に痰を吐く左京のすこやかな姿があった。
「悪い相手にけんかを売ったぜ」
きき腕とって、ぐいとねじ上げるや、
「いてて……」
悲鳴をあげるのを、
「おとどい来い」
ぱっと弱腰をけとばす。
たったったっと、二、三間走って、芝居茶屋の天水桶へ、どしんとぶつかった。ひっくり返った小桶がばらばらっと、その上へ落ちた。
「御用だッ」
けなげに残った一人が、六尺棒をふるってくるのを、ひょいと身をかわしざま、
「うるせえ！」
紫電一閃。
あざやかな峰打ちだった。鮫鰐の吉に折り重なるようにして、がぶっと雪をかんで突んのめる。

「来い」
鍔鳴りも高く、白刃をおさめるや、お浜の手をぐいとつかんだ左京。
腰をぬかした鴉丁ばかりでなく、十人、二十人いた目撃者にも、お浜は被害者に見えた。
強引な左京のやりかたは、一歩を誤ると、菊五郎、お浜に迷惑を及ぼすことになるところだったのである。
「わっ、お手先がやられたッ」
「なに？　お手先が」
「菊五郎そっくりのお武家だよ」
「あれ、女をひっさらってゆく」
「追え追え！」
「べらぼうめ、目明かしの二の舞だわな」
——その騒ぎが、楽屋に伝わってきたのだ。
元次郎は、すんでのところで、土手八の御用なわにかかる寸前に、虎口を免れたわけである。

3

小路から小路をぬけ、稲荷の社を突っ切って、二人は河岸っぷちへ出た。
親父橋のたもとである。
芝居町へ客を乗せてきた船宿の屋根船がもやってあった。
この騒ぎに若い船頭が、雁木をあがってこようとすると、入れ違いに、お浜が下りてきて、

「おねがい」
と、手を合わせたから、
「な、なンでえ、道ばたのお地蔵さまじゃあるめえし、いきなり拝まれたって、おめえ……」
と、顔を見て、
「お浜ねえさんじゃござんせんか」
柳橋の船宿『中川』の船頭だった。
「いったい、どうしなすったンで」
「なンにもいわずに、乗せてほしいお方があるの」
「へえ、そいつア……」
客を送り込んできた船だが、いつも音羽屋には、祝儀をもらっていたし、お浜の思いつめた様子が、江戸っ子の心をゆすぶった。
「よがす、お乗りなさいやし」
そのとき橋の上を、どどっと足音荒く捕り方多数が走っていった。
芝居町の騒動に、助っ人に呼ばれたのであろう。その一団が、曇天の街に、ほこりをけたてて走り去ったあと、手ぬぐい頭巾で、左京がすっと河岸にくると、屋根船におりてきた。
「頼むぜ」
「おっ、うでのだんなですかい」
お浜に頼まれるまでもない、と、若い船頭は、とも綱をほどいて、
「出ますぜ」

とんと、竿が岸をつく。
すっと屋根船は、掘割に浮かんで、すべるように——
「——やっと、人心地がしたぜ」
おおぎょうに、胸をなでおろす左京だ。
お浜は、まだ、動悸がはげしい。
「礼をいわしてもらう、ご新造さん」
「あれ、礼なんて。うちのひとが助けていただいた万分の一のご恩返しじゃありませんか」
「とんでもねえ、油火事ンときなンザ、おいらが出る幕じゃなかったのさ」
どういう客かしらないが、屋根船のなかには、おあつらえ向きに、友禅の派手な座布団が五人前あり、まん中に手あぶり。
一升徳利が二本に、お銚子、杯、酒肴の膳部も黒塗りの猫脚で、蒔絵の立派なもの。ただ残肴は、どうも興ざめだ。
お浜は、柳橋から出たにしては、世話女房が性にあっているのか、きたながりもせず、膳部を片すみにきちんと寄せたり、酒のこぼれをふいたりしている。
「ご新造さんえ」
「え？」
「わざわざ、片づけることアねえやな」
「でも、せっかくですから」
にこりとしたのは、やっと動悸がおさまったからか。

「あたし、好きなンですよ」

——女房にするなら、こんな女か……音羽屋め、いいのに目つけたもンだぜ……

お浜は、時々、障子を細めにあけて、河岸を見た。

河岸には、小正月を浮かれた人が歩いている。凧も見えたし、羽根つきの音も聞こえた。正月という空気には、女の嬌声がなくてはならぬものである。下町の女たちの、明るい笑い声が、げらげら聞こえているなかに、時折すそをはしょった捕り手や同心が、編み笠着流しの武士を小腰をかがめながらも、呼びとめているのも見えた。

ぴしゃっと、急いで障子をたて、

——あっ、しずかに閉めなきゃ……。こっちに気づかなかったかしら——

と、まだ、おどろに騒ぐお浜の胸の中だった。

左京は、しかし、ゆうゆうと寝そべって、そんなお浜の姿態を、飽かずながめている。

ぶしつけなのは、この男の持ち前としても、お浜は、なぜか違った意味で、胸がどきどきしてきて、視線をそらしてしまう。

「——左京さま」

「声がふるえているぜ」

「あの……さっき、お斬りなすったのは……」

「斬った？　おいらがかえ」

左京は、愉快そうに笑った。

「斬るもンかな。大根切るなア峰打ちでいいのさ。たかが岡っ引きなンか、愛刀のさびにするまでもねえことでの」

——ああよかった……

あんな場合にも、峰打ちにするだけの余裕があるものかしら。

うでの左京の評判は、両極端だった。

よくいう人が半分に、悪くいうのが半分。

横道で、けんか好きで、すぐ刃傷沙汰に及ぶし、足を踏んだにらんだ、と難くせつけて、金をゆする——

その一方、

淡泊で、ばくちの時金は私したことがない、人の難儀は見過ごさないし、弱い者、貧乏な者には味方になる、女にもサラリとして、あと味がいい等々——

それは一見矛盾しているようでいて、こうした男の両面であり、どちらも左京の真実だった。

——どうしたのかしら、あたし……

お浜は、波の音を聞いていながら、四肢がむずがゆく、胸のあたりがもやもやしてきて、息苦しいものを感じてきた。

——どうしたのかしら……

いつか、お浜は、あえいでいた。

「炭のせいね」

と、独りごちるようにいった。

「障子を少しあけなきゃア」

と、手をかけたとき、どこやらで怒鳴り声が聞こえた。
「おう、船をとめろ！　とめるんだ、この野郎！」

4

横柄な口調だけで、
「お改めだ、こっちへ寄せな」
と、次の言葉は聞かずとも分かった。
「へえ、中川の船でさア……」
船頭の迷惑げな声が聞こえる。
——来やがった……
左京は、例の苦笑を片ほおに浮かべ、太刀を握って身を起こそうとした。
——いけない！
考えをめぐらすひまもない。こうすれば、あとがどうなるか、そんなことも考えるひまもない。ほとんど本能的、といってよいほど、すばやく、お浜は、するするっと、帯を解いた。そして、がばと左京に抱きつき、
「顔を……」
隠して、と、ささやいた。
火のような息吹だった。
あの、おとなしい女が、こうした大胆な演技を見せようとは、思いがけなかった。

左京は、女に抱きつかれて、その背を抱いた。
はげしい動きに、すそがめくれ、なまめかしい紅絹うらが刺激的だった。
お浜は、つと、くちびるを寄せた。
「——お改めだ」
「あ、だんな、ちょちょっと……その」
と、船頭がとめるのもきかず、
「じゃまをするのか、てめえ！」
と、脅かす声とともに、障子に手がかかった。
お浜のくちびるが、左京のくちびるにかぶさった。
手に、おのずと、その感情がこもり、けだしのまつわる白い脚に毛脛の脚が、絡んだ。
——音羽屋、なりゆきだ、ごちそうになるぜ……
左京は、やわらかいくちびるの感触を味わった。が、歯のとびらは、開こうとしなかった。ふるえている女のからだが、あたかも情痴にぬれ、おののいているかのようだった。左京は、われにもなくいとしさを感じた。放蕩者の身が、この演出に興奮するなどとは、自嘲しながら、男の胸もたかぶってきているのである。
「ごめんねえ」
障子が開いた。
「あ、いけねえ！」
さすがに厚顔な御用役人も、ぎょっとなった。

せまい屋根船のうちには、炭火の温気がこもっている。
白粉のにおい、髪のにおい、男女の体臭が入り混じって、適度に温められた、一種、異様なまでになまめいた、あやしい空気だった。
それが、ふわりと、無遠慮な顔をなでたのだ。
「ごめんねえな」
ぴしゃりと、やけっぱちに障子をたてて、
「おかみの御用だ、見られたのア、真っ昼間からするからだ」
聞こえよがしにいう語尾が、よたよたするのは、きっと、くちびるの端が、だらしなくよだれでぬれていたに違いない。
——見つかれば同罪になる！
その畏怖で、お浜は、くちづけによる官能の感覚さえ、おし殺していた。
女のせわしない断続的な呼吸は、一息ごとに火を帯びてきて、男の欲情に火をつける。左京は、とっくに、捕り方のことなど忘れていた。
その日をかぎりに、生命を燃焼することができる左京なのだ。
死を恐れぬところからくるのか、爛熟した太平の世の文化の潮流のなかで、酒色に身をもち崩して、浮き草のような御家人うでの、左京が、いのちの火を吹きあげるのは、この女の肌しかなかった。
くちびるをむさぼるだけでは足らず、きっちりしまった歯を開かせようと、男の舌は、あさましく働いた。

熱をもった口の中は、からからにかわいて、お浜は、
「あっああ……」
せつなげに、うめいた。
「——もう大丈夫ですぜ」
障子の外から聞こえた船頭の声に、はっとお浜は、われにかえった。
——いけない、こんなことをして……
顔をはなそうとすると、ぐっと男の手が頭をつかんだ。
女の本能。
——髪が……
正月だから、念入りに結いあげさせた勝山髷が、ふと気になった。
「だめ……だめよ」
やっと、顔をくちびるだけはなして、必死にささやくお浜の声が、押し殺しているだけに、かえって男心を、わかせるのだ。
「好きになったようだ、お浜さん……」
「いけません。そンな……」
ひざうらの上から、むきだしになった脚が気になった。
——帯まで解いて、いったい、あたしア……
とっさの心の動きだったとはいえ、どんな気持ちだったのかしら……
あの瞬間、悪魔に魅入られたのか。

うでの左京が、菊五郎に生き写しだったためとは、詭弁になる。
「お浜さん！」
「いけませんったら！」
もがいて、左京のたくましい肩につめをたてたお浜は貞女だった。
ひるむ腕から身をすりぬけて、起き上がるやすそをなおし、えりをかきあわせて、帯をつかんだ。
「――船頭さん」
思いがけず、いやな、しゃがれ声がでてしまった。
「松島町へつけてくださいな……」
「――祝儀ははずむぜ」
左京はしかたなく声を合わせて、いった。
「正月から命びろい、今年ア春から縁起がいいわい」
あきらめて、起き上がりながらいう男の顔を、帯をしめながらお浜は盗み見た。
ほおにふれたほお……もみあげから、あごにかけての、青々としたひげのそりあとが、精悍に見えた。
――男らしいひと……
ふと心でつぶやいている自分に、また、お浜は狼狽した。
行徳川岸へきたのか、ぐっと船がかたむき、左へ曲がる。
よろけたお浜を、男の手がささえた。

「おっとっと、幇間ほどじゃねえが、帯をしめてやろうか、え？」

色行燈

1

「太夫、太夫……」
長持から、そっと、目が出た。
「音羽屋さんえ……」
情けない声で、
「もう、よござんすかえ？」
元次郎、足がずきずきしていた。桟敷から逃げだすとき、火桶をけたおして、少しだがやけどを負ったらしい。
「まだ出ないほうが」
と、菊五郎の男衆が、
「うるせえ犬どもが、仰山木挽町、葺屋町一帯、くんくん鼻を鳴らしてうろつきまわってまっせ」
「ちくしょう！」
長持のなかで、握りこぶしをかためるだけだった。
うでの左京も弁天元次郎も、まだ芝居町に潜んでいるはず、と、町方では考えているのか、岡

っ引き手先ばかりか、同心衆も、手空きの連中までが乗り出してきて（現場が芝居町とか、遊郭とか、それに類似のはなやかな場所の捜索というと、かならず同心たちは出張ってくるものだ）しらみつぶしに、捜しているという。

「つらいだろうが、いいと見きわめるまで、じっとして、おいでなさいまし」

菊五郎がそういって、去ってから、大分になる。

男衆が、土瓶に水を入れて持ってきてくれた親切は有り難いが、小用を催したのには困った。

——左京の兄貴は、うまく逃げおおせたらしいが……

あの度胸と腕があれば——と、うらやんでみてもはじまらない。

女遊びや、いかさまばくちに熱中はしても、どうも剣術の方は、生まれつきスジが悪いとみえるのだ。

——こんなことなら忍術でも習っておけばよかった。忍術には、縛られても、なわぬけの法ってのがあるそうだ。骨の関節をポリポリはずして、ぐにゃぐにゃのなまこのようになって抜けられるというから……

元次郎、泣きたくなった。

——ちぇっ、こんな思いをするくれえならいっそ斬って出て……

捕まるのは目に見えている。

とにかくお上御用を承る薬研堀の与七を斬ったのだから、遠島は免れない。

——一生、佐渡で金掘りモグラをやらせられるンじゃなア……

これくらいの苦しみは朝飯前だと意気ごんではみるものの、下腹が張ってくるのばかりは、お

さえようがない。

「もし、もしっ」

と、またかめの子のように、首を出したり引っ込めたり、衣装蔵の外を通る裏方に、声かける元次郎だ。

「あ、あ、弁天の兄いさん、もうちっと……」

「ちっともそっとも、もう保たねえやな。ちょいと見てくンな、楽屋に犬ア入ってきていねえかね」

「いましがた、二、三人入ってきたが」

「げっ？」

と、首をすくめるのへ、

「あきらめて、出ていったようだ」

「助かり」

うーんと、長持の蓋をあけて、元次郎、やっと外へ出た。

「たまらねえ、まるで、エビ責めだぜ」

2

兄貴が菊五郎に化けたのなら、おいらだって春五郎ぐれエにゃ化けられよう、とにもかくにもここから三十六計をきめこまなくちゃ、早晩お手当だと思うと、あんまり脳みそは多くないほうだが、俗にいう、ばかにも窮余の一策。

「音羽屋さんには、またあらためて、礼にゆくから」

菊五郎は、この松の内から、とんでもない騒動の収拾に、座元などと話し合いをしているという。

弁天元次郎の窮策とは、衣装蔵にあった、虚無僧の服装だった。

朝比奈や判官とか、弁慶などの豪華な衣装は、役者が自前で注文するか借りるので、衣装蔵に平常、用意してあるものは、腰元の矢がすりとか、聞いたか坊主、三番叟、お中間のだんだらえりの半纏など、手軽なものばかりだった。

天蓋をかぶって、灰色の着流しに袈裟をかけ、明暗箱をぶら下げて、尺八を持てば、だれが見ても普化僧。高下駄をはいて元次郎は、楽屋から出た。

時刻は八つ（二時）下がりで、春といってもまだ浅く、雪雲が空にあるから、そろそろ暮れかけている。

——こいつアおもしれえ。てめえのつらア見せねえで、ひとの様子がわかるとは、虚無僧ってやつアみんなすけべえなんだな……

着飾って羽根をつく女たちばかり、きょろきょろ見まわしながら、元次郎は、往来を歩いた。

芝居町からはなれて、四、五町もくると、もう安心だった。

——さアて、三味線堀も危ねえし、弁天小路へ帰っても、なお危ねえ。といって、このまま上方へ突っ走るのも出来ねえ相談だ——

道中切手がいるし、先立つものの、路銀も調達しなければならない。

——三太のやつア、からっけつだし、権次も借銀けえすので四苦八苦、半鐘徳はあひる女郎にはまりこんでいやがるし……

数えてみても、可能性のあるところは、思いあたらない。

——いっそ垢離場（東両国の盛り場）の香具師をおどかして、二、三十金まきあげるとするか……

どうせ上方にいったら、五年六年はもどってこれない（ほとぼりを冷やすには、それくらいの期間が必要だった）。多少のあくどいことでもやったが勝ちだと、元次郎、決心がついた。

大門通りを横切って、汐見橋を渡ると、橋町一丁目、それから大店の並ぶ横山町の裏通りにさしかかったときだった。

「梵論字さんえ」

不意に声をかけられた。

背後からだった。

「えっへへへ、虚空鈴慕とやらを、ひとつお願いしてェな」

本能的に、元次郎は、

——町方だ？……

と感じた。

振り返って、網目ごしに見ると、思ったとおり、顔見知りの岡っ引き、人形町の民三だ。

「——せっかくだが」

と、元次郎は、のぞき込もうとするのを、尺八で払うようにして、

「先を急ぐ身、その儀はまたの日に」

「おきゃアがれ」

ぱっと十手を抜き出した民三、
「なりばかり虚無僧になっても、歩き方から尺八の持ち方、いかさま野郎とは一目で知れるンだ」
「え?」
「門づけもしねえで急ぐ脚つきといい、からだつき、お尋ね者の弁天元に違いはねえ、天蓋を脱いで、神妙にあばた面をさらしやがれ」
ここまで見ぬかれては、元次郎、なわを打たれたように、全身が、かっとなった。
「うるせえやい、犬っころめ」
突きだす十手を、尺八でたたきおとすや、ぱっと、身を翻す。
「あ、待てえ」
しびれた腕を抱くようにして、民三は追いすがりながら、呼び子を口にあてた。
淡いたそがれのなかに、時ならぬ笛の音が無情に響いた。
元次郎追捕の連中が、そこここで鼻をうごめかしていたのである。
気負いたった足音が、前後左右から走ってきた。
「ちくしょう!」
せっかくの変装も、これで台なしだ。
重苦しい天蓋をなげ捨て、足駄を走りながら、脱ぎ捨てた。
「待ちやがれ」
民三は、おめき、おめき、追ってくる。
街角にくるごとに、呼び子を吹きならす。

呼び子の吹き方は、接近遠の三唱に分けられ、同心から岡っ引きに教えられている。
接はいわく、下手人を目撃している場合である。近は、確信的近在の場所より、なかまを呼ぶに吹かれ、遠は、包囲の位置を示すためのものである。
この三様の呼び子の声が、松飾りを震わせ、獅子舞の笛を打ち消して、おどろに響き渡った。
ただ呼び合うばかりではない。
下手人ならずとも、神経をかき乱される下司な笛の音なのだ。
「ちくしょう! ちくしょう!」
元次郎は、街すじの見当もつかぬままに、走った。
門松をけたおし、ひき倒して、追跡の手をはばむだけの小才は、追われつけた身に自然に会得したものだ。
天水桶があれば小桶を投げつけ、水桶をひっくり返す。大八車があれば、鹿砦もどきに横倒しにしてしまう。ばくち場の金をかっさらって逃げるときや、けんかで場慣れはしていた。
だが、それも、間にあわなかった。
呼び子は、前後に迫った。
「くそっ、ぶった斬るぞっ」
元次郎は、走りながら、脇差をひっこ抜いた。

3

どこをどう逃げてきたかしらない。

白刃をふるって、むらがり寄る捕り手を追い払い、小路を駆けこむや、元次郎は、白刃をくわえて塀にとびついた。

しのび返しが、ぱりっと、音をたてたが、騒擾が、かえって、この音を消したようである。

——この暗さだ……

と、庭におりたって、ほっとした。

——塀にとびついたのを見られなかったらシメたもンだぜ……

元次郎、それでも、意気地なく、ひざがしらが、別の生き物のように、がくがくしていた。

——な、なアに、冷てエせいだアな——

庭の木々の枝もとに雪が、ふっくらと残っていた。

元次郎、ひとすくいして口にいれた。やけつくようにのどがかわいていた。

——どこの店だろう……？

盲滅法の逃走で、位置も判然としない。

風雅ななかにもどこか銀流しの派手さがあり、庭としての趣が、仰々しさを感じるのは、町屋敷にちがいない。

——民の野郎に声をかけられたのが、たしか、横山町一丁目の裏通りだった。とすると、あれから、二、三町は走ったっけ……

横山町から馬喰町か。

どちらも老舗が軒を並べていて、これくらいの庭は持っているはず。

——けっ、どこでもかまやしねえ、入ったついでに、うまくやると山吹色にお目もじかなうかもしれねえ……

気が弱いくせに、そんなこぎたない考えがひょいと頭を持ち上げる。これでも三河以来の家がらだから、情けない。

低い築山をはいおりると、泉水がある。

ひょうたん池で、半分は蓮で埋まっていて、土橋がかかっている。

元次郎は、石燈籠の陰に身をひそめた。

むっと、鼻さきににおうものがあった。白梅だった。

気がついてみれば、ここにひとむら、かしこに一本と、白梅紅梅が、馥郁と、春の息吹をたそがれのなかにまいていた。

梅が香が、ひとりわがもの顔のここは、裏庭らしい。

左手正面が母屋で、右手に離れふうに、六畳ばかりの部屋が突き出している。

水仙の桟が瀟洒にかかった丸窓のついた部屋。

元次郎は、うさぎのように、両耳をぴくりとさせた。

「——ここだ、ここに違いねえ」

「開けろ！」

「お尋ね者が入ったぞ」

がやがや騒ぐ声とともに、裏木戸をたたく音が、聞こえてきた。

「ちぇっ、案外、目がはええや」

元次郎、ぱっと飛び出した。

壁の陰へ走り込んだのと、いれ違いに、騒ぎを聞きつけて、
「なにごとでございます、正月早々からの乱暴は迷惑でございますよ」
番頭だった。
その間も、木戸の乱打はつづいていて、
「何をいいやがる、開けろ、開けねえか」
「芳っ、てめえはおもてへ回れ」
「てっきり、この塀のうちだ」
声は、あたりはばからぬし、言葉も横柄なのが、世故にたけた番頭をぎくりとさせた。
「あの……どなたさまで」
「開けろ、御用のすじだ」
「へ？」
「早くしねえか、お尋ね者が逃げっちまわア」
「へいへい」
番頭は、思わず、あたりを見まわした。
ようやく、夕やみがにじみだした庭に、梅の花がほのかに、あるいは白く、あるいは薄紅色に咲いているだけ。
動く影とてはない。
「開けねえか、けやぶるぞ」
「へい、へい、ただいま！」

番頭は、庭下駄へ足をおろしかけて、踏みはずして、転げ落ちた。
くつぬぎ石のかどで、いやというほど向こう脛をぶっつけた番頭は、いっぺんで酔いも冷めてしまった。
木戸の乱打は、激しくなる一方だ。
「おみつ、おりつ、はよう木戸を……あっ痛う……」
女中たちを呼んだが、出てこない。
女中たちは、そのころ、表になだれてきた同心や岡っ引きの応対で、震え上がっていた。
「弁天の元という、前髪のとれたばかりの御家人が逃げ込んだはず」
「さア、そんなはずは」
「裏塀から入った様子だぞ」
同心の言葉に、一家は、顔を見合わした。
久左衛門はじめ、おすが、おひろ、それに拾い子で育てた丁雅の一文禿の留吉の四人は、いま、芝居茶屋からもどってきたばかりであった。
「てまえどもとは、なんのかかわり合いもございませぬ。何かのお間違いかと思いますが」
と、応対しているうちに、おひろは、
「おみつ、顔を洗うンだから、湯をもっておいで」
と、いいつけて、ずんずん居間へもどってきた。
市村座の騒ぎを、芝居茶屋『おもだか』に避けて、すぐに帰るのも曲がないと、食べたり飲んだり、表通りの騒擾をながめて、やっと往来のほこりが鎮まってから、もどってきたのである。

おひろは疲れていた。

大好きな菊五郎の朝比奈が見られなくて失望したり、即興的ながら江戸別れのちょんがれを聞いて喜んだのもつかのま、うでの左京がとびだして——

混乱のうちに、おひろは、左京に抱きしめられたときの、羞恥と恐怖をよみがえらしていた。芝居茶屋に引きあげたときは、踊りの十番もつづけ舞したかのように、ぐったりしていたのである。

おひろは、離れふうに、廊下から突き出ている居間に入ろうと、障子をあけた。

とたん、

「あ……」

口に蓋をされた。

よろめいた腰を、別の手が、がっしりと抱きとめた。

4

「静かにしてくンな」

元次郎の声——とは、とっさに思い出せなかったが、正月も盆もなく、目をつりあげた同心の顔が、さっと目の前をかすめた。

「な、わりいこたアしねえ」

口に蓋をしたまま、ずるずるっと引きずり込むと、ぴしゃりと後を閉めて、

「チットの辛抱だ、お嬢さん」

行燈はまだ灯が入っていなかったし、六畳の部屋は暗い。

「う……」

おひろはもがいたが、男の力にはかなわない。

捕まれば島送りと思うから、元次郎も必死で、

「声をたてると、やっちまうで」

おどし文句で、押入の前に引きずってきた——

庭に転げた番頭は、はいずるようにして、サンをあけると、

「唐変木め！」

突風のように飛び込んできたのは人形町の民三。

「おかみの御用をないがしろにしやがって！」

ぴしっと、平手打ちして、

「やい、いまさっき、ここへ一匹飛びこんだのがいるだろう」

「え？……い、犬で？」

「すっとぼけるな」

「へえ、へえ、じゃアねこか……」

「この野郎！」

気がたっているから、手が早い。また番頭は、耳鳴りがするほどひっぱたかれて、

「ぞ、存じませんよ、親分さん。あたしは、いま小用にきて、へえ……」

「こんなやつにかかわり合っていちゃア、風を食らっちまわア、そこらを捜せ」

三、四人の手先に指図したあと、また番頭のえりがみに十手をぐいと巻き込んで、
「やい、うすのろ。おかみの御用に手助けする気持ちがあるなら、ありったけのちょうちんに火を入れてもってこい」
「へえ、へえ、ごもっともさまで」
「早くしろい」
と、またしりをけられた。
——おひろは、
もがいていた。
「声をたてるな」
叫べば殺される。と、思うと、あえて叫ぶ勇気もなかったが、恐れのあまり、口を押さえた元次郎の手は、きつかった。
腰を抱いて、押入の中に、一時ほうりこむつもりだったのが、よろめいて、二人は折り重なって倒れた。
「た、たのまア、黙っていてくンな」
弱々しく、元次郎は哀願した。
それだけに、手足がしねっこく、おひろから離れなかった。
「ううう……」
——く、苦しいンだから……
手をゆるめて！　と、せつないもだえすら、元次郎には伝わらず、おひろが逃れようとしてい

るものと思い、ますます手に力をこめた。
冬だというのに、元次郎もおひろも汗ばみ、無言の争いが、肉と肉、肌と肌のきしり合いとなって、押入のなかは温気がこもり、肌は汗にまみれた。
争いのうちに、すそが、けだしがめくれ、腿までむきだしになった。
処女のにおいが、元次郎の鼻腔をうつ。
——むすめだ、この女アむすめだったンだ——
いまさらのように、元次郎は思った。
障子の外を、足音が走ってきた。
「しっ」
ぐいと、押入の中に、引きずり込む。おひろは、この圧力から逃れようとしながらも、外の足音を耳にすると、その努力をぐたっと放擲してしまった。
このあられもない姿を、衆人の目に触れさせることのほうが、むすめには、絶え難かったからである。
「おめえ……お、お嬢さんえ」
「ううう……」
「静かにしてくんな、おいら、なんにもしやしねえ、なンにもしやしねえ！」
なんにもしない？
肌と肌の接触が汗にとける化粧のにおいや、あやしく男心をあおる処女の体臭などが、いやでも、若いからだの官能をゆすぶった。

その自覚が、元次郎に、禁断の努力を強いるのだ。

手が、女のやわらかいくちびるを覆い、片手が腰を抱いている。元次郎の顔は、おとめの愛の双丘のあいだに伏せられていた。

心ノ臓の狼狽が、たかまりが、ごとっごとっと耳の下で鳴っている。

男を知らぬ女の肌の導火線に火はつこうとしていたのだ。

元次郎は、耐えていた。男を殺して、耐えた。その粋なつもりの本田髷が、おひろののどのしたでみだれて、あらわな胸肌にふれて、故意のようにくすぐるのだ。

——ああ、やめて！

自分でも分からなかった。好色なへびが絡み合って、体内をはいずりまわるような官能のときめき、火の舌でちょろちょろなめまわされるような、血のほとばしり。血管はごくごく音をたて、にはいちのおとめのぬめ肌を焼きつくすかのように、走りまわっていた。

元次郎は、脂汗をなめながら、しぼるような声でいった。

「お嬢さんえ、な、なンにもしねえよ……」

庭が騒がしくなっていた。

表から入ってきた同心たちと合して、ちょうちんがほたる火のようにとび交い、三百坪ばかりの庭から縁の下、厠の裏、渡り廊下まで、草の根をかきわけるようにして、捜し始めていた。

「——お嬢さま」

と、障子の外におみつの声がした。

「とんでもないことでございますね、大どろぼうですって……」

化粧くずれ

1

——いい加減をぬかしやがれ。おいらが、何を盗ったえ？

元次郎、おみつの声に、現実に引きもどされた。

「——さア、お嬢さま、顔をお洗いになってくださいまし」

すーっと、障子を開けて、

「あら、真っ暗じゃアございませんか、お嬢さま、どこにおいでなのでございます？」

温湯をたたえた金盥をそこへおいて、おみつは、慣れた物腰で入ってくると、手さぐりに行燈の下の、火打ち石をとって、火口に火花をうつした。

とたん、きゃっと悲鳴をあげて、飛びのいた。

押入が半ば開いたままで、ぎらぎら、脂汗を浮かせた男の顔が、目前二尺のところに、こちらをにらんでいたのだ。

「あれえ——、だれか……」

悲鳴が、途中でぶっ切れた。

一陣の黒いつむじ風のように、押入から飛びだしたものが、おみつの顔をけって、廊下へ躍り出たのだ。

むろん、火口ははね飛ばされて、ちろちろ青黄色い炎を上げ、おみつが顔を上げえないうちに、燃えきってしまった。

「ええい、年貢のおさめどきでエ」

元次郎、若いくせに、御家人無頼を気どるだけあって、あきらめも早い。

おみつをけたおすや、脇差を抜き放った。

と、その決断を、一層、判然とみんなに知らせるような音が、足もとで起こった。

がらがらっと、金盥が、熟睡までたたきおこすような音をたてたのだ。湯が音高くこぼれて、湯気が忍術のけむり玉のように、尾をひいて走った。

がらンがらン、金盥は、やけっぱちな音をたてている。

やけっぱちなのは、元次郎だ。

「くそでも食らいやがれ！」

思いっきり、金盥をけとばした。

つつーっ、廊下をすべって、おあつらえむきに、捕り方たちの耳目を驚かしたものだ。

「ざまア見ろい」

なンのざまを見るのか。

元次郎は、抜き身片手に、そこらの部屋に駆け込んだ。

座敷から座敷、納戸、廊下、と、足の向いた方へ、突っ走る元次郎の前に、

「出た！」

「出てきたぞ！」

裏庭の手先たちは、後を追ってきたし、民三の笛の音を聞いて、表に張っていた与力が、

「それっ」

と、あごをしゃくった。

同心が、十手を握りしめて、

「からめ捕れ！」

と、岡っ引きに下知する。

背中の倶梨迦羅紋々の威勢のいいのが、六尺棒を握って、上がり框に体を構える。

そこに元次郎が飛び出してきた。

わーっと、群集が喊声をあげた。

呼び子とともに、大戸をけはなし、龕燈ぢょうちんの光を集中して、あり一匹漏らさぬ捕り物陣だ。

ちょっと断っておくが、旗本御家人にかぎらず、士分の者は、牢に入れられても揚がり屋といい、無宿牢、百姓牢と区別されていたように、階級制度のきびしかった時代だから、不浄役人といえども、簡単にはなわをかけられなかった。

原則的には、国侍なら、その藩主へ（留守居を通じ）掛け合い、旗本なら、支配、係を通じて——呼びだす。

逃亡のおそれがないこともあるが、それだけ格式を重んじたわけだ。

が、理由もなく、街頭で刀を振りまわしたり、無法な殺人を犯したりした場合、現行犯なら、町奉行が治安の名目で、捕縛することもできたのだ。

弁天の元、といっぱしの無頼らしく、ふたつ名も持っているが、森野という由緒正しい名字を持つ御家人だ。

薬研堀の与七を殺意でもって斬り、姿をくらましたのだから、むろん御支配より町奉行所へ捕縛の許可が出ている。

元次郎、逃れるすべはなかった。

生きるも死ぬも、頼るは脇差ひとふり。

「うぬら、地獄へ落ちて悔やむな」

凝った木口もへったくれもあったものではない。

脇差を振りまわして、飛び出したが、

「ちぇっ、よっくも早いとこ手を回しやがったぜ」

ありのはい出るすきもない布陣に、奥から店へ三河屋ののれんを頭ではねのけて、出てきたまま、元次郎、たたらを踏んだ。

2

「神妙にせい」

わざわざ出馬してきた与力江波昌作が、ことさら語気をやわらげて、

「そちも武士なれば、無謀なまねはやめい、罪をみとめて、あっさりと縛につくのが、まことの武士ではないか」

こびるような調子である。まともに御用なわをかけようとすれば、手負いが出る。いのししの

牙をひっこめさせようとしての見えすいた言葉だった。

「へん、だ、あんまり気味の悪い声は出さねえでくんな」

元次郎は、油断なくあたりを見まわしながら、せせら笑った。

「あいにくと、おいらのほうは武士の殻はとっくに脱ぎ捨てたようだ」

「なに？」

「つまりはもぬけの殻ってことよオ」

足もとの算盤を、ばーんと、与力に投げつけて、くるりと身を翻すや、また、座敷へ駆け込んだ。

「御用だッ」

「ばかッ」

六尺棒の風うなりが、耳をかすめる。

身を沈めて、脇差でなぐ、というより、殴りつける、というに近かった。

かつンと、音がした。

斬れたようでもあり、斬れないようでもあった。元次郎は、次の間に走り込んだ。

が、何か、そでにひっかかった。強い力で引きもどされた。

「うぬ！」

どどッと、引き倒される。そでがらみ、というやつだ。棒の先にむかでのように釘が沢山出ている捕り物道具である。

得たりや、とばかり、襲いかかるやつのもろ足を、引き倒されたままさっと斬り払う。

びゅっ、と、血がしぶいた。
ずるずるっ、元次郎のからだは、引きずられる。引きずられながら、身をねじって、
「野郎！」
刀を離したくないが、そうせねば助からぬ。いちかばちか、元次郎の手から、血刀が飛んだ。
「あぶねえ！」
思わず、そでがらみをはなして、飛びのく。
血刀は、ぷっすりと、唐紙に突き立つ。
「さアこい！」
すばやくはね起きるや、凶器、そでがらみが、こんどは元次郎の得物になった。
「鼻くそ、馬くそ、犬のくそ、どこからでもかかってきやアがれ」
そではやぶれたまま、片肌ぬぎ。
ひきずられて、元結は切れて、ザンバラの凄愴な姿だ。
もっとも、粋な本田髷は、月代を深くそりぼこち、髷を細くそぐから、量は少なくなっているが。
「弁天の元次郎、繰り返しいう、神妙に、おなわにかかれ」
与力の叱声に、元次郎、うすあばたに血しぶいたすごい顔をにやりとさせて、
「生まれたときから、神妙じゃなかったようだ」
「それでも武士か、旗本か。恥を知らっしゃい」
と、同心の水野泰次が、わめいた。

「お手数かけて、捕らわれるは、恥の上塗りぞ」
「赤っ恥アかきなれてらアな、へたな左官のコテみてエに、三度塗っても、汚ねえし、四度塗っても、平らにならねえ、そいつが、弁天の元さんだアな」
「ええい、未練げな」
「あたりきよ」
と、これにも平然と、応酬する元次郎、どたん場に追い詰められたときのくそ度胸はうでの左京の弟分だけある。
「くせえ犬どものおかげで、せっかく飲みかけた灘の生一本が、惜しくてたまらねえや」
だが、口の達者は、腕前までは及ぼさないとみえ、
「おさえろ！」
爆発したように、最終的な与力の号令で、同心が四、五人、抜刀で（斬る気はあるまいが）かかってきた。
「来てみやがれ」
そでがらみをぶん回したのは、しかし、結局むだ骨でしかなかった。
一人の太刀をはね飛ばしただけで、岡っ引きの髷にひっかかると、慣れぬ捕り物道具、元次郎のほうが、よろめいた。
そこへ
「神妙に！」
と、水野同心が大手を広げて組みついてきた。

瞬間、右上体を沈めて、頭越しに投げとばすと、ぱっと元次郎は、庭へ飛び下りていた。

——そうだ、おひろを人質にして逃げりゃアよかったっけ……

そう考えついたのは、後の祭りである。

あのとき、処女の肌にふれて、元次郎は、純粋に少年にかえっていた。わずかの間でも、弁天の元は、森野元次郎にかえっていたのだ。

どうして、そのような狡猾なまねが出来たろう。

——弁天の元が、いってえ、どうしたンだよオ……

悪党のはずだったンだ。悪党の元次郎だったはずだ。そいつが弱気を起こしたから、このありさまだと、ザンバラ髪をふりながら——ばくぜんと、感じていた。

もう、佐渡の島送りでも、獄門でも、勝手にしやがれ、という気持ちだった。

突く棒が、とーっと、首わに走ってきたのをかろうじてよけたとたん、彼のからだは、仰向けに倒れ、ついで、池へ落ちていた。ばりっと薄い氷の割れる音とともに、耳がじーンとした。元次郎は氷の中に包まれたように、四肢が凍るのを感じた。

「落ちた」

「なわをかけろ」

浅い泉水である。

刀や十手を投げ捨てた同心たちが、われ先にと、折り重なった。

さっきからの元次郎に、いまいましく思っていたやつだろう。顔を、鼻がひしゃげるほど押さえて、ぐいと泉水の中につけた。

鼻口から、耳から、水が腹のなか、胸のなかに流れ込むような気がした。

「手荒にいたすな」

と、与力がとめたが、聞こえぬふりで水野同心は、

「——骨を折らせやがった、もっと水雑炊でもくわしてやるがいい」

ひき起こされ、水を吐かしたあとで、また頭をわらじの足が踏んづけた。

——ちくしょう！

がぼっと、水が口に流れ込んだ。元次郎はまた気が遠くなった。

3

足音がした。

二人は言い合わしたように、話をやめて耳を傾けた。

足音は、せかせかした女の薄歯の下駄だった。

二人は、顔を見合わせた。

「——まだかしら」

お浜が、とってつけたように、いった。

とっぷりと暮れたのに、菊五郎の姿が現れないのだ。

「心配するこたアねえだろう」

ごろりと寝そべって、左京はいった。

「てめえが助けられて、ご本尊を心配するなってエのは、虫がよすぎるが、おいらみてえな凶状

持ちじゃねえ」

「そりゃアそうですけれど」

「おや、こいつア痛み入谷の鬼子母神」

おどけた声をだしたが、お浜は笑わなかった。

「巻き添えを食ったか、だが、知らぬ存ぜぬで通せる話さ。そのうちに、帰ってくるさ」

沈黙がきた。

沈黙は、空気をしらけさせる。

正月十五日というのに、まるで、お通夜のような気分だ。

お浜は、なるべく、左京の顔を見ないようにしていた。

屋根船の中。

あの、むれたような温気の中でみた、お浜の額の汗。苦しげに、やや眉根をよせて、男の舌を拒もうとしたときの表情が、いまでも鮮やかだった。

そして、くるくるっと、帯を解いたときのあやしく、うねった腰のあたり……

きぬずれの音まで、耳の底に残っている。

——なンだってンだ、うでのだんな……

と、自問自答する左京だ。

——そいつア、あんまり調子がよすぎゃしねえかえ？　助けられただけでも、御の字だと思うがいい……

理性はそう思う。だが、肉体のうずきは、あれは、あのときの感触からきているのだ。あの移り香はどうしたらいいンだえ……？

——きれいなばっかりじゃねえンだ、心ばえがいい女……

おいらアはじめてだ、と、左京は、深い吐息をついた。

すさんだ生活の夜昼に、お浜のような女が、いることさえ、信じられなかったのだ。

——いっそ、早く帰ればよかったンだ。

時計の分秒をきざむ音のように、こうして対座しているだけで、左京は、ぐンぐンお浜にひかれてゆくものを感じていた。

「——おかげで、命びろいしたぜ」

屋根船は、すぐ裏につくようになっている。

松島町は、大名旗本の屋敷に囲まれた下町で、静かなふんいきが、菊五郎の好みにあってお浜の妾宅、というより、江戸に来ての住まいになっていた。菊五郎には、京に尾上家の家つき娘の女房がいる。

ここを好んでいるのは、三ツ叉の手前から掘割になっていて、いつでも船遊びが出来るし、歩けば芝居町まで、二、三町という近さが、かっこうだったからである。

「永居をしちゃア、ますます迷惑をかける、おいらア、これで、おさらばすらアな」

と、出ようとするのを、

「いいえ、まだ、町方の目が光っています。今夜遅くか、でなければ、明朝早く、おいでなさいまし」

と、お浜が必死に引きとめたのだ。

「まもなく、うちの人も帰ってくるでしょうから」
「なるほど」
油火事のときが助けた、といえるのなら、今度のことで、きれいに帳面は整理されたわけだ。が、それは心持ちの上でのこと。
やはり、一言、礼をいって帰らねば、武士の殻をかぶっている以上、それが当然。
待つことになった。
とはいっても、貸し衣装の保証金も入れることのできない貧しさだ。
空っ茶を出したきり、だから、話のつぎほもなくなると、黙って、菊五郎の帰りを待つだけだった。
無言というものが、こんなに息苦しいとは、左京、はじめて知った。
「――おや、雨のようだぜ」
ぽつ、ぽつっと、静かな点滴が、板廂を打っていた。
「ちっとなま温かいと思っていたが……」
「……」
やはり、春ですのね。そのすなおな相づちが打てなかったのは、お浜の心も平静を欠いていた。いな、平静にまだもどっていなかった。
「おもちを……」
と、やっと、いった。
「焼きましょうか?」

家でついたのではない。はじめて切りもちを買ったのだ。それも、お供えを少々。
「せっかくだが、ご辞退しよう。なにね、おいらもちは好物なンだが、まだ心ノ臓が、これこのとおりだ、ははは」
もちどころか、なンにものどにゃ、通らねえンだ。
それっきり――また沈黙がきた。
下駄の音や、草履の音が、思い出したように通りすぎる。
小路の奥から三軒目で、松島稲荷の赤い旗が見える、妾宅。もともと通り抜けの通行人とてはないところだ。
「――やみそうもねいな」
サーッと、軽いが、密度の細かな音をたてて、雨は小正月の夜をぬらしてきた。
「ご新造さん、傘を貸してくれねえかい」
「え?」
「番傘を一本、足駄はいらねえよ」
「あの、お帰りに?……」
驚いたように、美しい目を上げて、
「せっかくいままで、お待ちくださったのですから……」
「うむ」
左京は、あいまいな顔で、往来を見た。
「――帰ったほうが、よさそうだ」

沈鬱な声は——左京の心のなかでの相剋のうめきだった。
「でも、それでは……」
「いや、帰ったほうがいい」
「うちの人も、左京さまが、お無事でいらっしゃるお姿を見ると喜ぶでしょうから」
お浜は、美しくほほえんだ。
「それに……」
「それに？」
「あたくしも、ほめられたいンですの」
思わず左京もつり込まれて、破顔した。
「おかげで助かった」
と、あらためて、左京はいった。
「おいらがひっくくられたら、八百八町でお祝いしたかもしれねえところを」
「いいえ」
急に、きまじめな顔になって、
「そんなことはございませぬ」
武家の妻女のような言葉つきになるお浜だった。
「そうさ、おいらア、クズだ。江戸のゴミだよ。うでの左京なんて、人に恐れられて喜んでいたなンて、ばかな野郎さ」
「そんな……」

「お浜さん、おいらが礼をいいてエのは、今日、命拾いしただけのことじゃねえ」
「……」
「いままでおいらア、いつでも特別だった。きらうやつアへびのように、おいらをきらった。好いたそぶりで寄ってくる女もいないじゃなかった。が、たいていのやつが、金か、おいらの腕っぷしが目当て。そんな根性のやつらしか、知らなかったおいらを……」
左京の手は、いつか、お浜のひざに乗っていた。
「おいらを、人間として、見てくれた、ご新造さんえ」
お浜は、動けなかった。
いけない、離れなければいけない、と思いながら、お浜は、まるで、畳に吸いつけられたように、一寸も動けないのだ。
伏せたまつ毛がちりちり、震えていた。
「ただ、助けてくれるなら、あそこまではしねえ……」
お浜は、一層、うなだれた。
見ると、かたく目を閉じ、髪の中まで、赤くなっているのだ。
そででそんな面を隠そうとするのを、ぐいと手を握って、
「お浜さん、おいらア忘れねえぜ」
びくりと、女の手が動いた。
うなだれたまま、かすかに、お浜は首を振った。
「え？」

「――いけません」
蚊の鳴くような声が、
「いけません……」
「お浜さん、おいらア……」
「いいえ」
と、こんどは、はっきりと拒んで、お浜は顔を上げた。
「お忘れになってくださいまし、あのことは」
赤かったほおが、真っ青になっているのだ。
切れのながい目が、じっと、左京を見つめていた。
女の激しい変化に、ぼうぜんとなっていると、
「あのときは、あたし……自分でも分からないのです、気が狂っていたのかもしれません」
「お浜さん！」
「ですから、ですから、あれは……あれは、はまじゃありません、だれか、よその」
「何をいうンだ、お浜さん」
「ね、お忘れになって、お願い、お忘れになってくださいまし」
お浜の長いまつ毛に、意外にも光るものが宿されていた。
「ね、ね、左京さま」
「……」
「そうでないと、あたくし……」

4

これ以上、青くなれないと思うほど、お浜の表情は、極限に達していた。ぎりぎりの感情のあらしが、小さな女の胸の中に吹いていたのだ。
お浜は、つと、顔をそむけ、かすかな、ほんのかすかな、聞きとり難いほどの声で、こうつぶやいた。
「あたくし……狂いそうなンです」
「お浜さん！」
左京の手に、力がこもった。
「お離しになって！」
「は、離さねえよ、お浜さん、おいら……」
「お願いです、苦しめないでくださいまし、あたくし……」
逃れようとする力の平衡がやぶれて、女の上体は崩れた。
横座りになったまま、荒い呼吸に、胸をあえがしながら、お浜は、涙のあふれた双眸を、左京に向けた。
「うちの人が……」
くちびるは震えている。
罪の意識に震えている。
おのれの心のなかで、制しきれない、激しい血のたけりを、お浜は聞いていた。

「うちの人が、帰ってきます」
そう、口に出した。
声に出して、はじめて、世間という得体の知れない常識のワクのなかで、お浜は制御しようとする。
帰宅して、ちょっと櫛を入れただけの、根のゆるんだ勝山髷が、がくりと、崩れた。
それが、ふいに、左京の男に訴えたのである。
「お浜！」
「あ、許して！」
「お浜！　おいらア、もうごまかせねえ」
強い力だった。
たくましく、ひろい胸幅のうちに、お浜の体は、よろけ込んだ。
外の雨はますます激しくなった。家のうちにも、あらしは吹きまくった。お浜は、自責と、そして自分ではどうしようもない官能の炎に、われと、わが身を焼いた。
——許してッ……
菊五郎に、心でわびながら、肉体は左京の肌にこたえている。
秘め初め——
書き初め、出初め、仕事初め、正月のそうした縁起物のなかにだれが数えたか、元旦夜の夫婦のいとなみを、秘めごとはじめ、とつけたその言葉が、身も世もない悦楽の狂騒のなかで、お浜の脳裏に浮かんだ。

左京の腕が、柔肌をひしぐほど、締めつけた。
真っ赤に上気した右の耳たぶを、男の歯でかまれて、お浜は高い叫び声を上げた。
有情の雨……雨音は、その叫びを消すように、激しく、たたきつけている。

雨夜駕籠

1

浅草見付の内、柳原堤に沿って、郡代屋敷の塀が長々と続いている。
この郡代屋敷の正門は、神田界隈で唯一の馬場、初音の馬場に面していて、馬喰町四丁目から橋本町四丁目に囲まれている。ちょっとひろびろとしたところだ。現今でいうならば緑地帯。
この馬場の塀に隠れるように、番傘をかたむけて走っていく浪人者がある。
橋本町から木戸の内へ入ると、いわゆる大路地で、裏は郡代屋敷だから、小店と長屋がひしめいている。
そのどんづまりの軒下にぱっと駆け込んで、
「反っ歯、反っ歯はいねえか？」
「だれでえ」
すぐと返事があった。
「おれだ、反っ歯」

「おれにゃ親類はねえ、なンでえ、ちゃンと静観という立派な名があるんだ、名を呼びな」
「早く、開けろ」
「うるせえのう、入りたきゃア、勝手に入るがいい、カギのかかるようなお屋敷たア訳が違うンだ」
たてつけが悪いとみえ、がたがた鳴らせていたが、やっと格子戸があいて、さっと、浪人者は飛び込んだ。
「や?」
と、立ち上がった影二つ三つ。
「うでの兄貴!」
「しっ」
反っ歯でイガグリ頭の、一見して願人坊主と見える大入道が、たしなめた。
「兄貴だとは知らなかった。道中、目明かしにゃ、とっ捕まらなかったですけえ」
「ふん、お江戸はひれえやな。だが、実をいえア、すンでのところで、御用の声がかかりそうだったさ」
兄貴ほれよ雑巾、と、手桶の水をくんできたのは、ねこ目の銀太。
この界隈の地回りだ。
「だがよ、心配して、こう役にも立たねえが面アつき合わして相談ぶっていたところなンだ」
と、狭山万五郎も、破れ行燈のむこうから顔をあげて、
「ねこ目、木戸の外まで見てきねえ」

「なアに、それにゃ及ばねえさ。幸いと、この雨が、いい案配に町方の目をくらましてくれたようだ」
せまい棟割り長屋である。
文字どおり九尺二間。格子戸から裏まで土間がつづいて、その裏はせまい勝手があるだけ。
もっとも、勝手と六畳とのしきり障子など、暮れのうちに燃してしまったので、見通しがきく。
願人坊主、狭山万五郎、ねこ目の銀太のほかに、おろくが来ていただけでなく、木場のお力が厚化粧の顔を見せていた。
「おう、ばかにおいどのでっけえ女だと思ったら、お力さんじゃねえか」
「いやですよ、先生」
と、描きまゆ毛をちょっとひそめただけで、お力は、
「先生は、剣術がお上手だし、度胸がおあんなさるから逃げてこれるけれど、うちのあの子ときたら」
——あの子はよかった……
と、左京は苦笑したい気持ちで、
「その相談で来なすったのか」
「ええ」
と、おろくが引きとった。
「このひとったら、元さんのことばっかし。そりゃアなんとかしてあげられたらと思って、願人さんところに、相談にきてたンですよ」

「そいつアかっこうだった。おいらも、おめえンとこへ突っ走ろうと思ったが」
「ああ、危ない」
おおぎょうに、胸をはずませて、
「うちにゃ、御用の目が光ってますのさ。マクのがやっとだったよ」
「だろう、と思って、ここへ来たンだ」
にこりとする左京は、屈託がない顔になる。
「いろ女の家なら気持ちがいいが、こんな場合でもなきゃア、願人坊主のイガグリ頭なンか見たかアねえでの」
「こりゃ殺生を申さっしゃる。これでも御仏に仕える拙僧を、なんと仰せられる」
「ははは、御仏はよかった。おめえが仕えるなア、どぶろくか酒粕だろうぜ」
「わっはっは、まアさようなところかの」
「酒粕なンて、しみったれな」
と、おろくは一升徳利をだしやった。
「まだ残っているよ、お前さん」
「おめえの手土産か」
「こっちの人さ」
「ああ、お力という金のなる木がいたっけ」
左京が入ってくるまでは、湿った空気だったのが、からりと晴れたような気分で、
「飲んでくださいな、先生、飲みながら、元さんを助け出す考えをひねってくださいな」

2

「さアて、飲んだからって、文珠の知恵はでるたア限らねえぜ」
お力を、じらすようにいう左京は、もちろん、成算が胸にあるらしかった。
「後生だから、ねえ、先生、なンとかしてやってくださいな、あの子、いま伝馬町に、ほうり込まれると……」
泣かんばかりのお力だった。
——そんなにほれたか……
と、からかうのもはばかられるほど、お力は真剣だった。
三十にもう手が届く年で、子供も二人いるが、お力の亭主は深川の材木屋で、吉原に入り浸りだった。
——うちの人があンなだから、あたしだって遊びますよ……
そう広言して、ばくち場に出入りしたり、軍鶏に凝ってけあわせに大金を賭けたりしている女だった。
賭けごとだけではない。豊満な体だし、その年齢が、ばくちぐらいでごまかせるはずもなく、
——うちの人は、吉原でも、若い妓ばかりあげているそうだから……
自分だって、まだ老い込む年じゃアない。
お力は、佐賀町の賭場で元次郎と知り合った。
昨年の春だ。元次郎が二分ばかりの有り金をすっかりはたいたのを、見かねて貸してやったの

が親しくなるきっかけだった。
「おかみさん、済まねえな」
借りた一両も、そっくりパクられてしまうと、元次郎、しょげてしまって、
「鉄火場の貸し借りは二日かぎりがご定法だが、実ア、おいら……」
「二日がふた月でもいいよ」
「なンだって？」
「返してもらうつもりじゃアない。おまえが目が出りゃアいいと思って……」
というお力は、自分ながらあふれるような色香に、大柄な姿態がぬれているような気がした。
「――ヤマ藤のかみさんえ」と、鉄火場の部屋頭が、「弁天の元ア、まだ餓鬼だ。男にするなア、早すぎますぜ」
にやりと笑われてお力は、ぽっと赤くなった。
その夜、わざと先へ出て元次郎を待った。しょんぼり出てくるのを、
「若い者がナニさ、元気をつけてあげる」
富岡八幡の門前町、『花びし』に連れ込んでさしつさされつしているうちに、お力は腕もあらわに、杯持つ元次郎の手首を握って引き寄せ、肩を抱いてしまった。
「おかみさん、おいらア……」
「あたしが、きらいかい？　好きかい？」
炎のような息だった。
元次郎、そのころはまだ前髪をつけていたし、いっぱし遊び人ぶってはいても、童貞だという

ことの幼さが、やはり受け身だった。
お力のゆたかな乳房が、胸であえぎ、むせるばかりの色香に、男蝶がめまいを起こしたように、元次郎は熱病のように、うわごとをいった。
「好きだよ、好きだよ、おかみさんのような女を、おいら、おいら……」
そのとき、元次郎は、生まれるとから失った母親のことを思いだしていた。
幼時の記憶では、お力に似ていたような気がする。
追憶は、すべてを美化するものだ。まして、母性への愛着は、その美貌を捏造してしまう。
お力を、亀戸天神うらの軍鶏助の庭で最初見たとき、
――おふくろに似ている！
と、感じたことは事実だ。
それ以来、好感を抱いていたのだ。そのあこがれがお力に反映したともいえるのである。
「かわいい子」
お力は、元次郎を抱きしめ、前髪にくちづけし、激しくほおずりをした。
男の手が、腰をはいずりまわるのをたしなめながら、
「いま帯を解くから、お待ち」
「待てないよ」
「ばか、お待ちったら！」
その猪突するような若さが、かわいかった。
肌を合わせると、もうお力のほうが狂った。

軽い気持ちの、一時の遊びが、とうとうその夜を、抱き合って明かした。
何も知らず、そのくせ、若い体力のみなぎった元次郎の雄馬のような体から、お力は離れられなかった。
夜半から鳥居をぬらして、ひそやかに降る春雨に冷えた部屋も、お力の情炎を消すほどではない。
——あたしが男にした！
その喜びが、一時の浮気でない、愛情になった。
——あたしで、男になったンだ、あの子——

3

情婦、というには年齢差がある。
加えて、お力の愛情が、半母性的な面もあって、弁天の元次郎の気持ちは、だんだん離れていったのも自然だろう。
男の必然として、
——男になった——
という自覚が、
——一人前なンだ、メスを開くことが出来るンだぜ……
そうなると、若い女が目につく。しり軽な水茶屋の女や、矢場女。たいてい十六、七のそれらの女なら、元次郎は、やせてはいるが背が高いから（前髪もおとしたし）充分コナスことが出来

るのだ。
シスター・ボーイにしては、ちょいと骨があったから、やはり、男らしく能動的に、元次郎は振る舞いたい。
次々と、そこらで目につく女に手を出す。
失敗することもあるが、思ったよりも、軽く女たちは落ちた。
ますます自信をつけて、弁天元次郎は、だんだん小悪党の名をひろめていった。
お力には、それが面白くなかった。
「——いつまで、というンじゃない。お小遣いは不自由させないのだから、半年や一年、遊んでくれたっていいじゃないか」
と、恨みごとをいう。
それが、元次郎の足をますます遠のかせた。
「ねえ、先生、あたしゃ元さんと、もう三月も会ってはいないのさ、ひと晩でいいから、ねえ、くるようにいってくださいな」
「おいら、女衒じゃねえ」
お力に訴えられた左京は、そのときふきげんに断ったが、
「だが、元の野郎も、ちょいと身勝手なようだ。女の心が分からなすぎるの」
「そうですよ。あたしだって、なにも独り身じゃない。亭主野郎のほかに、二人も子供がいるンだから、しつっこいことはいいやしない。いえる義理じゃないしね。若い女と遊ぶのは、元さんの勝手、でもひと月に一度か二度は会ってくれたって、いいでしょう？」

「まったくだ」
——据え膳食わねえ元は見上げたものだぜ。
左京は、お力に同情しながら、元次郎の若い気持ちが快かった。
そんな仲だから、お力のところへ顔を出せば二両や三両、いつでもできる。
ねだれば五両や六両も、可能だった。それをせずに、浜町河岸で夜盗をするだけ、
——やっぱり男だ、
と、左京は満足だったのだ。
どこで聞いたのか、元次郎のことを忘れられない身には、
——司直に挙げられた……
情報を、すぐ耳にしたのだろう。取るものも取りあえず、おろくのところに駆けつけてきたのだ。
「なンとかして、救いださなくちゃア……」
真摯な語気は、一時の年増のよろめきではなかった。
場合によっては、体を投げ出しても、という気持ちが、率直だった。
「元ア、果報者だ」
五郎八茶わんに、ついでは飲み、ついでは飲み、左京はいった。
「おちゃらかさないでくださいな、先生」
「なアに、本当のことさ」
男らしい飲みっぷりで、

「元ばっかりじゃねえ、おいらもな」
「あら」
おろくが、しなをつくった。
「ようよう、お安くねえな」
ねこ目が、
「こちとらア、不幸だよオ、柳原の鼻っ欠けにまで、フラれてらア」
「そのうち、いいやつを世話したげるからさ、泣くんじゃない」
おろくは、自分のことをいわれたつもりで、ねこ目の背中を、どしんと、たたいた。
そんなおろくに、ふっと、左京は済まない気がした。
——お浜さん、どうせ一夜きりの仲だと、おいら、あきらめているぜ……
それだけでも幸せな気がするのだ。
「ふざけるだけ、ふざけるがいい、ひょっとすると、今夜が、おれたちも年貢の収めどきだ」
語気が変わっていた。左京の双眸に、激しいものが点じられた。
——お浜さん、今夜なら、楽に死ねるようだなア……
「兄貴」
と、願人坊主の静観が、ぎょろりと、すすけた両眼を光らして、
「やるぜ、愚僧もな」
「おいらだって」
と、ねこ目も腕をたたいた。

「世話をやかせるやつだ」
万五郎の言葉が、面倒くさげに聞こえて、左京がじろりと見た。
「おめえ……行かねえか」
「行くさ」
肩をそびやかして、万五郎はうそぶいた。
「おめえの指図なら、町奉行所だってやるぜ、兄貴」
「有り難うよ、狭山さん」
お力が手を合わせるのを、大言壮語のきらいな左京は、
「有り難迷惑ってやつさ」
「なんだって？」
「つもってもみな」
と、左京は、じっくりとかんで含めるように、いった。
「町奉行所へ斬り込んで、うまくいったためしがあるかえ？　吉原へ暴れこんでゆするのたア、わけが違うぜ」
「そ、そりゃそうだが……」
「しっ」
万五郎の、どもった声をぶった切るように、左京は制した。
聞き耳たてた一座の耳に、泥濘のはねとぶ音が近づいてきた。

4

「――わっちだ、半鐘徳だ」
足音は、格子戸の前でとまった。
「あけてやれ」
と、ねこ目にあごをしゃくって、左京はにやりとした。
「果報は寝て待て、さ……」
「え？」
それには答えず、
「町奉行所へ斬りこみたけりゃ、斬り込むがいい、ご苦労な話になるってことさ」
うでの左京は、松島町のお浜のもとから、番屋をさけて半鐘徳のところへ寄り、それからここへきたのだ。
「うでの兄貴はきいてなさるかえ？」
「どうだった、徳」
「あ、兄貴、いま出るところでさ」
「よし、ご苦労」
言下に、左京はひざを起こした。
「静観、ねこ目、くるか」
「いうまでもねえこって」

「万五、おめえは」
「行くさ」
と、刀をつかんで、
「なるほど、そんな寸法か」
「いまごろ気がついたかえ」
左京の白い歯が、清潔に見えた。
「おろく、帰れるかどうかわからねえ」
「おまえさん！」
「だが、おいらが斬り死にしても、元の野郎だけア、逃がす、きっと逃がすぜ」
と、お力を振り返って、力強くいった。
「先生も、気をつけて……」
「なアに、おいらア、さんざん面白いめを見た。女もかわいがったし、かわいがられもした。が、元ア、これからだ。せいぜいかわいがってやるがいい」
飲みな、と、徳利を差し出されて、おろくは、震えながら一口飲むと、左京は、立ったまま、一息にあけた。
そして、
「帰ったら、たっぷりかわいがってやるぜ」
それは、お浜とむつびあった贖罪を意味していた。
「おさらばだ」

土間へたたきつけた。
徳利は、雨夜に、けたたましい音をたてて、砕け散った。
「行こうぜ」
番傘をばちっと開いて、外へ——
願人坊主の静観は、網代笠に山伏のような六角棒をつき、ねこ目と半鐘徳は、半纏を頭からかぶって。
それぞれ、匕首をのんでいるとみえる。
万五郎が、最後に、のっそりと、立ち上がった。
彼だけは、どこでたかってきたか、饅頭笠に合羽といういでたち。しりをはしょって、はだしになった。
「なるほど、途中でやる分にゃ、こりゃア楽なはずだ……」
感心したような、いまいましいような、愚痴っぽい声が戸口を出かけて振り向いた。
「……おろくねえさんえ」
「え……？」
「おれは、おまえにぞっこんだったンだぜ」
いまさら、何をいいだすのかと、返事も出来ないでいると、
「にらむンじゃねえよ。ひょっとして死んだら心残りだから、遺言してゆくだけだアな」
刀傷のある、鬼瓦のような顔が、いびつにゆがんで——
それも、雨夜に、消えた。

5

雨、雨、雨……

正月だというのに、何を泣くのか、しとどに屋根をぬらして飽きない、江戸の雨。これも春雨か、冷たすぎる雨を浴びて、五人はじっと天水桶の陰や、門松の陰にうずくまっていた。

雨、雨、雨……

「来ねえな?」

傘をかしげて、左京はつぶやいた。

それから、

「なるべく、殺すンじゃねえぞ。てめえが危ねえ時アしかたがねえが、出来るかぎり、斬らねえようにするンだ」

「へえ……」

ねこ目が、不承不承にうなずく。

御牢送りの駕籠を襲うつもりの五人だった。

当時の機構というものは、不備なものだった。

町でつかまった犯罪人は、町奉行所で一応調べた上で伝馬町の牢へ送る。

原則的には正しいが、町奉行所というのは、現今の警察署、警視庁ではない。町奉行の役宅である。

同じ宅地のなかに、表が役所で、奥が私宅、というふうになっている。

だから、南北町奉行所は、更迭の場合はこの役宅を引き継ぐわけだ。

それはいいが、役宅だから牢屋はない。

よく、町奉行所に何日もとめて置くとか、牢屋に入れておくなどと書いてあるが、そんなことはなかった。

役宅だから、牢屋などあるはずのものではない。

一時入れておくところはあるが、格子のついた牢屋ではないから、一晩とめることはできない。といって、町内の番屋や同心だまりも牢屋などない。町奉行所へ連れてゆき、夜中でも、町奉行が起きてくる。

そして、伝馬町の牢送り。むろん、複雑な事件など、簡単には調べられないから、吟味中入牢申し付くる、ということになる。

罪人でも生きているのだから、泊めるとなると食事の支度もいる。その賄いの予算など、町奉行所にないし、といって、牢送りには、町奉行の命令がなければ、牢奉行石出帯刀が受けつけないのだ。

与力ではだめなのだ。

罪人は、まず自身番（番屋）で、調書を同心がとり、それをつけてお白洲。それを町奉行が確認して、やっと牢に入れる。

この段階を踏むために、昼夜の別はない。

牢内も、階級制度のやかましかった時代だから、揚がり屋、百姓牢、無宿牢と分かれていた。

士分、僧侶、神官などは、上下にかかわらず揚がり屋入りである。

だから、森野元次郎も、揚がり屋に入る運命にあった。
「――来たッ」
願人坊主の静観が、痰を吐くような声をだした。
「む……」
左京は、にやりとした。
雨の中に、桐油紙をかぶった囚人駕籠が走ってくる。
同心二人に、岡っ引き四、五人で、駕籠を守ってくるらしい。
御用ぢょうちんが、きつね火のように、ぽーっとかすんで、近づいてくる。
「先のやつは、おれが斬る」
左京が、力強くいった。
「急げ、もうすぐだ」
同心の声が聞こえた。
――彼奴か？
左京は記憶があった。無宿者などに意地の悪い、町奉行所同心水野泰次だ。
――彼奴なら、礼のしようもある……
五間、三間、二間……近寄ってくる。
その面前にずいと、左京は、出た。
「あっ」
先棒が、突んのめりかけてたたらを踏む。

「やい！　なんだ、わりゃア、御用すじだ、このちょうちんが見えねえかッ」
岡っ引きがわめいた。
「見えぬな。見えるのは、ばか面が、ひい、ふう、みい……」
「な、なンだと」
ふわっと、傘が落ちた。
「あ？」
のぞき込んだ岡っ引きが仰天した。昼間なら真っ青になったのが見えたろう。
「う、うでの……」
「しかり、その左京だ」
声とともに、おぼろな灯を切って、白刃がほとばしった。

濡れる肌

1

「狼藉もの！」
同心が狼狽の叫びでちょうちんを捨て、ぱっと飛びすさるや、腰をひねって抜刀した。
その顔前に、
「あたぼうよ」

左京の一刀が、さっと鼻を斬るように、ひらめいた。
「弁天の元をいただきに参上したのさ」
「うぬ！」
横合いから、ちょうちんをたたきつけてくる。
軽く腕を上げて、ひじではね飛ばすや、
「水野！」
と、呼んでいた。
「うでの左京が、相手になってやる」
饅頭笠に雨合羽、どれが水野同心か分からなかったのだ。
返事はなかった。
いな、どっと一度に、両側の門松の陰から、願人坊主やねこ目や、半鐘徳などが、襲いかかっていったのである。
ちょうちんが飛び、笠が飛ぶ。
たちまち灯の消えた中に、怒号と叫喚と、悲鳴が起こった。
「どこだ、水野」
と、左京は、駕籠を背にして、
「こい！　不浄役人の、汚ねえ皮をはいで、かかってこい」
無言の刀が、声をたよりに落ちてきた。
憂然と、これを払いのけて、

「うぬかッ」
猛然と、左京は攻勢に出た。
刃は刃をかみ、目を焼くように、火花が散る。
鉄の焼けるにおいが、雨気の中に、一瞬、鼻を刺した。
「囚人を！」
「駕籠を……」
同心や岡っ引きは、その気がかりだけでも、闘志は鈍る。
争いのうちに、左京は脇差を鞘ごと抜いて、
「元、早く！」
と、突っ込んだ。
桐油紙をはねのけると、下は唐丸駕籠。ほかにもう二に割竹を竹矢来のように組んで、すっぽりかぶせてあるから、ぬっと、突っ込んだ。
「ありがてえ！」
元次郎は、左京の声を聞いたときから、胸を躍らせて、待っていた。
脇差を抜き取るや、ぶっつり押し切りに切りあけて、外へ転がり出た。
「あっ、囚人が」
と、役所駕昇が気がついて、つかみかかるのを、
「しゃらくせえやい」
片ひざついたまま、向こう脛をなぎ払う。

サーッと血しぶきが顔へかかるのを、ぺろっと手のひらでふいて、
「兄貴！」
と、解放された喜びを声にこめて、
「出たぜ、兄貴、うでの兄貴」
「おう」
返事があった。
激しく、二人の同心を相手に斬り結びながら、
「みんな、引き揚げろ」
願人坊主も、六角棒で、一人をたたき伏せたところだった。
岡っ引きと、取っ組み合いになっていたねこ目、髷をつかんで水月をけたくり、十手を奪いとって、
「もらったぜ」
顔面に、どろをひとつかみたたきつけるや、横っ飛びに走り出す。
半鐘徳は、半鐘どろぼうとあだ名の、六尺あまりの男だ。
逃げるとなると、コンパスが長いから、これも速い。
万五郎だけは、こすずるくたちまわるつもりか、軒下に身をひそめて形勢を見ていたが、このありさまだから、一目散に走り出した。
——みんな、逃げたな……
左京は、ほくそえんで、

「ゆくぞ、不浄役人！」
と、斬り込んだ。

2

雨は降りしぶいている。
もう時刻は、子の刻（零時）に近い。
森閑とした大伝馬町、鉄砲町の辻も、さすがに白刃の響きと罵声と絶叫（役人側は、意識して声を張りあげたろうし）に、眠りもさまされたのであろう、そちこちの店で、物音が聞こえ、自身番からも走ってくる影が見えた。
——元次郎さえ、逃れたなら……
無益の殺生するまでもない。
同心の刀をあしらいながら、水野泰次への一刀を見舞いたい欲望に駆られていたが、どちらが水野同心か、わからなかった。
「ちっ、またの日に」
機を見て、するりと刀をひくと、左京は身を翻した。
「待てい」
「逃さぬ！」
水野の声を、後者と聞いた背に剣気を知るや、身を沈めざまに峰を返して、横に払った一刀。
先の同心が、腿をうたれて、どっと前へのめる。

「来い！　水野」
水野同心は、追いすがった勢いをとめることもならず、刀を振りかぶり、躍り込んできた。
がっきと刃がかみあった。
「ゆくか、地獄へ」
左京が、すごい声でいった。
あきらかに、相手は恐怖していた。腕が力を出しきって、震えている。
ずるっと踵が、泥濘にめりこむ。
「念仏を唱えろ」
「な、なに！」
「うぬが、地獄へ送った者の返礼だ、受けろ」
一刀は、鍔がらみに敵の刀をはね上げた。
「あっ」
両手にしびれを感じ、どどっとさがって、水野同心はよろめくや、しりもちをついた。
その頭上に、必殺の剣が落ちようとした瞬間、
「こンやつがッ」
鴉丸か、番太郎かめくらへびの猪勇で、棒で殴りかかってきたやつがある。
心得がなくとも、六尺棒でぶン殴られてはたまったものではない。
間一髪に左京はとびのくや、流れた棒を、すばっと半ばから切り落とした。
その間に水野同心は、どろからはい出ていた。

灯のない辻は、真のやみである。雨は、惜しみなく降りそそいでいるし、岡っ引きや番太郎のわめきたてる音が、ますます敵の居どころを隠した。
下司でも、それくらいの知恵は働くのか、
「起きろ、起きろ」
「火事だ」
「どろぼうだ」
わめいて、近所中の大戸をたたいてまわっているやつすら、いた。
――いまはこれまで……
左京は、あきらめた。
――また、機会はあろう……
元次郎が逃げのびたことだけでも、よし、とせねばならぬのだ。
「水野、うすぎたねえ首は、こんど会うまであずけておくぜ」
どことも知れぬひきょう者へ、そう叫んで、左京は走り出した。
くぐりを開けて、
「なンじゃい、正月から騒々しい」
と、外をのぞいた男が、表を駆けぬける左京の血刀で、
「わあっ」
と、土間に、ひっくり返る。
左京は、風のように、走った。

雨はやまない。しめ飾りと門松にきよめられた辻を、どろどろにひっかきまわした無法者たちは、龕燈ちょうちんや捕り物道具が集まってきたときは、影もなかった。

3

正月十五日の、初春狂言幕あきから芝居騒動、三河屋の捕り物、はては囚人駕籠破りと——派手な騒ぎがあったわりには、あと、穏やかで大過なかった。

それというのも、張本人の弁天元次郎、うでの左京の二人の行方が、皆目知れなかった故もある。

地に潜ったか、空に飛び去ったか、

「まだ、江戸にいるはず」

と、にらんでいる町奉行所では、躍気になって手を尽くしたが、手がかりも得られなかった。

「二人に、かかわりのあるやつは、片っ端から取り調べい」

町奉行与屋正方の厳命で、与力同心は奔走した。

ごふく茶屋のおろくや、お力も、無関係ではありえなかったし、菊五郎まで取り調べられたが、むろん、

「一向に存じませぬ」

で、通った。

菊五郎は酷似しているからと、綿絵を土台にした上で、役所抱え絵師に人相書き作成のモデルにさせられたのは、やむをえない。

同心たちが、血眼で市中をかぎまわっているとき、弁天の元次郎は、うすあばたの顔ものんびりと、二十日正月の雑煮もちを食っていた。

わからないのも道理、深川木場なる市川海老蔵の隠宅である。

今日も、芝居町からもどってきた白猿が、

「元さん、ついそこで、大変なやつと会いましたよ」

と、息をはずませて、

「それがさ、薬研堀の与七さ」

「げっ、あン野郎が……」

「なにね、ここと目星をつけたンじゃあるまい。この先に、名医の芳庵先生がおいでじゃから、治療にいったのだろうが、いやもう、ふた目とは見られない、すごい顔つきさ」

元次郎、自分で手にかけていながら、

「そいつア、二度とお目にぶらさがりたくねえもンだ」

「むこうは、草の根わけても、という気持ちらしいね、与七ばかりじゃない、町方一統がその心組みだから、こりゃ、いよいよ当分、表も歩けねえ」

「済まねえ、お世話をかけちまって……」

「いいえさ、世話なンて、お柳がするこった。あたしゃ、話し相手が出来て、うれしいようなもンだが、お前さんが若い身空で、退屈だろうというのさ」

「早く旅立ちたいンですが、どうも、そんなあんばいじゃア」

「まア、いいやな。菊五郎も、そろそろわらじを履くだろうが、そのときは、一座にまぎれ込ん

で、関所を抜けれるよう、なンとか相談しましょうよ」
「有り難うござンす……」
「礼は、お柳にいっておくれ」
と、白猿は、目を細めてお柳を見る。
「まア、礼なンて……」
お柳の耳が、ぱっと、紅を塗ったように、赤らんだ。
左京が菊五郎に頼み、菊五郎の口ききで、ここにかくまってもらった。
若い者同士だけに、お柳と元次郎は、仲良くなっていた。
——役者は、死ぬまで色気を失っちゃならねえ——
と、口癖のようにいうものの、もう老年の白猿は、さすがに老い込んで、
「お飾りをくぐるごとに、あの方も弱くなるやね」
と、今日も、だれかれと笑い興じてきたほどで、もう、肉体の衰えは、はっきりと自覚していた。
それだけに、お柳への気持ちも、穏やかなサバサバしたものになってきている。
その夜も、
「あたしは、細川さまへ碁にいってくるから、後を用心してな」
と、日没に出ていくと、お柳は、すえぶろの支度を始めた。
「銭湯と違って、さっぱりしないだろうけれど、つかわないよりましじゃないかしら」
「へえ、願ったりだ、ぜいたくはいわねえよ、お柳さん」

4

町家でのふろは、禁じられていた。
出火をおもんばかって、浴室の建築は武家屋敷か町屋敷では、よほどの広さと設備がなければ許されなかったのである。
町人は銭湯へゆくもの、とされていたのだ。
それがいやなら行水。
夏場なら行水もよいが、寒い時は困る。
で、大店では、すえぶろを持った。ふろというのもおこがましいほどの、まア行水みたいなものだ。
勝手の土間か板の間を、古びょうぶかついたてで囲って、普通の盥よりはやや深いやつに湯を入れる。
銭湯にゆくのが恥ずかしい年ごろの娘や、嫁や、そして病人など、そこで垢をぬぐったものだ。
元次郎も、外へ出られないから、お柳の世話でふろをつかう。
もっとも、
「すまねえな、おいらのために……」
と、柄になく恐縮すると、
「なアに、あたしのところじゃ、ちょいちょいやりますのさ」
と、白猿老人は、にやりとしたものだ。

その時は、意味が分からなかったが、裸になって、湯を肌にかけているとき、
——あれっ、そうすると……
合点がいった。
——あのじじいめ……
腹だたしいような気持ちだ。世話になっていて腹を立てるのは、義理にはずれるようだが、
——すけべえじじいめ、お柳を裸にして、人の見ねえところで、とっくりとなでまわしていやがったのか……
ふと、元次郎は、自分がお柳の裸を見ているような気がした。
「ちくしょう！」
思わずつぶやいて、ばしゃっと手ぬぐいで、盥のふちをひっぱたいた。
「あら……」
と、お柳が、古びょうぶからのぞいて、
「ぬるかったかしら……」
「い、いンや、ぬるいこたアねえ、いい気持ちでさ」
「そう、それならいいけれど」
小桶に、また湯をたして、
「流してあげましょ」
すそをくるりとまくると、目にしみるような緋縮緬。
元次郎、どきりとした。

考えていることが、ことだったから、あわてた。
「い、いらねえ」
「え?」
「いや、その、結構でござんす」
「なにさ、変なひと」
けらけら笑って、お柳はぬか袋を取った。
「ねえ……」
「ええ?」
「あんた、いくつ」
「あ、あ、おいら、十と七歳だアな」
元次郎、胸をそらした。
「じゃア、あたしと、同い年ねえ」
「へえ、おいらのほうが一つ上かと思った」
「上手ね、あんた」
びしゃりと、背中をたたかれた。
「へ?」
「あんた……」
背中の一部が、急に熱くなった。お柳のくちびるが、そこに迫っていたのだ。
と思うと、やわらかいほおが、ぴたりと背中にくっつき、元次郎は、女の手が胸に回ったのを

知った。

「お、お柳さん……」

「元さん、あたし」

あとは、この腕に聞いてくれと、しなやかな両の腕が、ぴたりと後ろから、元次郎を抱きしめているのだった。

「いけねえ、いけねえよ……」

「なぜ?」

と、聞き返すお柳のほうが、この若いやくざ者よりも大胆だった。

「おじいちゃんのザル碁は、夜半までかかるンだから、だから……」

「だからって、いけねえやな」

裸なのだ。

元次郎は、下半身を湯に沈めたまま、どぎまぎしていた。女の手が、胸を抱いているうちはまだいいが、下に落ちそうでならなかった。

「そんな、おめえ、いけねえやな」

「だから、なぜってのよ」

「おめえ……お世話になっているうちの、ナニと、そんな義理知らずなまねは」

「だって」

と、腕に力がこもり、

「元さん、あたしをきらい?」

「きらいなもンか」

「だったら、いいじゃないのさ」

「さ、そいつが、おめえ……」

「あたしが好きだってのに、ねえ、ここまで女にいわせて、恥をかかせるつもりかえ」

ぴたりと、お柳は、背中にほおをくっつけたままだった。

十七の娘が、なんという技巧を知っていることか、後ろから抱きしめた両手の指が、いたずらっぽく、元次郎の乳首をなぶるのだ。

——冗談じゃねえや、男と女と反対だアな……

見かけのおとなしいわりに、お柳の体はすばらしい成熟を見せていた。

「離してくンな、お柳さん」

「いやッ、離さない、好きなンだもの」

「……」

「おじいちゃんのぶよぶよした肌は、もういやなのさ。ねえ、お願いだから、あんた、あたしを抱いて!」

この若い肌で、若い力で……と、お柳の腕は、ますます、力がこもった。

元次郎は、その手を握って、

「お柳さん!」

着物がぬれるじゃねえか、そういおうとしながら、言葉は口に出なかった。振り返って、ひたと目が合った。

情炎のひとみは、着物なンかぬれたってかまやしない、あんたの愛情がほしいのさ、と、思いのたけを訴えているではないか——

見果てぬ夢

1

——菊五郎になんといって、わびたらいいかしら……

あの夜の過失を、菊五郎が知らないだけに、お浜の胸は、日ごと夜ごと、痛んだ。苦しかった。

だれにも相談できず、独り責めさいなまれることも、

——自業自得なのだわ……

と、あきらめる。

あのとき、声をあげれば、あげられた。

逃れることだって、出来たはずだ。なのに、うでの左京の肉体に負けてしまった。

——あたしは菊五郎の妻……

江戸妻、かもしれない。けれど、不貞な妻よりは立派だと、自分でも信じ、ひそかに他にも誇っていたのだ。

その誇りが、むざんに崩れてしまった。

一時の官能の叫びに負けたのだ。

——死にたい……

と、すら、思う。

だが、一方では、また、

——会いたい、もう一度……

切なく左京を恋い慕っている自分に、はっとするのだった。

あれから、左京からの便りは二度きた。

最初は、やくざ者らしい目つきの悪いのが手紙を持ってきた。

「亀戸村からきましたが……」

「亀戸？」

知り人はない。

すると、その男は、ねずみのような目でじろりと辺りを見まわして、

「高木左京、さまからの、ことづかりで」

「あ、左京さま……」

息のつまる思いで、手を出しかけたが、

「いけません」

と、身をひいた。

「なんですって？」

「そのお手紙、受け取れないンです。お持ち帰りになってくださいまし」

「え？　妙なことを。おまはんが、お浜、さん、だろう、おまはんに左京のだんなが……」
「だから、ですから、いけないンです、あたし……」
お浜は、青ざめて、全身がわなわなしていた。
かんざしが落ちるような気がした。思わず髪に手をやって、
——ああ、質にまげたのだっけ……
と、気がついたほど、動転していた。
男は、妙な顔をしていたが、
「そうですかい、じゃア、そのとおり、左京のだんなにお伝えしまさ」
と、捨てぜりふめいた言葉をのこして、帰っていった。
その次にきたのは、村の老人が、公事（訴訟事）で江戸へ出てきた、というかっこうだった。
お浜は、前回と同じように拒んだ。
「それから……」
と、去りかける老人の背に、必死に叫んだ。
「もうこれきりになすって……いいえ、あたくしのことは、お忘れになってくださるように、と……」
そう叫んだお浜が、二十四日の天満宮うそかえに、亀戸まで出かけたのは、どういう気持ちなのだろう。
左京のことなど、念頭にない、といえばうそになる。
うそかえで忘れる、というのか。

亀戸のどこ、とは聞いていないが、亀戸村ということだけは、耳に焼きついていた。
その、会いたくない人、のいる村の祭りに出かけていく女心。
会いたくない、というのこそ、うそなのではないか。
——会えるかもしれない……
そう思いながら、ただ、いえることは、お浜が不貞な欲望を抱いてはいなかったことだ。
少なくとも、意識の上では。
——よそながら、会えたら……
その程度の、淡いおもい。
それも、偶然のすれ違いで満足しようとする、かなしい女心であった。

2

うそかえ、というのは、筑紫の菅公様で有名な太宰府が濫觴だ。
木彫りの鷽を売っているが、これをそでに入れて、取り代えるのである。悪事を転じて善事に代える、という願いから出たもので、亀戸天満宮で始められた年月については諸説があるが、当日はすごくにぎわったものだ。
江戸っ子は遊び好きだった。太平の民の常であるが、史記にいう、終身逸楽富貴、累世不絶、というやつだ。
宵越しの銭は残さぬという享楽思想にしては、今日から見ると、娯楽機関が少なかった。
神事も仏事も、したがって、かなり慰安的、娯楽的要素がある。坊主も神官もそのつもりで

サービスしたものだ。
それはまた、亀戸天満宮や目黒不動や、王子権現や、そんな遠くまで足を運んで、一種のレクリエーションでもあったわけである。
お浜は——
独りで亀戸までゆくのは、はじめてだった。
——会えるかもしれない……
それを願いながら、彼女は、紫の頭巾で面を隠した。
いかにも早春らしい晴れた日で、人出は多かった。
社前の梅と桃が、競うようにほほえんで、薫風に吹かれた花片が、時々、雪のように舞った。
頭巾をしているせいもあって、ほおが上気していた。
群集にもまれ押され、流されてゆきながら、お浜は、
——頭巾を脱ごうかしら……
と、思った。
丁度、太鼓橋を渡りかけたところだった。
不意に、お浜は指をつかまれた。
「あっ！」
声を上げて、振り返った。
「——おいらだ」
頭巾をかぶった武士。

涼しい目が、笑っている。
握った指に、思いをこめて、
「こっちだ」
と、武士は先に立った。
——ああ、左京さま……
この混雑の中なのに、頭巾をかぶっているのに、どうしてわかったのか？
お浜は仰天して、何といっていいかわからなかった。
とっさだったし、拒む言葉も、思いつかないのだ。
左京は、人込みを器用にかき分けて、ずんずん、彼女をひきずるようにしていく。
「あ、待って」
「ん？　どうした、草履をとられたかえ」
とんちゃくなしだ。
ようやく人込みから抜けて、紅梅の老樹のそばまで出た。
お浜は、じっとりと汗ばんでいた。
「あの……」
「あいさつはぬきにしようや。毎日、思い詰めていたンだ、さ、ゆこう」
どこへ？
その問いを、無意味なものととったような左京の態度である。
人が、目をそばだてて怪しむのも気にかけず（もっとも、これが左京の流儀なのだが）ずんず

ん手をひいて、裏鳥居をくぐって、裏参道へ出てしまった。
「どこへ参りますの」
拒みたい。が、このまま、どこへでも引きずっていかれたい。
相反する気持ちがうず巻いて、お浜は、はっはっとあえいでいた。
あぜ道へおりて二町ばかりくると、百姓家とも隠宅ともつかぬ、妙な構えの家があった。
築地塀のうちに、鶏が十羽ばかり餌をあさっていた。
「軍鶏助」
と、左京は呼んだ。
おう、と、どこかで返事が聞こえる。万事、江戸市中とは違って、のんびりしているようだ。
左京が頭巾を脱いで、汗をぬぐいながら、
「そちも、脱ぐがいい」
いっているうちに、あるじなのであろう、ずんぐりむっくりの、たぬきのような男がぞろりと着流しで、八反の丹前をひっかけ、たばこ盆をさげて、出てきた。
「おう、客人だ、変な野郎があとをつけているといけねえ、用心してくンな」
「つけられたかえ」
「うむ、ちょっと、そんな気がしただけだが」

3

「会いたかった！」

すべてのおもいを、その一語にこめて、左京はお浜を抱いた。
お浜は、身をひこうとしたが、男の強い力は、それを許さなかった。
軽々と抱き寄せられ、激しく口を吸われると、身も心も中天に吹っ飛んで、男の舌を甘受した。
いつか、その貞淑な女の手は、このやくざの背を抱いている。いつかの夜の、激しい炎が、また燃え上がろうとしていた。
八畳の離れだった。
裏は生籬が近く、そのむこうは広々とした田園で、雑木林がこんもりと見えたり、川水がキラキラ光っているのも、春の午後の、のどかな田園だった。
春信のひそかごとの絵で見たのとは違う。
絵は、あくまで絵そらごとか。あのように美しい図柄になっているかどうか、白昼男女がこのように抱きあうこと自体が、すでに、お浜にしみついた既成道徳に反するものだった。
にもかかわらず、この甘美な陶酔は何だろう。
くちびるから、血を吹くかと思われるばかりの、激しい野獣的なくちづけ。そして、骨もひしげるばかりの抱擁。
「お浜」
やっと、口をはなして、左京はいった。
「もう放さないぞ」
「……左京さま、あたくしも……」
男のにおいの強烈な襟に、顔をうずめるようにして、お浜はこたえた。

「おそばに、いつまでも……」
「放さぬ」
「でも……それは、かないませぬ」
「かまわぬ、そちは、おれのものだ」
「いいえ、ふたりがこうなっても、世間というものが……」
「世間がなンだ。この亀戸村なら、だれにも知られぬ、二人っきりで……」
「でも……」
「いいのだ。軍鶏助、というて、あの男、軍鶏を育ててはばくちさせる。一試合に十金二十金平気で賭ける。奇妙に負けたことがない。軍鶏の育て方が巧みなのだな。だから、おれは、ここにいれば、酒にも、着るものにも事欠かぬ」
男はそれでも暮らせる。
だが、女は——
しかし、いまの左京に、そうしたことを説伏するのは、徒労でしかあるまい。
「放さぬと申したら、放さぬのだ」
ぐいと荒っぽくあごをつまんで、かみつくような勢いで、くちびるを落とすのだ。
お浜の腰は、大きな竹刀ダコのある手でつかまれていた。
豊かに肉のみちた腰が、いきいきと弾んで何かを待っている。期待におののいている。
「お浜、これ以上、いわせるな」
左京の手は、帯にかかっていた。

白昼、八つ（二時）下がりの日が、三尺と離れぬところに、柔らかく差していた。
男女は、太陽も恐れず、狂った。この世の快楽に、全身でぶつかっていく、本然の姿だった。
獣の荒々しさ。むきだしの美しさ。
健康な性の躍動だった。二人は生きている。この時間に、生きている。ぎりぎりなまでに人生をつかんでいた。
うそかえの騒音が、わーっと、濁った低い音となって聞こえてくる。

揚げひばり

1

「——これっきり、ね、もう、これっきり」
お浜は、小指を出した。
いつか、障子は、水色にたそがれて、温度も下がっていた。
痴夢に狂ったあと、お浜は帯を締め直し、放心したように座って、左京の髪を愛撫していたのだ。
「なンだ、そりゃア」
「約束してくださいまし」
「なんの？」

「もう、会わないと」
「いやなこった」
と、わざと、つっけんどんに、左京はいった。
「おめえのようないい女ア、広いお江戸に二人といねえからなア」
フッと、小指を吹き飛ばすようにして、
「な、お浜、帰らねえでくンな、な、な……」
「そりゃア、無理というもの……」
菊五郎が、やがてはもどってくる。
それまでに、もどっていないと——律儀なお浜は、後ろ髪を引かれる思いで、立ち上がった。
「ね、怒らないで……」
「怒りゃしねえよ」
「じゃア、笑って、送ってくださいましな」
「ふん、垢離場の木偶人形じゃあるめいし、器用に笑えるかよ」
そんな左京のあくたれが、お浜を困らせるのだ。
「そんな風にいわれると、あたくし帰れないじゃありませんか」
「だから、居なってエのよ」
「でも……」
「じゃアけえんな」
悪気ではないと知っていても、酷な言葉だった。

お浜の目に、薄く涙がにじんだ。
「あたくし……」
と、きちんと両手をついて、
「もう、これきり、お目にかかりませぬ」
「お浜！」
「ほんとうに、お会いできてうれしゅうございました。あなたさまのことは、忘れません。あたくしたち、これ以上会っていたら……取り返しのつかないことになるンです」
「お浜、どうしても、おめえ」
「ごめんくださいまし、お達者で」
お浜は、あふれる涙をひしと耐えて、小走りに外へ出た。
——追ってくるかしら？
と、思ったが、さすがに左京も武士。
そこまで、未練なまねは出来なかった。
「——おや、お帰りかえ？」
鶏籠の前へしゃがんで、軍鶏のつめを調べていた助左が、たぬきづらをあげて見た。
お浜は、左京に抱かれて、うめいた声を聞かれはしなかったろうか、と、それが恥ずかしく、顔が上げられなかった。
軍鶏助ばかりではなく、だれにも——人に会いたくなかった。
亀戸天神には入らず、天神さまの森沿いの小道を回って、竹やぶの横から大道へ出ようとした。

すると、そこの切り株に腰かけて、たばこを吸っていた男が、
「いま、お済みかね、え?」
毒のある言葉で、お浜の足をとめた。
お浜は、棒立ちになってしまった。
「ははは、なにも驚くこたアないだろう」
どす黒く笑って、たばこをゆっくりとしまったのは、同心の水野泰次ではないか。
「どうも怪しいと思って、ガンをつけていたンだ、跡をつけられているとも知らねえで、軍鶏助の家で、巫山の夢を見たか」
——あとをつけられて……
左京が、らしい、といったことに、思い当たった。
——ああ、いけないことをした。
この男を、日本橋から、案内してきたようなものではないか。
「そうか」
と、水野同心は、独りうなずいて、
「軍鶏助の家に、彼奴め隠れていたのか。そうとわかれば、獄門台に首を乗せるなア、二、三日のうちだ」
お浜は、ぞっとした。
「そうと分かれば、急ぐこたアねえ、まず、こっちで、と……」
町方特有の、ぶしつけでしねっこい目つきで、のぞき込んだのである。

「菊五郎がほれただけあって、いい女だ」
お浜は、手をつかまれた。

2

「お浜、といったな……」
「何をなさいます」
「咎人を捕まえたのさ」
と、水野同心は、くちびるを曲げ、臭い息を吹きつけた。
「放してください」
「咎人をかね?」
「あたくし……なにも、悪いことは」
「しましたよ、へっへっ、たったいまね。え、菊五郎に話しただけでも、五両やそこらにはなる話さ。間男は七両二分、はははは、なアお浜。おめえ、おれを甘く見ちゃいけねえやな」
「……」
「高木左京は、お尋ね人だ。彼奴の隠れ場所を聞かれたなア、いつだったっけな」
「あたくし……ほんとうに知らなかったンです」
「うそつけ!」
低いが、ずしりと、腹にひびく声だった。
いつも小悪党を、威圧している声だった。

「あの時知らねえで、今日知ったかね」
と、同心の声は、妙にやさしくなった。と、それだけに、ねっとりとからんでくる。
「そんなうそは通りませんよ」
「……」
「通らないね」
「でも、あたくし」
「通りっこないね」
同心の声は一層、ねこなで声に皮肉になった。
と、思うと、懐中から十手を取り出した。
まるで、手品師のような、素早い動作だった。
「男女の口説や、借金のごまかしじゃねえンだ。お白洲だぞ、お奉行所のお白洲で、そんな間の抜けたうそをつく女ア、素っ裸にひんむいて、百たたきか、そいつアちょいとムゴイから、まず股を開いて、四つンばいで、お白洲を一周り……」
自分の言葉の効果が充分に上がったと見て、水野同心は声をひそめた。
「ちょいと、来な」
「え?」
「くるンだ、お上の御用だ」
もう暗い。うそかえ神事は二十四、二十五両日で、だから、前日だったら夜も遅いが、もう、香具師の中には、帰り支度を始めている者もある。

人通りも、少なくなるばかりだった。
水野同心が、連行しようとするのは、道から少しはずれた竹やぶの中だった。
「どこに行くンです」
「いいから、こい。お白洲で素っ裸にむかれてえか」
「あ、いやです。そんなところで」
「来い!」
腕ずくでも、と、躍りかかった。
背は低いが、同心を二十年もつとめて、くぐぬき、とあだ名されているほどの男だ。
お浜は、竹やぶのなかに、ひきずり込まれた。
まだ、幸いと、たけのこも生えてはいない。
「な、ちょいと楽しませな、あとで悪いようにはしねえ、え? 町方が後ろ盾なら、大手を振って、歩けるンだ、な」
同心の手は、襟からすべり込んだ。
胸のふくらみをやんわりつかんで、
「……いい肌をしているぜ。な、ちょいと、ちょいとの辛抱だ、いやさ、おめえだって、悪いはずはあるめいがの」
かたくそろえた脚を開かせようと手が、すそをかきたてた。
「な、お浜、声をたてるンじゃねえぜ、お白洲だぜ」
と、片足を入れた。

そのせつな、お浜の口から、絶叫がほとばしりでた。
「左京さまッ」

3

「左京が！」
あの太刀風をなんじょう忘れえよう。
げっとのどを鳴らせて、水野同心は、お浜の体から、飛びのいていた。
竹やぶの中に、人影が入ってきていた。
「――きさまか」
左京は、ゆっくりと近づいてきた。
「お浜が、忘れ物しなければ、ふたりともがやられるところだったな」
木彫りの鳳だった。
左京は、左手で、お浜へ渡す間も、同心から目を放さなかった。
「水野」
といった。
「な、なに！」
「今夜こそ、じゃまの入らぬ勝負、決着をつけようぜ」
「く、くそっ」
抜こう、とした。

が、その手が懐中へ突っ込まれたと思うと、呼び子を取り出した。
笹の葉もれの、まだらな星あかりに、きらりと光ったのだ。
「ひきょう者がッ」
左京の腰から、鮮やかな居合い。
ふとい孟宗のあいだに、刀は鞘走った。
だっと逃げながら、水野も抜いた。わくら葉が、足の下でばねのように弾んだ。
「ゆくぞ、不浄役人」
言下に、一閃した。
かっ！　三寸ほどもある竹が、すぱっと切られて、余光は水野の胸へ走る。
一寸の差で、身をひねり逃れるや、ゆらめいて倒れかかる竹を、鹿砦に、恥も外聞もなく逃げ出した。
「待てェ」
切らねば！　この機をはずしては！
江戸町奉行の同心が、亀戸村にきているのだ。ここはもう管轄違いになる。
呼び子を吹けば人は集まるかもしれぬが、彼の同僚や輩下ではないのだ。
――お浜の肌を、なぶっていた！
その怒りだけでも、すさまじいものだった。
「うぬ、逃ぐるなッ」
じゃまな竹は、右に左に、

ばしっ　ばしっ　と、斬り払いながら、追った。
竹やぶは、たちまち尽きた。
水野同心の体は、竹やぶの端から三尺ばかり下の田んぼに転落した。
転落しながら、さすがにさっと、右脚を立てたのは、続いて飛び降りる敵への備えである。
相当の名人でも、このまま飛び降りれば、もろ脚を払われるか、腰のつがいを斬り放されるは必定、と、見た。
その一瞬のちゅうちょが、水野を立ち直らせたのである。
刀をひいて、田んぼを斜めに横切る。
その先は、また小高く、墓地になっている。
「かえせ！」
叫ぶや、左京は、懐中の匕首を抜き投げに、手裏剣にとばした。
「あっ！」
惜しくも、肩をかすめたのである。
が、それが、逃亡を阻んだ。よろめいてたたらを踏むや、ぐっと立ち直りざまに、
「食らえ！」
腰に走ってきた一刀を、ぱっと足をちぢめて、左京は飛んだ。
同時に、右手の太刀が、上から下へたたきつけるような唐竹割りに斬った。
「ううううう」
水野同心は、からくも影をないだ一刀を返そうとしたが、半ばでぽろりと、刀が手から落ち、

その後を追うように、ぐらっと大きくよろめいて、どっと棒倒しに倒れた。
「斬った、とうとう……」
元次郎の無念をも切っ先にこめて、とどめを刺すと、左京は振り返った。
竹やぶのところに、お浜が立っていた。
星のあかりに、お浜の姿は、いいようもなく、臈たけた美しさで、左京の目を奪った。
「お浜！」
——放さぬ、もう放さぬ！
ずかずか大股に近寄ると、左京は刀を捨て、お浜を抱き寄せた。
「ああ」
と、お浜はうめき、返り血の胸にしがみついてきた。
「もどりませぬ、浜は、もどりませぬ」
「おう、やらねえとも」
ぐっと抱いて——はじめて、お浜のすべてが自分のものになる、という喜びのなかに、菊五郎を裏切る寂寥が、ちくりと胸を刺したが、
——菊五郎にゃ、京に女房があるンだ。それに、今日明日に旅立つ身……
後はただ、燃える肌と、火のくちびるがあった。左京は、かむさるようにくちづけすると、抱いたまま、そっと、お浜を横たえた。あらたに、ふつふつと、五体にたぎってくる情熱は、とめるすべもない。
——急ぐことはないのだ、もう……

と、心にいい聞かせて、

「お浜、これで江戸も落ち着くってものさ」

「え？」

「二人菊五郎が、一人になって、もう間違われることもあるめえからな」

参詣人だろう、ちょうちんが三つ四つ、遠いあぜ道を連なっていった。

きつねの嫁入りは秋の雨夜か、いまの二人には幸せな花嫁ぎょうちんとも見えた、春の宵である。

0193—012231—3066

春陽文庫

江戸の恋とんび

昭和 54年 8月 5日 第1刷発行
昭和 57年 6月 5日 第3刷発行

著者 早乙女貢
発行者 和田欣之介
印刷 城北印刷製本センター
発行所 株式会社 春陽堂書店
東京都中央区日本橋三丁目四番一六号
電話（二七一）〇〇五一番
振替東京 〇一六一七番

1979©

乱丁、落丁のものは本社、またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

山手樹一郎長編全集　全84巻

桃太郎侍 山手樹一郎
恋風街道 山手樹一郎
恋天狗 山手樹一郎
華山と長英 山手樹一郎
又四郎行状記(上) 山手樹一郎
又四郎行状記(下) 山手樹一郎
夢介千両みやげ 山手樹一郎
江戸名物からす堂(一) 山手樹一郎
江戸名物からす堂(二) 山手樹一郎
江戸名物からす堂(三) 山手樹一郎
江戸名物からす堂(四) 山手樹一郎
新編八犬伝 山手樹一郎
鳶のぼんくら松 山手樹一郎
遠山の金さん 山手樹一郎
花笠浪太郎 山手樹一郎
はだか大名 山手樹一郎
ぼんくら天狗 山手樹一郎
朝焼け富士 山手樹一郎
浪人横丁 山手樹一郎
素浪人日和 山手樹一郎
青空浪人 山手樹一郎
野ざらし姫 山手樹一郎
鉄火奉行 山手樹一郎
巷説荒木又右衛門 山手樹一郎
江戸の虹 山手樹一郎
恋染め笠 山手樹一郎
青春の風 山手樹一郎
浪人若殿 山手樹一郎
春秋あばれ獅子 山手樹一郎
青雲の鬼 山手樹一郎
青年安兵衛 山手樹一郎
江戸群盗記 山手樹一郎
巷説水戸黄門 山手樹一郎
変化大名 山手樹一郎
江戸ざくら金四郎 山手樹一郎
女人の砦 山手樹一郎
若殿ばんざい 山手樹一郎
紅顔夜叉 山手樹一郎
浪人八景 山手樹一郎
朝晴れ鷹 山手樹一郎
わんぱく公子 山手樹一郎
江戸の朝風 山手樹一郎
江戸の暴れん坊 山手樹一郎
青春の風 山手樹一郎
浪人若殿 山手樹一郎
天保紅小判 山手樹一郎
浪人市場(一) 山手樹一郎
浪人市場(二) 山手樹一郎
浪人市場(三) 山手樹一郎
浪人市場(四) 山手樹一郎
八幡鳩九郎(上) 山手樹一郎
八幡鳩九郎(下) 山手樹一郎
鶴姫やくざ帖 山手樹一郎

天保うき世硯 山手樹一郎
天の火柱 山手樹一郎
隠密三国志 山手樹一郎
江戸へ百七十里 山手樹一郎
江戸の顔役 山手樹一郎
侍の灯(上) 山手樹一郎
侍の灯(下) 山手樹一郎
お助け河岸 山手樹一郎
たのまれ源八(一) 山手樹一郎
たのまれ源八(二) 山手樹一郎
千石鶴(上) 山手樹一郎
千石鶴(下) 山手樹一郎
放れ鷹日記 山手樹一郎
おすねと狂介 山手樹一郎
青雲燃える(上) 山手樹一郎
青雲燃える(下) 山手樹一郎
さむらい読本 山手樹一郎
三百六十五日 山手樹一郎
素浪人案内(上) 山手樹一郎
素浪人案内(下) 山手樹一郎
江戸に夢あり 山手樹一郎
さむらい根性(上) 山手樹一郎
さむらい根性(下) 山手樹一郎
さむらい山脈 山手樹一郎
殿さま浪人 山手樹一郎
虹に立つ侍(上) 山手樹一郎
虹に立つ侍(下) 山手樹一郎
男の星座 山手樹一郎
江戸隠密帖 山手樹一郎
錦の旗風 山手樹一郎
少年の虹 山手樹一郎
天の火山 手樹一郎
恋の酒 山手樹一郎
夕立の女山 手樹一郎
夜の花道 山手樹一郎
浪人まつり 山手樹一郎
槍一筋 山手樹一郎
秋しぐれ 山手樹一郎
下郎の夢 山手樹一郎
鍔鳴浪人 角田喜久雄
どくろ銭 角田喜久雄
風雲将棋谷 角田喜久雄
妖棋伝 角田喜久雄
将棋大名 角田喜久雄

山手樹一郎短編全集　全12巻

矢一筋 山手樹一郎
将棋主従 山手樹一郎
春風街道 山手樹一郎
暴れ姫君 山手樹一郎
恋慕奉行(上) 角田喜久雄
恋慕奉行(下) 角田喜久雄
半九郎闇日記(上) 角田喜久雄
半九郎闇日記(下) 角田喜久雄
寝みだれ夜叉(上) 角田喜久雄

寝みだれ夜叉(下) 角田喜久雄
盗っ人奉行(上) 角田喜久雄
盗っ人奉行(下) 角田喜久雄
花太郎呪文 角田喜久雄
折鶴七変化 角田喜久雄
闇太郎変化 角田喜久雄
妖異忠臣蔵 角田喜久雄
春風まぼろし谷(上) 角田喜久雄
春風まぼろし谷(下) 角田喜久雄
黒潮鬼 角田喜久雄
緋牡丹盗賊 角田喜久雄
月姫系図 角田喜久雄
まぼろし若衆 角田喜久雄
酔いどれ牡丹 角田喜久雄
姫夜叉行状記 角田喜久雄
元禄太平記 角田喜久雄
変化如来 角田喜久雄
振袖地獄 角田喜久雄

緋鹿子伝法 角田喜久雄
霧丸霧がくれ 角田喜久雄
虹に立つ侍 角田喜久雄
兵之介闇問答(上) 角田喜久雄
兵之介闇問答(下) 角田喜久雄
耳姫三十五夜 角田喜久雄
悪霊の城 角田喜久雄
影丸極道帖(上) 角田喜久雄
影丸極道帖(下) 角田喜久雄
海風山風(上) 角田喜久雄
海風山風(下) 角田喜久雄
白蠟小町 角田喜久雄
舟姫潮姫 角田喜久雄
お小夜悲願 角田喜久雄
神変八咫烏 角田喜久雄
雪太郎乳房 角田喜久雄
赤姫秘文 角田喜久雄

怪塔伝(下) 角田喜久雄
次郎長三国志 村上元三
たつまき奉行 陣出達朗
火の玉奉行 陣出達朗
はやぶさ奉行 陣出達朗
長脇差奉行 陣出達朗
けんか奉行 陣出達朗
わんぱく大名 陣出達朗
わんぱく二度笠 陣出達朗
よさこい奉行 陣出達朗
まぼろし奉行 陣出達朗
すっとび奉行 陣出達朗
復讐の美女鬼 陣出達朗
孔雀駕籠 陣出達朗
隠密姫 陣出達朗
隠密将軍と喧嘩大名 陣出達朗
らんまん剣士 陣出達朗
鬼姫悲願 陣出達朗

おんみつ奉行 陣出達朗
影の人形師 陣出達朗
世直し魔剣 陣出達朗
犬姫様 陣出達朗
黄金・万花峡 陣出達朗
逆立ち大名 陣出達朗
わんぱく剣士 陣出達朗
騎馬奉行まかり通る 陣出達朗
わんぱく将軍 陣出達朗
くろかみ秘蝶 陣出達朗
鳴門美女剣 陣出達朗
夕立けんか旅 陣出達朗
わんぱく東海道 陣出達朗
鍔鳴美剣士 陣出達朗
旗本退屈男 佐々木味津三
黄門廻国記 直木三十五
水戸黄門 山岡荘八
上方武士道 司馬遼太郎

梟の城 司馬遼太郎
風神の門 司馬遼太郎
真田幸村 尾崎士郎
仇討ち物語 池波正太郎
錯乱 池波正太郎
うつせみ忍法帳 早乙女貢
まぼろし若殿 早乙女貢
伊賀忍法 早乙女貢
江戸まだら蛇 早乙女貢
斬らずの若殿 早乙女貢
忍法女笛 早乙女貢
忍法関ガ原 早乙女貢
忍法雪月花 早乙女貢
さむらい鴉 早乙女貢
きまぐれ剣士 早乙女貢
忍法紅絵図 早乙女貢
大江戸花暦 早乙女貢
青春の剣 早乙女貢

黒潮姫 早乙女貢
江戸浪人街 早乙女貢
忍法車一族 早乙女貢
剣鬼秘伝 早乙女貢
剣客往来 早乙女貢
江戸の小鼠 早乙女貢
戦国恋編笠 早乙女貢
慶長水滸伝 早乙女貢
八幡船伝奇 早乙女貢
鶴千代血笑 早乙女貢
風流剣士 早乙女貢
江戸の恋とんび 早乙女貢
東海道をつっ走れ 早乙女貢
志士の女たち 早乙女貢
幕末の刺客 早乙女貢
竜馬を斬った男 早乙女貢
さむらいの詩 早乙女貢
御家人無頼 早乙女貢

魔笛大名 早乙女貢
花の無法剣 佐竹申伍
若殿まかり通る 佐竹申伍
変化若君 佐竹申伍
真田軍団はゆく 佐竹申伍
むらさき若殿 颯手達治
やまざる大名 颯手達治
若さま地獄旅 颯手達治
ひょうたん侍 颯手達治
若さま隠密帳 颯手達治
若さま恋頭巾 颯手達治
若さま影法師 颯手達治
若さま風来坊 颯手達治
悪たれ若殿 颯手達治
若さま変化 颯手達治
若さま伝法 颯手達治
若さま小天狗 颯手達治
若さま旅日記 颯手達治

若さま青春記 颯手達治
若さま犯科帳 颯手達治
若さま居候 颯手達治
若さま鬼面帳 颯手達治
若さま刺客帳 颯手達治
若さま絵図帳 颯手達治
若さま獄門帳 颯手達治
若さま包丁控 颯手達治
若さま東海道 颯手達治
若さま人別帳 颯手達治
若さま御朱印帳 颯手達治
若さま秘殺帳 颯手達治
若さま中山道 颯手達治
若さま退屈帳 颯手達治
若さま幽霊帳 颯手達治
若さま箱根八里 颯手達治
素浪人大名 江崎俊平
消えた若殿 江崎俊平

江戸っ子大名 江崎俊平
気まぐれ大名 江崎俊平
闇法師変化 江崎俊平
黒百合秘帖 江崎俊平
おもかげ大名 江崎俊平
夕雲峠 江崎俊平
朝姫夕姫 江崎俊平
江戸の野獣たち 江崎俊平
まぼろし絵図 江崎俊平
影法師推参 江崎俊平
江戸の風来坊 江崎俊平
白面剣士 江崎俊平
孤剣街道 江崎俊平
江戸の小天狗 江崎俊平
恋残月 江崎俊平
月夜に来た男 江崎俊平
ひとり鷹 江崎俊平
振袖伝 奇江崎俊平

孤剣士峠 江崎俊平
三日月悲帖 江崎俊平
闇姫伝奇 江崎俊平
花の素浪人 江崎俊平
千両鷹 江崎俊平
剣は流れる 江崎俊平
黒十字秘文 江崎俊平
鬼姫剣法 井口朝生
忍者は斬れ 木屋進
浪人恋変化 木屋進
忍法おぼろ陣 木屋進
仇夢ごよみ 木屋進
赤獅子秘文 木屋進
おとぼけ侍 北園孝吉
めおと大名 風巻絃一
剣豪次男坊 侍風巻絃一
からくり殺法 風巻絃一
竜馬とその女 風巻絃一

柳生十兵衛 大塚雅春
血汐笛 柴田錬三郎
源氏九郎颯爽記 柴田錬三郎
主水血笑録 柴田錬三郎
遊太郎巷談 柴田錬三郎
おれは侍だ 柴田錬三郎
南国群狼伝 柴田錬三郎
異常の門 柴田錬三郎
忍者からす 柴田錬三郎
度胸時代 柴田錬三郎
江戸っ子侍(上) 柴田錬三郎
江戸っ子侍(下) 柴田錬三郎
明治一代男 柴田錬三郎
風魔鬼太郎 柴田錬三郎
剣豪にっぽん 柴田錬三郎
裏返し忠臣蔵 柴田錬三郎
大峰の善鬼 柴田錬三郎

人斬り斑平 柴田錬三郎
旗本伝法 土師清二
無頼三十万石 土師清二
女犯地獄 野村敏雄
異聞忍者列伝 野村敏雄
反江戸獄門党 野村敏雄
風流天狗剣 順史
恋ぶみ侍 郡順史
剣に賭ける 佐文字雄策
地獄草紙 名和弓雄
土と炎と城 名和弓雄
天国一刀流 多勢尚一郎
若獅子一刀流 多勢尚一郎
柳生無刀剣 松永義弘
天保あばれ振袖 松永義弘
素浪人横丁 相良俊輔
続・素浪人横丁 相良俊輔
さすらいの狼 生島治郎

恋花 火江本清

若さま侍捕物手帳

双色渦巻城 昌幸
五月雨ごろし城 昌幸
人化け狸城 昌幸
幽霊駕籠城 昌幸
虚無僧変化城 昌幸
天を行く女城 昌幸

人形佐七捕物帳全集 全14巻

(1)ほおずき大尽 横溝正史
(2)遠眼鏡の殿様 横溝正史
(3)地獄の花嫁 横溝正史
(4)好色いもり酒 横溝正史
(5)春宵とんとんとん 横溝正史
(6)坊主斬り貞宗 横溝正史
(7)くらやみ婿 横溝正史
(8)三人色若衆 横溝正史
(9)女刺青師 横溝正史
(10)小倉百人一首 横溝正史
(11)鼓狂言 横溝正史
(12)梅若水揚帳 横溝正史
(13)浮世絵師 横溝正史
(14)緋牡丹狂女 横溝正史

伝七捕物帳

(1)女孤が来る 陣出達朗
(2)笑いざる 陣出達朗
(3)女狐小判 陣出達朗
右門捕物帖(1) 佐々木味津三
右門捕物帖(2) 佐々木味津三
右門捕物帖(3) 佐々木味津三
右門捕物帖(4) 佐々木味津三
江戸犯科絵図和巻 耿介
江戸ねずみ犯科帳和巻 耿介
ゆっくり雨太郎捕物控 多岐川恭
続ゆっくり雨太郎捕物控 多岐川恭
御朱印銀次捕物帳 島田一男

同心部屋御用帳

(1)はだぬぎ弁天 島田一男
(2)紅の小指 島田一男
(3)位牌間男 島田一男
(4)色道丁半 島田一男

菊太郎事件控

(1)狂恋ぶろ 島田一男
(2)お腹拝見 島田一男
(3)お添い寝比べ 島田一男
(4)夢屋敷の女 島田一男
開化探偵帳 島田一男
此村大吉無頼帖 早乙女貢
三角館の恐怖 江戸川乱歩

江戸川乱歩名作集 全9巻

(1)陰獣 江戸川乱歩
(2)パノラマ島奇談 江戸川乱歩
(3)屋根裏の散歩者 江戸川乱歩
(4)D坂の殺人事件 江戸川乱歩

(5)人間椅子 江戸川乱歩
(6)月と手袋 江戸川乱歩
(7)心理試験 江戸川乱歩
(8)ペテン師と空気男 江戸川乱歩
(9)偉大なる夢 江戸川乱歩

江戸川乱歩長編全集 全20巻

(1)孤島の鬼 江戸川乱歩
(2)蜘蛛男 江戸川乱歩
(3)魔術師 江戸川乱歩
(4)猟奇の果 江戸川乱歩
(5)黄金仮面 江戸川乱歩
(6)吸血鬼 江戸川乱歩
(7)白髪鬼 江戸川乱歩
(8)妖虫 江戸川乱歩
(9)人間豹 江戸川乱歩
(10)黒蜥蜴 湖畔亭事件 江戸川乱歩
(11)緑衣の鬼 江戸川乱歩
(12)大暗室 江戸川乱歩
(13)悪魔の紋章 江戸川乱歩
(14)幽霊塔 江戸川乱歩
(15)一寸法師 地獄の道化師 江戸川乱歩
(16)暗黒星 闇に蠢く 江戸川乱歩
(17)幽鬼の塔 恐怖王 江戸川乱歩
(18)化人幻戯 江戸川乱歩
(19)影男 江戸川乱歩
(20)十字路・盲獣 江戸川乱歩
奇蹟の扉 大下宇陀児
宙に浮く首 大下宇陀児
高木家の惨劇 角田喜久雄
虹男 角田喜久雄
霧に棲む鬼 角田喜久雄
奇跡のボレロ 角田喜久雄
黄昏の悪魔 角田喜久雄
笛吹けば人が死ぬ 角田喜久雄

横溝正史長編全集 全20巻

(1)本陣殺人事件 横溝正史
(2)蝶々殺人事件 横溝正史
(3)不死蝶 横溝正史
(4)吸血蛾 横溝正史
(5)スペードの女王 横溝正史
(6)扉の影の女 横溝正史
(7)夜の黒豹 横溝正史
(8)悪魔の百唇譜 横溝正史
(9)火の十字架 横溝正史
(10)魔女の暦 横溝正史
(11)支那扇の女 横溝正史
(12)壺中美人 横溝正史
(13)死神の矢 横溝正史
(14)毒の矢 横溝正史
(15)堕ちたる天女 横溝正史
(16)貸しボート十三号 横溝正史
(17)華やかな野獣 横溝正史
(18)蠟美人 横溝正史
(19)迷路の花嫁 横溝正史

⑳金田一耕助の冒険 横溝正史
昼なき男 島田一男
野獣の夜 島田一男
湖底の囚人 島田一男
妖精の指 島田一男
東京暗黒街 島田一男
仮面の花嫁 島田一男
自殺の部屋 島田一男
トップ屋事件簿 島田一男
座席番号13 島田一男
特ダネ記者 島田一男
銀座殺人事件 島田一男
赤い影の女 島田一男
女事件記者 島田一男
特ダネはもらった 島田一男
錦絵殺人事件 島田一男
古墳殺人事件 島田一男
黒いカルテ 島田一男
夜光る妖精 島田一男
冥土の顔役 島田一男
黒い霧の東京 島田一男
事件弁護士 島田一男
夜を生きる男 島田一男
黒い事件簿 島田一男
悪魔の系図 島田一男
拳銃を磨く男 島田一男
殺人名簿 島田一男
上を見るな 島田一男
捜査一課 島田一男
最終都内版 島田一男
人喰いの夜 島田一男
犯罪乱流 島田一男
死神の地図 島田一男
白と黒の谷間 島田一男
北向海流 島田一男
炎の地図 島田一男
素足の悪魔 島田一男
青い手の女 島田一男
その灯を消すな 島田一男
青衣の魔女 島田一男
鉄道公安官 島田一男
0番線 島田一男
待避線の狼 島田一男
灰色の終着駅 島田一男
幻の新幹線 島田一男
火の国特急 島田一男
海抜455 島田一男
捜査線ナンバー・ゼロ 島田一男
新宿25時 島田一男
Qを出す男 島田一男
ふざけるな 島田一男
地図を歩く男 島田一男
波の墓標 島田一男
スキャンダル作戦 島田一男

銀座特信局 島田一男
恋文泥棒 島田一男
食虫花 島田一男
醜聞殺し 島田一男
黒い時刻表 島田一男
黄金都市 島田一男
夜の警視庁 島田一男
夜の捜査線 島田一男
黒い津軽海峡 島田一男
埴輪の柩 島田一男
東京ハイウエー 島田一男
国道0号線 島田一男
能面殺人事件 高木彬光
姿なき怪盗 甲賀三郎
誰の屍体か 鮎川哲也
りら荘事件 鮎川哲也
鉄鎖殺人事件 浜尾四郎
殺人鬼 浜尾四郎
博士邸の怪事件 浜尾四郎
殺人小説集 浜野四郎
追跡七十三時間 長谷川公之
顔のない女 長谷川公之
魔の伝言板 長谷川公之
血液型の秘密 長谷川公之
深夜便一〇三列車 長谷川公之
七人の追跡者 長谷川公之
刑事の履歴書 樫原一郎
闇を裂く男 樫原一郎
警視庁ハキダメ一家 樫原一郎
黒のパスポート 樫原一郎
小説警視庁 樫原一郎
0号作戦 樫原一郎
霧に溶ける笹沢左保
死と挑戦 笹沢左保
恐怖の終局 笹沢左保
天の踊り 黒岩重吾
休日の断崖 黒岩重吾
賭博の街 黒岩重吾
腐った太陽 黒岩重吾
檻を出た野獣 黒岩重吾
生きた造花 黒岩重吾
朝を待つ女 黒岩重吾
幻の広告 黒岩重吾
夜の花が落ちた 黒岩重吾
青い枯葉 黒岩重吾
若狭湾の惨劇 水上勉
黒の構図 佐賀潜
黒の捜査者 佐賀潜
謀略 佐賀潜
華やかな死体 佐賀潜
社外極秘 邦光史郎
巨人商社 邦光史郎
黒の連鎖反応 邦光史郎
泥の勲章 邦光史郎

悪の肖像 邦光史郎
危険な時間 邦光史郎
死を呼ぶクイズ 幾瀬勝彬
女子大生殺害事件 幾瀬勝彬
遠い殺意 幾瀬勝彬
幻の魚殺人事件 幾瀬勝彬
声優密室殺人事件 幾瀬勝彬
私立医大殺人事件 幾瀬勝彬
殺意の墓標 幾瀬勝彬
幽霊紳士 柴田錬三郎
瀬戸内海殺人事件 草野唯雄
抹殺の意志 草野唯雄
秘密パーティ 佐野洋
高すぎた代償 佐野洋
賭の季節 佐野洋
貞操試験 佐野洋
未完の遺書 佐野洋
未亡記事 佐野洋

重い札束 佐野洋
再婚旅行 佐野洋
光の肌 佐野洋
旅をする影 佐野洋
勝海舟の殺人 斎藤栄
古都殺人事件 斎藤栄
殺人の棋譜 斎藤栄
爆破都市 斎藤栄
真夜中の意匠 斎藤栄
愛と血の港 斎藤栄
消えた超人 高原弘吉
サーキット殺人事件 高原弘吉
未完試合 高原弘吉
孤狼の足跡 高原弘吉
秘密の背景 高原弘吉
落日の墓標 山村正夫
裂けた背景 山村正夫
華麗なる戯れ 山村正夫

遥かなる死の匂い 山村正夫
歪んだ太陽 山村正夫
刑事拳銃38 山村正夫
悪人狩り 山村正夫
野望の接点 黒木曜之助
逆光のブルース 黒木曜之助
殺意の競合 黒木曜之助
殺人幻野 黒木曜之助
横を向く墓標 黒木曜之助
殺しに報酬はない 黒木曜之助
欲望の設計 黒木曜之助
あの墓を掘れ 生島治郎
死はひそやかに歩く 生島治郎
狙われる男 生島治郎
報酬か死か 生島治郎
ひまわり娘 源氏鶏太
初恋物語 源氏鶏太
ホープさん 源氏鶏太